

Forgery No.XXXX-

Imitation of the golden witch

~黄金の魔女の模造品~
(上)

「うみねこのなく頃に」原作者の竜騎士 07 氏。
かつて5ちゃんねるの同人ゲーム板に存在した
「屁理屈推理合戦スレ」で鎬を削っておられた
偉大なる先人の魔女・ニンゲン達。
それ以外の全ての場所で活躍された魔女達。
カケラの海に漂う棋譜を、
後から追い掛けてきた探求者達。
偉大なる元老院の魔女大ベルンカステル卿
並びに大ラムダデルタ卿。
知的にして聡明なる真実の魔女エリカ卿。
この無限の魔法体系の原点である、
大ベアトリーチェ卿、
その最愛の夫であるバトラ卿の、六軒島領主ご夫妻。

……そしてなによりも。
私という魔女を産んでくれた、
とあるコミュニティの魔女・ニンゲン達。

その全てに、この物語を捧げる。

愛がなければ見えない。
けれどその愛を如何にして持てば良いというのか。
それに対して私という魔女が導き出した結論は、
「ならば先に魔女にしまえば良い」だった。
屁理屈推理合戦は、無限ならずとも無尽に
地より湧き出すニンゲンを、極めて効率的に
魔女へと押し上げることが可能な儀式である。
この物語によって「あなた」がその一端に触れ、
私と同じ宇宙を共有してくれたならば、
私にとってそれ以上に嬉しいことはない。

目次

Forgery No. XXXX-

Imitation of the golden witch

〜黄金の魔女の模造品〜

6

《??》

8

《ゲーム盤上の設定環境》

11

《一九八六年一〇月四日二三・五五種》

16

《一九八六年一〇月五日〇七・〇〇／気配》

30

《鍵の選びし六人》

47

《上層世界／第一の晩》

82

《一九八六年一〇月五日一〇・三〇／不和》

90

《一九八六年一〇月五日一一・〇五／□□》

130

《一九八六年一〇月五日一一・二五／家族》

160

9 《引き裂かれし二人》 20

3 《一九八六年一〇月五日一二・五〇／絶対の約束》 32

6 《上層世界／第二の晩》 24

6 《一九八六年一〇月五日一二・二〇／死神の鎌》 25

5 《幕間／厨房》 29

おはようございます。
大変永らくお待たせ致しました。

本日はとある魔女の手になるゲーム盤……その第五の晩の犠牲者が発覚するまでの抜粋部分をお持ち致しました。

その魔女はかつて「こんな物を作る手間があるならラブレターを書け」と悪態を吐いたことがありましたが、その言葉故に、その言葉があったからこそ、このゲーム盤は構築されました。

つまり、これはとある魔女からあなた様へと捧げるラブレター。

全てをそこに記しました。
全てをそこに残しました。
ベアトリーチェ卿が、バトラ卿へと向けたように。
全ては、あなた様への信頼と親愛を込めて。

だからこれは模造物。
黄金の魔女のゲーム盤へと敬意を捧げ、
親愛なる読者のあなた様へと捧げる模造品なのです。

難易度は標準。
数多の物語を巡ってきた皆様を騙すなど、とてもとても。
けれど皆様次第では極上とも、簡単とも転ぶでしょう。
ミステリーとは、そういうものでございます……。

この物語はどうせ幻想に決まっています。
実在する如何なる個人、団体、地名、事件、作品とも
関係あるはずありません。

この物語は未だ完成していません。
物語が完成した際に、今宵公開された部分がそのまま
残っている保証ありません。

それでもよろしいという方。
或いは、私のゲーム盤を覗き見たいという方。
そんな愛おしき読者にして探偵の皆様のみ、この先を
お読み下さい。

《??》

——人間には、様々な顔がある。

世界の、どの地域においても語られる、ありふれた言説だ。

無論その言説における顔とは、態度や、感情、雰囲気、その他様々な要素で構成されるものであり、ただ単に顔といってもその人の風貌そのものを指す訳ではない。

そして、世界に完全に同一な人間が存在しないように、その顔も様々な意味と、その対となる顔を持つ。

それは例えば、日頃から紳士的な態度で振る舞う青年が、その内には卑屈で自己肯定感に乏しい一面を秘めているように。

それは例えば、男勝りの快活な少女が、純な乙女そのものの初々しい感情を内に隠し抱えているように。

……それは例えば、妻へと熱心に愛を語る男が、裏ではビジネスパートナーと密通を交わしていたように。

……そして、それは例えば、人情に厚く誰かの痛みを理解できる青年が、何かの機会さえあれば冷徹に、それら全てを排除して思考することも可能なように。

人間には、ニンゲンには、様々な顔がある。

それは、社会の中で生きるには、欠かせないものだ。

一人で生きていけるニンゲンなど存在しない。

生命的には一人で生きていけるのだとして

も、一人で生きている時点で、それはもうニンゲンではないのだ。

だから、ニンゲンは、多くの顔を持つ。

より多くのニンゲンと関わり、自分がニンゲンであるために、あり続けるためにそれは必要なこと。

この一つの真理を魔法理論で表現したのが、『宇宙を生み出す最少人数は二人』なのだ。

……けれど、家具はそうではない。

家具は、ただ一つの目的のために生み出された存在。

本質的には、ただ一つの目的のためだけに生み出され、そしてそれに殉じてその役目を終える。

魔女の家具は多くの場合複合的な役割を果たすことが可能なため、一見してそれに反するように見えるが、それは結局のところその一つの役割を果たすために副次的に得た技能ではない。

だから、多くの場合、家具はその目的を果たすことが不可能となった時点で機能を停止

する。

それは、ニンゲンの視点では死んだと見なすことも可能かもしれない。

或いは、職務を果たし、職を辞したとも表現できるかもしれない。

しかし仮に、その目的を果たすことが不可能となった家具が、それでもなお稼働しているというのであれば。

それはきっと、家具ですらないのだろう。

それはきっと、只の模造物。

人に似せた、人形でしかないのだ。

《ゲーム盤上の設定環境》

・ 一九八六年一〇月四日から一〇月五日にかけての二日間に渡り、伊豆諸島の離島、六軒島において右代宮一族が集う親族会議が開催される

・ 一九八六年一〇月四日一二:〇〇時点において、六軒島に存在するのは、

・ 右代宮家当主

うしろみや きんぞう

右代宮 金蔵

・ 金蔵の長男にして次期当主

右代宮 蔵白 くらうす

・ 金蔵の長女

右代宮 絵羽 えば

・ 金蔵の次男

右代宮 留弗夫 るどるふ

・ 金蔵の次女

右代宮 楼座 ろうざ

・ 蔵白と夏妃の娘

右代宮 朱志香 じえしか

・ 絵羽と秀吉の息子

右代宮 譲治 じょうじ

・ 留弗夫と先妻、明日夢の息子

右代宮 戦人 ばとら

・ 楼座の娘

右代宮 真里亞 まりあ

・ 蔵臼の妻

右代宮 夏妃 なつひ

・ 絵羽の夫

右代宮 秀吉 ひでよし

・ 留弗夫の妻

右代宮 霧江 きりえ

・ 金蔵の主治医にして親友

南條 輝正 なんじょう てるまさ

・ 使用人頭

呂ノ上 源次 ろのうえ げんじ

・ 片翼の紋章を持つ使用人

紗音 しゃのん

・ 片翼の紋章を持つ使用人

嘉音 かのん

・ 専属料理人

郷田 俊朗 ごうだ としろう

・ 年配の使用人

熊沢 チヨ

以上、一八名。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

“character.1”が更新されました。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

・六軒島は絶海の孤島である。

最寄りの新島（伊豆諸島を形成する内の一

島）より、船で三〇分を要する。

・一九八六年一〇月四日は午後より台風の接近により天候が悪化。

船による上陸、及び出港が不可能となり、

島からの出入りが阻まれる。

・よって、現在島内に存在するのは右代宮の関係者のみ。

……と、親族会議の出席者達は認識している。

・島内には当主である金蔵の隠し黄金の噂と、「黄金の魔女 ベアトリーチェ」なる存在の噂が広まっている。

・右代宮の屋敷には謎めいた「碑文」が掲

げられている。

この碑文を解いた者は金蔵の隠し黄金を手に入れられると噂されている。

・金蔵の余命は残り僅かであると宣告されている。

そのため莫大な遺産の相続が親族達の争点となっている。

・四日夜

夕食のメニューはステーキ。

夕食後に真里亜がベアトリーチェより渡さ

れたと称する手紙を朗読。

親族達の間に衝撃が奔る。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

“tips.1” が更新されました。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

・同日夜半、戦人が留弗夫に呼び出され

る。親子の親睦を深める、という名目で留弗

夫、霧江、戦人でしばらく会話。

・戦人がいここ部屋に帰ってきた段階で既に朱志香讓治真里亞は就寝している。その際、部屋を退出する楼座と入れ違いになる。

以上の前提を踏まえた上で、ゲーム盤を開始する。

《一九八六年一〇月四日二三・五五種》

いて何がしてえってんだ……」

「……つとと。…うげ、もしかして、皆はもう寝ちまった感じっすか？」

「ええ。さっきまで私も入れてトランプをしていたのだけど、真里亜がウトウトし始めてそのままお流れ。戦人君は留弗夫兄さんと霧江姉さんと何かお話？」

「そうっすね。まあクソ親父は何が言いたいのかはつきりしませんでしたけど…。ったく、クソ親父め、酒まで飲んで近況なんぞ聞

「留弗夫兄さんはそういうところあるものね。大事な話をしようとする途中で怖じ気づいて関係ないことで誤魔化しちゃうのよ」

「へー、あのクソ親父が……」

「ええ。戦人君はあまり馴染みがないでしょうけれど……それにしても戦人君は本当に大きくなったわね」

「勘弁してくれよ、楼座叔母さん…。それ言われる度に小っ恥ずかしくて仕方ねえんだから」

「ふふ。ごめんなさい、だって、まるで別人のように成長しているんだもの」

「最初に空港で顔を見たとき、『この子本当に戦人君なの?』って思ったくらい」

「……」

「……戦人君?」

……くすりと笑った後に楼座が放った言葉は、何故か、ほんの一瞬だけ……ほんの一瞬だけ、その場の空気を硬直させる……。

それはまるで、毒……。たった僅かな量で大型の猛獣をも昏倒させてしまう、致命の毒……。

大きく成長して、まるで別人のようだ。というただそれだけの言葉が、どうしてここま

で罅を奔らせるのか……。

「……そーつすねー、ここ数年身長が伸びに伸びまくったせいで、久しぶりに会ったような人には大抵そう言われるんすよ！ でも楼座叔母さんにまでそんなこと言われちゃうのはちよーつと寂しいかもー…なんつって！」

「……ふふつ、ごめんなさい。でも、本当に立派になったわね、戦人君」

……いや、それは本当にそうだったのだろ

うか。

この叔母と甥の和やかな会話に、一滴だけ垂らされた毒のような、僅かな不和など存在しないように見える……。

けれど、やはりどこか……。

「六年ぶりの六軒島がこんな黄金と魔女の騒ぎに巻き込まれてしまったのは残念だけど、本当なら主賓は戦人君なんだから。……明日はゆっくり過ごせると良いわね」

「……ええ、ほんとそう願いたいもんっすね」

「……。……あら、話し込んだじゃったわ。私も自分の部屋に戻ろうかしら……」

「あ、じゃあ俺もこのまま寝るんで、お開きっすね」

……本来なら、この会話はもっと和やかに、いつまでも続けられていたのでは、と。楼座は何故か、思う……。

そして仮にその理由が何か存在するのだとすれば、それはきつと先程の発言故なのではないか……。まるで別人のように成長した、という彼女の言葉に、何故か戦人は硬直し、そしてそれ以降の会話に僅かな不協和音を生じさせたのだ……。と。彼女は、思ってたまう……。

「……ええ、それじゃあお休みなさい、戦人君」

「うーっす、また明日。今度は俺もトランプに入れてくださいよ。自分、ハッタリには自信あるんすよ！」

「楽しみにしておくわ。それじゃあお休みなさい」

……そんな筈はない。

六年前から変わらずに快活なこの甥に、そんな不可解な陰など、あるはずがないのだ。

ほら、その証拠に今も彼は朗らかに手を振っているではないか……。

……。

……………。

……………仮に、もしも。いとこ部屋から去って行く自分に、彼がまだ手を振っているのだとしたら。

それはもしかして……自分がちゃんと去ったかどうかを確認するためなのでは……？

「……」

そんな突拍子もない考えに突如駆られ、棲座は後ろを……。

「……………」

いや、止めておこう。

そんな訳はない。彼は可愛らしい甥の右代宮戦人なのだ……。きっと親族会議で自分も疲れているだけ、変な考えが浮かんだだけ……。

そう自分を納得させて、楼座は一瞬止めかけた足を再び歩ませる……。

今は、ただ、ベッドに横になり、身体を休

めたい……。

……歩み去って行く楼座を見送り、戦人はいとこ部屋の前で少しか立ち止まる。

その口元には……、うつすらとした笑みが、朗らかな物ではない、別種の笑みが、浮かんでいた……。

「……別人かと思った、か……いっひっひ」

「そりゃあ……傑作だぜ……」



……そして、時刻は24時。

いとこ部屋の中で、譲治も、朱志香も、真里亜も……そして戦人も、既に眠っています。

ぐっすり、ぐっすり……。

特に戦人の眠りはとても深いものです。六年ぶりの六軒島という環境が、彼を疲労させたのでしょうか。

それとも、なにか大事な用事でもこなしてきた後なのかも。

だから、戦人は何が起きても気がきません。

だって、まるで魔法で眠らされたとも言わんばかりにぐっすりと眠ってしまっているのだから。

今の戦人はきつと、真里亜に飛びかかられようとも眼を覚ますことはないでしょう。

だから、「これから何があっても気付けない……！」

……数多のゲームで、戦人の前に黄金の魔

女が直接その姿を顕わしたことは数える程しかありません。それは偏に、彼が非常に高い魔法抵抗力を持つが故。

魔力が六軒島というゲーム盤を塗りつぶし、右代宮戦人という白のキング以外の全てを黒に染め上げるまで、彼が存在するだけで黄金の魔女の顕現は阻まれてしまう……。

……けれど。
ええ、けれど。

今の戦人は起きない、見えない、聞こえない

い、そして観測できない。

……蠟燭？ ランプ？ か細く、揺れる光
……。

それはつまり『そこに存在しないのと変わらない』ということなのです。

誰かが、小さな灯りと共に室内を動いている……？

……だから、こんな事も起きるのです…

……いいえ、いいえ。

…。

違います。それは違うのです。

暗闇に沈んだいとこ部屋に……、ポウ、と

……それは、蠟燭でも、ランプでもなく、

……。

それは……。

小さな光が……漂います……。

……くつくくく……。

くつくつくつく……。

小さな、笑い声……。

含み笑いのような、或いは、嘲笑のような

……。

その声と共に、ぼんやりとした光源が、強

く、輝いて……。

「……くつくつく……！ ああそうであ

ろう、そうであろう！ “傑作”であるよ

なア、戦人ア！」

その姿が、暗闇の中を羽ばたく黄金の蝶が

……、一瞬の雷鳴と共に……。

黄金の魔女の姿へ……無限の魔女、ベアト

リーチェの姿へと変わる……！！

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

“character.2” が更新されました。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「時計の針が二四時を回るぞ！ 一日が終わ

り、新たな一日が終わる狭間の時間！ 即ち

妾の魔力が満ちる時！」

魔女は両手を掲げ、宣言します。

そう、これからは魔女の時間……。黄金蝶

が乱舞し、魔女の眷属達が嘲り笑う魔の時間

……！ それを祝うように雷鳴が再び轟き、

窓から差し込む稲光が部屋を真白く照らし…

…、それが収まった時にはもう、部屋の中は

黄金蝶達に満ちた異界風景に塗り替えられて

いるのです……。

「さあ初手は妾の手番で進めさせてもらおう
か……！」

そう上機嫌に呟きながら、魔女は戦人へと
歩み寄ります……。

勿論戦人はそれが見えない、聞こえない、
観測できない。だから彼女を認められない。

「妾というクイーンがそなたというキングの
前に姿を晒す訳だが……今回の趣向に関して
はむしろそなたが他の駒によって身動きが出

来ぬ状態であるとも言えるか？ ピンアップ
というやつであるな！ くつくつく！」

魔女は楽しそうに戦人の鼻をぐにぐにと摘
まみ、その頬を押したり引つ張ったりします
が、戦人は起きません。ねぼすけさんです
ね。

けれど寛大な魔女は失礼なその態度に気を
悪くすることなく、今にもキスができそう
なほどに近付いていた身体を起こし、眩い室
内を見渡します。

「……さて、此度の駒の配置は……ふむ…
…」

その姿は可憐で、千年を生きた無限の魔女
と呼ぶには恋する乙女のように無邪気でし
た。

しかし、眼を閉じて考え込むその愛らしい
表情の奥で渦巻くのはめくるめく連続魔法殺
人の恐るべき計画なのです。魔法で全てを解
決し、魔法で全てを説明してしまう計画殺人
というにはあまりにも暴力的過ぎる計画が、

この黄金の魔女の脳裏では今正に練り上げられているのです……。

……そして、しばしの黙考の後、魔女はぱちりと眼を開いて方針を告げました。

「よかろう、此度の第一の晩はラムダデルタ卿のゲームに則って進行するでしょう！ 出でよ我が眷属達！ 運命のルーレットはこの六人を示したぞ！ 荒れ狂え、狩り尽くせ、その全てを我が元へ！」

その声と共に現われる人影が三つ……。

うさぎの耳を付けた奇妙な人影が二つ、奇天烈なドレスを纏う人影が一つ……。

彼らによつて第一の晩の惨劇は幕を開けるのです……。

「この一手を以て此度のゲームの初手としてうではないかッ！ さあ来いッ、右代官戦

人
ア
ア
ア
ツ
!!
」

《一九八六年一〇月五日〇七：〇〇〇気配》

「……………」

——テレビから、音が流れてくる。

台風は今晚にでも関東地方へと到達し、これによって伊豆諸島地方はその影響から脱すると気象庁は発表を——などと。

そんなニュースキャスターの声を、戦人はぼんやりとした頭で聞いていた。

「……………ん……………朝、か……………」

戦人は自分がスーツのままベッドに突っ伏していたことに気付く。

起き上がり、ベッドの脇に腰掛けてそのまま数分ほどテレビを眺めていたが、なにかがおかしい。

けれど、寝起きでぼんやりとした頭はその違和感に気付かない。

ぺしぺしと頬を叩き、数秒ほど何をおかしと感じたのか思考を巡らせて、それに気付く。

音が、少なすぎる。

……………この部屋に昨夜戻ってきた時、既に寝

ていた真里亞、ウトウトし始めていた朱志香、そして眼を瞑っていただけの譲治。その三人分の呼吸音が存在していた筈だ。

それなのに、今のこの部屋には戦人自身の身じろぎする音と、テレビから流れてくる音、そして昨夜から変わらない雨音だけしか存在しない。

「あ………?」

周囲を見渡すと、ベッドが幾つか並んでいる。そして、その上に寝ている筈の真里亞、

朱志香、譲治。

その姿が——ない。

どこにも、存在しない。

どのベッドも、誰かが寝ていた痕跡など存在しない。

昨日の昼ここに荷物を持ってきた時のそのまま、きつちりと整頓された掛け布団が並んでいるだけだった。

ベッドが並んでいる位置からは死角となる洗面所や浴室などに誰か居ないかと探してみるものの、やはり誰もいない。

「んだよ……皆俺を置いて屋敷の方に行っち
まっただつてのかぁ……？」

戦人は立ち上がる。

リモコンは何処だろう。

見当たらないが、まあ別に付けっぱなしに
していても問題ないだろう。

どうせ後で戻ってくることになるのだ…

…。

そんなことを考えながら、顔を洗い、部屋

を出た。ベッド脇に置いてあった鍵で施錠し
て、そのまま屋敷へと向かう。

ゲストハウスに置いてあった本本の傘から
一本を引き抜いて、戦人はゲストハウスを出
るのだった。



「くっそお……頭がいてえ……」

「もう……飲み過ぎよ留弗夫さん」

「……んだよ、二日酔いかよクソ親父」

屋敷の客間に入った戦人が目にしたのは頭を抱えて唸る留弗夫と、それに対して水の入ったグラスを渡す霧江の姿だった。

いとこ部屋でのニュース番組と同じものが映っているテレビから流れる音。

窓の外から響く雨と風の音。

そして会話する二人。

それ以外に気配はなく、客間はどことなくがらんとしていた。

「あら戦人君。おはよう」

「うーっす。おはようございます霧江さん」

「……おう、戦人か……悪いが、静かな良い

子ちゃんて居てくれるとお父様は嬉しいね……」

……譲治、朱志香、真里亜の姿は、無い。

散歩にでも行っているのだろうか。……

こんな雨の中で？

いや、真里亜が何らかの癪癪を……例えば

ば、薔薇庭園に真里亜の薔薇を探しに行きたい、なんて言い出して、譲治の兄貴がまだ寝ていた俺を起こすのを躊躇って朱志香と一緒に連れて行ってくれた……というような想像も、出来なくもない。

しかし、それにしたって……。

「なあ、霧江さん。譲治の兄貴達、見てないっすか？」

「譲治君？　いいえ、見てないわ。部屋に居ないの？」

「居なかったんで俺だけ置いて行かれたかな、と思ってこつちに來たんすけど……どこ行っただ？」

その問いに答えを与えられる者はいない。

——いや、存在しないことはない。

例えば、六軒島の真の支配者であると謳わ

れる魔女……つまりは、そう。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

そう、つまりは妾よ！　この黄金の魔女、ベアトリーチェであれば、妾であれば、お前の疑問に答えてやることも出来るんだぜえ？　バアトラアあ！

教えてやろうかあ……？　此度のゲーム盤において、妾が第一の晩の生け贄に誰を選んだのかをよお……！

ああ、此度のゲームは珍しい一手を指させて貰った。きっと、誰が生け贄に選ばれたのか、それを知ればいつものように盤上のお前

はひいひい泣き喚くんだろうなあ……！

妾も早くそれが見てえんだよお！

……つといかんいかん。まずは状況を進め
なくてはな！

盤上に戻るとしよう。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

魔女であれば、六軒島の真の支配者である
ベアトリーチェであれば、戦人の問いに答え
を与えられるやもしれないが、そんなものに
突如として出現されたとしても、戦人はそれ

に耳を貸すことなどないだろう。

こういう時に魔女様が居れば何処此処にお
るぞーって言ってくれんのかなあ、などと軽
口を叩く戦人。

何言ってるんだこいつは、という目でそれを
眺める留弗夫。

普段よりも少しだけ柔和に見える霧江。

その三人の取り留めも無い会話が客間の閑
散とした空気を埋めていく。

……息子がおどけ、父が笑い、母が諫め
る。それはまるで、本当の親子のようでも

あつた。

——と。

「やあ、おはよう諸君。……おや、どうしたんだ留弗夫。早いじゃないか」

ガチャリ、という音と共に蔵臼が入室してきて、

「……おはようございます。留弗夫様、霧江様、戦人様」

「おはようございますつ。すぐにお茶の用意をさせていただきますね……！」

それに続くように源次、紗音が入ってくる。

「親子の語り合いってやつに熱が入り過ぎちまってよ……。悪いが親たちのいがみ合いは昼過ぎからにしてくれや」

「この人ったら今日こそ戦人と胸を開いて話すんだーなんて言ってお酒沢山飲んでたんです。笑ってあげてください蔵臼義兄さん」

「はっはっは。良いじゃないか留弗夫。そういう情けない姿も親子仲を深めるのに一役買うかもしれないぞ。なあ、戦人君」

蔵臼はどっかりと向かい側のソファに腰掛

け、戦人にも話を振ってくる。

心なしか普段よりもフランクに見えたそれに、「いつひつひ。まあこの姿を見ると憎まれ口も少しは控えめにしてやろうかなー、なんて思っちゃいますよね」などと返して、戦人も、霧江も、紗音も笑う。

客間は、先程よりも少しだけ騒がしいが、親族の集まり旧交を温める日として相応しい空気に包まれていくのだった。

……おかしい。

けれど、その空気が、そんな疑念に染まり始めたのを戦人は感じていた。

時刻は朝八時頃。

先程、郷田が「現在、朝食の準備をしておりますのでもう少しばかりお待ち下さい」と告げて厨房へと戻っていったが、八時過ぎには朝食だ、というのは譲治も朱志香も知っている筈だ。それなのに、二人も、真里亜もまだ戻ってこない。

そして、更に奇妙なのが絵羽と秀吉、夏妃

も姿を見せないという点だった。

楼座は三〇分ほど前に客間に入ってきて、

真里亞は何処か、と戦人に聞いてきたが、讓治君と朱志香ちゃんが一緒に居るのなら、と腰を据えて紅茶を飲んでいる。

嘉音と源次は先程から金蔵の書齋に。紗音は客間に。郷田と熊沢は厨房に。南條も先程降りてきて、今は文庫本を捲っている。

つまり、讓治、朱志香、真里亞、絵羽、秀吉、夏妃の「六人」は、未だに顔を見せてすらいらない、ということなのだ。

先程までは、まだ問題がなかった。

皆揃ってぐっすり寝ているのだろう、子供達はどこかで遊んでいるのだろう、と。

けれど、郷田の、朝食の準備がもうすぐ終わりますという報告が、逆に全員からその幻想を引き剥がす。

だって、あの夏妃が、あの絵羽が、こんな時間になってもまだ寝ているだなんて……そんなの、あり得ない……。

そして、更に不可解なことは続く。

そろそろ三人を起こしてきてくれるかね、

という蔵臼の指示で夏妃、絵羽、秀吉の自室と客室へと向かった紗音であったが、しかし奇妙なことにその三人の部屋はもぬけの空だったのだ……。

ベッドも部屋の空気も冷たく、どんなに少なく見積もっても数十分前にはもう既に誰も居なかったように思える。

よって、行き違いになった、という可能性もない。

讓治や朱志香、真里亞。この三人が居ないだけならまだ良かった。この三人が居ないだけならば、まだ子供達がどこかへ散歩に出か

けているという可能性が否定できなかったのだ。

しかし、夏妃絵羽秀吉の三人までもが部屋に居ないというのは一体どういうことなのか……。

三人の不在が客間に居た蔵臼、留弗夫、楼座に報告され、怪訝な空気が張り詰めてゆく……。

「……どういことだね。何故、絵羽や秀吉さんに夏妃までもが部屋に居ない？ 一体どこを歩いているというのかね」

「申し訳ありません……戻り際にできる限り探してはみたのですが、奥様も絵羽様も秀吉様もお姿がどこにもなく……」

紗音をやんわりと問い詰める蔵臼だが、彼女にそれを答えられるはずもない……。

「……ベアトリーチェ」

その言葉を真っ先に思い浮かんだのは、皮肉にも日頃から真里亜の魔女ごっこに辟易していた筈の楼座。

そして、そのぼそりと呟かれた言葉に客間に居た全員がざくり、と身体を強張らせる。

何故、というのは態々述べる必要もない。姿が見えない人物達、昨夜に真里亜が読み上げた謎の手紙。

……そして、碑文の中の、とある一行。



第一の晩に、

鍵の選びし六人を生贄に捧げよ。



なんせ親父はあの右代宮金蔵だ。いきなりとんでもないことをやり始めても誰も疑わねえ……」

「昨夜……真里亞が手紙を読み上げた時からずっと考えていたの。もしかして、これはお父様が私達に対して何らかの意志を示す推理ゲームのようなものなんじゃないか、って。

だとしたら、今ここに居ない六人は、そのアシスタントか何かに選ばれたんじゃないかしら」

「……何を馬鹿なことを……親父殿がそんなことをする訳がない……」

「……いや、あり得ない、はあり得ねえ……

一瞬で客間の中の空気が張り詰めていく。

この一時間で……いや、それだけではない。一〇月四日と五日という、この親族会議の場に向けて親族達の中で醸成され尽くした違和感、緊迫感、危機感、忌避感……そういった諸々の感情が今、六人の不在に対する不信感という口火を伴って着火したのだ。

「親父殿がそんなゲームなど……ありえん……」

……！！

「じゃあ何？ 讓治君と朱志香ちゃん、真里亞が居ないのはまあ良いわ。絵羽姉さんに秀吉義兄さん、夏妃義姉さんまで居ないのはどういうこと？」

「そんなことは私に聞かれても何も知らん……！！」

「蔵臼兄さんが知らないなら私が言うわよ、これはお父様の遺産相続に関する何らかの意思表示なのよ！ そう考える他ないでしょう！？」

「俺たちにも考えがあるんだぜ兄貴……！」

そろそろ親父と面と向かって合わせて貰って一度しつかりお考えを直に聞きてえんだが
よお……！！

……なんなんだよ、こりやあよ……。

さっきまでは穏やかな朝の光景が広がって
たじゃねえか……。

普段は嫌味っぽい蔵臼伯父さんも、親父も、真里亞に対してあんなに怒ってた楼座叔母さんも、和やかに会話してたじゃねえか……。

それがなんで、急にこんな……！

「……戦人君。郷田さんをお願いして、少し頭を冷やしてもらったための時間を作るわ。その間、部屋でシャワーでも浴びてきたら良いんじゃないかしら」

「き、霧江さん……」

突如として昨夜の親族会議の熱が噴き上がる。

その様に茫然とする戦人に対し、霧江がそつと囁いた。

「ごめんなさいね。私達、実は結構必死なの。……構ってあげられないのよ」

……分かるでしょう？

自嘲するように微笑む顔に、戦人は足が僅かに震えるのを感じ取る。

「戦人様……」

「紗音ちゃん、ここは良いから戦人君と一緒にゲストハウスへ行っていてちょうだい。そ

れと、もし手間が空けば絵羽義姉さんや秀吉義兄さん、讓治君と朱志香ちゃん達も探してきて」

「は、はい……！」

「……畜生……」

戦人と紗音は客間を出る。

少しだけ、親父や霧江さん達、そして蔵臼伯父さんや楼座叔母さんと親交を取り戻せたような気がしていた。

それは、一面では確かに事実だったのだろう。しかし、それも、あくまで一面での話に

過ぎない。

彼ら彼女らは大人であり、会社や、部下、資産などの、抱えるべきモノが幾らでもある。それに対して必死になることは、至極当然のことなのだ。

それは、分かっている。分かっているのだけれど……。

「戦人様……あの……」

「……はあ……。悪いな、紗音ちゃん。俺ってやつばガキだからさ、ああいうのを見ると……なんか駄目なんだ。……情けねえよ

な」

「……いえ、その……。……讓治様が、前に

仰っていました」

「讓治の兄貴が？ 何を？」

「えつとですね。……大人になる、ということとは人の裏を理解した上でそれを呑み込むことだけど、それに慣れきってしまいたくはない、人の裏に対して素直に好悪を示せるような感受性はいつまでも持ったままで居たいよね、と……。ですから、戦人様は、その……差し出がましい話なのですけれど、今のままで良い、のではないでしょうか……」

「へー……。讓治の兄貴が、そんなことを……」

大人になる、ということとは、人間社会において一人前であると認められることだ。

一人前であるから、酒を飲もうが煙草を吸おうが、誰と交際しようが誰と関わりを断とうとも、それは一人前の人間に与えられた権利であるとして認められる。

しかし同時に、それは子供だからと守られていたもの、幼いからと隠されていたものと、自らの意志だけで向き合わなければなら

ないということも意味している……。

自由と自立の代償は、苦い……。

苦さをただ何も考えずに呑み込むには、戦人はまだ幼い……。

等と。そう騒ぐ戦人と、それを微笑ましい目で見る紗音の二人は雨の中、朗らかにゲストハウスへと向かうのだった……。

「……ありがとな、譲治の兄貴が言ってたなら俺は自信を持つてもうしばらくガキのままでいる事にするぜ！」

さーてまずは手始めに消えた六人とかくれんぼだー！ ぜってえ見つけてやるからな！

《鍵の選びし六人》

……。

辿り付いた。

二人は今、いとこ部屋の前に立っている。

……いとこ部屋の鍵は、戦人が持ってい

た。誰かに預けたりもせず、ずっと肌身離さないで、ポケットに入れたままだった。

マスターキーを持った使用人達は、全員が

本館の方に居た。

誰も、部屋には入れない。

誰も、こちらには近付けない。

今行方が知れない六人の他には、誰にも。

その筈。なのに。

「な、んだよ……これ……!？」

「っ……!？」

いとこ部屋の扉には、べつたりと……。

不気味な……赤黒い、液体……？ 粘液…

…？ ネバつく、塗料のような——それで
あってくれば、どれだけ心強いだろうか—

—ものが……。

ともかく、そんな不気味な何かによって、口で形容できない不気味な図形が、描かれていたのだ。

どれだけの量を用いて描かれたのか。それは、切り裂かれた傷口から鮮血が溢れるかのように、何本もの糸を引いて、図形をおぞましく、その雰囲気に見合ったカタチに歪めている……。

……はつきり言おう。

血のような液体をたつぷりと用いて、何か

不吉なものを暗示させる図形が——いとこ部屋のドアにくつきりと、べったりと、べちゃぐちゃばちゃりと——幾つかの円と線と文字を組み合わせた魔方陣のようなものが描かれている……！

「ば、戦人様……これは……」

「知らねえぞ……！　俺がいとこ部屋を出たときは、こんな物はなかった……！！」

「違います、これ……！！」

「え……、ッ!?」

紗音が指差したのは、扉の下。

そこには……特徴的な装飾が施された洋形封筒が差し込まれている……！

「……真里亞が読み上げたあの封筒と同じ……」

……。

嫌な予感がして、戦人は咄嗟にハンカチを使って封筒を持ち上げる。

仮にこれが楼座が先程客間で述べたような、金蔵の意志による何らかの推理ゲームで

あるとして。

今のような、現場の維持を考えた行為が取り越し苦労になるのだとしても、むしろそれの方がよっぽど……。

そう思わせる程に、今この扉が発する雰囲気は、異様……！

「……内容の確認は、後でいい……。良いか紗音ちゃん。俺が今から、この扉を開ける……！！ それを確認してくれ……！！」

「は、はい……！！」

戦人は、ハンカチを使って指紋を付けないようにした封筒をポケットに差し込み、今度はいとこ部屋の鍵を使って同じように指紋を付けないように鍵を、解錠する。

「……入るぜ……！」

カチャリ、と軽い音がして。

ドアノブをゆつくりと、回す。

それをそつと、押し込んで――。

ゴッ……。

そんな鈍い音。

何かに、当たって……。扉の開閉が……、止まる……。

「なにか、つかえて……。……ッ!?!?!?」

戦人は、その隙間を、見る。

その隙間から、中を、見る。

何が扉を押し留めているのかを、……見てしまう。

「――う、うあああああッ!?!?」

戦人は、見てしまった。

……目が、合ってしまった。

何と? ……それと。

それ、とは?

……。

……ああ決まってる、知っている、分かっ

てしまう……!

「それ」が誰なのか分かってしまう……!

ウェーブのかかった黒髪と、優しげだけどこか疲れたような印象を受ける目元、僅かに開いた口に整った鼻……見覚えがある、分かる、知っている、昨夜も夕食の間中ずっとすぐ横から見えてたじゃねえか……!

なのに、なのに畜生、ちくしょう……!

それが、それが、それがなんで「半分しか

ねえんだよ」……………！

「!? 戦人さ、……………きやあああああああ

あああああッ!!??」

突如として絶叫し、仰け反った戦人を訝しんで同じく中を覗き込んだ紗音の悲鳴が響き渡る。

扉をせき止めているもの。開閉位置に横たわり、阻害しているもの。

それを、戦人は一瞬で誰なのか理解してしまふ。

「な、夏妃伯母さん……………ッ!!」

夏妃伯母さんが、夏妃伯母さんが……………ッ!!

「奥様の顔、顔があ…ッ!!」

半分しか……………半分しかねえ……………ッ!!

信じられない、信じたくない、信じてたまるかこんなもの……………!

ほ、本当に夏妃伯母さんなのかこれは……………!!?

顔面の半分がまるで岩かなにかで押し潰さ

れたように、鋤や鍬を使って耕されたよう

に、悪魔の道具でぐちゃぐちゃのめちやく

ちやのばきゆぐちゆぼちゆ——ああ砕かれて

る無くなってる弾けたスイカみてえに吹き飛

ばされてやがる……!!!

人形かなにかではないのかと、戦人の頭の

中で疑念が渦を巻く……。

けれど、そんな馬鹿げた発想は周囲に飛び

散っている血ですぐに吹き消された。

「と、とにかく中に入……っ!？」

部屋の中に入るために、扉を先程までとは

比べものにならないほどに強く押す。

夏妃の状態を確認するために、夏妃の半分

しかない顔を押しつけるために強く押す…

…!

なのに、なのに……!

「チェーン……!!？」

その扉は、夏妃の頭以外の物によっても閉

発生している事象はあまりにも重大に過ぎる
……。

「……夏妃伯母さん、すぐ戻ってくるからな
……」

一度は開けた扉を、もう一度閉める。

そして、つい一時間前にもそうしたように、
もう一度戦人が施錠する。

……開けようとした時は夏妃とチェーンと
いう二つの要因によって阻まれていたのに、
今度はいとも簡単に閉められてしまう。それ

はまるで、この扉が、この魔方陣が、このま
ま部屋を封印し続けろ、とでも主張している
かのようだった……。

……。

……………。

……………。

「なんだあ、こりやあ……!？」

客間から蔵臼、留弗夫、霧江、楼座、南條

を……金蔵の書斎ににいるという源次は熊沢に
呼んできてもらうように頼み、それ以外の数
人を呼んできた戦人達だったが、扉に駆け
寄った留弗夫がそこに描かれた魔方阵を見て
足を止める……。

いや、足を止めたのは留弗夫だけではない
……。

夏妃が恐らくは死んでいると聞いて真つ先
に走り出した蔵臼も、事態に不吉さを感じて
付いてきた楼座も、扉に描かれた魔方阵の威

圧感に、及び腰になってしまっている……。

……魔方阵。

血のような……赤い液体で描かれたそれを
見て、全員の脳裏に「魔女」という単語が浮
かぶ……。

まるで……、ここから先は魔女の領域で、
ニンゲン如きが立ち入って良い場所ではな
い、と告げるかのような……。

「南條先生、早く来てくれ！ ……チェーン
を切断するぜ……！」

息を切らして走ってくる南條に声を掛け、
戦人は番線カッターをチェーンに宛てがい、
その封印を切断、……する……。

魔女の、領域に、足を……踏み、入れる……
…。

……そして……。

戦人たちは、見る……。

行方知れずになっていた六人を……。

扉の前に倒れていた夏妃以外の、五人をも

……部屋の中で、……見てしまう……

……夏妃の身体を見た時点で、全員が少し
は覚悟していた。

ああ勿論残り全員が死んでいることは多少
なりとも覚悟していた……！

けれど、けれど……！！ ああ、駄目だ駄目
だ駄目だどう見ても死んでいる……ッ！

だってそうだろう、誰が見ても死んでいる
と分かるに決まってる……！！

だって、だって……！！

『夏妃以外にも四人分もの顔が潰れた死体があるんだから……!』

部屋の中は真っ赤……!! ああベッドも壁も床も……!! 塀へのペンキ塗りをお願いされていたどじな子供がペンキ缶を蹴つ飛ばしたみたいにべちやべちやぐちやびちやの大惨事……!! ああ信じられない数時間前までここで寝てたというのに今はその面影さえ全く残ってやいやしない……!!

奥のソファ―に転がっているのは何人だ…

…? 一人、二人、……いや三人……! ああ見えてしまう見えてしまう、先に踏み込めばそれが見えてしまう……ッ! その服が誰のものなのか、血で真っ赤に染まっているそれが誰の死体なのか見えてしまう……ッ!!

なんだよベッドの上にもいるじゃねえか二人もそこで寝てるじゃねえか……ああ寝てるなんて言えねえ言えるわけがねえ……ッ!!
だって、だって……! 絵羽伯母さんの顔も夏妃伯母さんみたいに半分潰されてる……!!!

ソファアの上にいるのは誰だ……？ 黒い
スーツと黄色いスーツ、それに金色の髪……
ああ分かってしまう分かってしまう……！
同じようにひでえツラを晒してるのが誰なの
か、分かりたくもないのに、見ても無いのに
分かってしまう……！！

「う、おおおおああああツツ!!!」

……知らず、戦人は叫んでいた……。
……いや、叫んでいたのは戦人だけではな

い……。

蔵臼も、留弗夫も、棲座も、きつと皆……
……。全員が、この衝撃的な光景から心を守る
ために、叫んでいたに違いないのだ……。

……。

……………。

……………。

「うおおおおおおツ、うああああああ……
……！！ 夏妃、朱志香ああああツ……！！」

「真里亞、真里亞……そんな、こんなこと……

…私、もつと良いママに……」

「う、ううう……！ 譲治さん、譲治さん……

……！」

……三者三様の嘆きが、自分にまで染み入ってくるのを戦人は感じていた。

「……ちくしょう……」

上を向いて自分まで泣きたくなってくるの

を必死に堪える。

目を覆い、鼻の奥からツーンとしたものが

上がってくるものを嚙下して感情を押し殺す。

「いけません蔵臼さん、死体を動かしてはいけない……！ 警察が来るまで、現場をこれ以上乱す訳には……」

「兄貴……！ 気持ちは分かる、分かるが今は落ち着け……！」

「離せつ、離せえええええ！！ 夏妃つ、朱志香あああツ！！ うおおおおおツ、うああ

ああああああッ!!!」

蔵臼の咆哮が轟き渡る……。

それは、夫として、親としての全ての感情が詰まった咆哮……。

夏妃と共に過ごした31年間……そして朱

志香を育ててきた18年間……。

家族という関係が、喜びや悲しみ、怒りも苦しみも全てを分かち合い、その分の見返りとなる幸福の時間を得ることが出来る関係だとするのであれば、蔵臼は今正に、その二人分の時間と、それによって得た幸福の全てを

奪われたのに等しいのだ……。

最愛の妻と最愛の娘を同時に、それも惨たらしく奪われ……既に夫でも父親でもなくなってしまうた男の悲しき咆哮が、彼の悲しみと怒りと嘆きを、何よりも雄弁に語っていた……。

「蔵臼伯父さん……楼座叔母さん……紗音ちゃん……」

真里亜、絵羽の死体はベッドで、朱志香、秀吉、譲治の死体はソファアの周辺で、夏妃

は扉のすぐ側でそれぞれ発見された。

六人の中で唯一床に横たえられていた夏妃の死体だけは蔵臼の強い要望でベッドに動かされたが、それは蔵臼の感情を考えれば、後々の現場検証の邪魔になるとしても仕方ないことだった。

むしろ、夏妃と朱志香を同じベッドに寝かせ、それを掻き抱きながら嘆こうとは思えない点に、蔵臼の自制心が表れたと言っても良い……。

真里亜の死体の横で項垂れていた楼座、譲

治の死体の横で立ち尽くす紗音を尻目に蔵

臼、留弗夫、戦人の三人が夏妃の死体を、

そつとベッドへと……頭の中身が、溢れない

ように……移す……。

そつと置かれた夏妃の身体は、……既に出血が止まっているとしても、じわり、じわりと、シーツを赤く染めていく……。

ああ……。そこはついさつきまで俺が寝たベッドなんだぜ、夏妃伯母さん……。それ

が、こんな真っ赤になっちまって……。寝てる間に鼻血が出たりすると洗い落とすのに時間がかかるんだ……。こんなに真っ赤にしちまったら、きつと洗濯には時間がかかるぜ……。買い換えちまった方が良いんじゃないかな……。

そんな、目の前の惨状に対するものとは無関係の、麻痺した思考が生み出す場違いな考えすら浮かぶ……。

「……留弗夫様、戦人様、お待たせいたしました」

……と、そのタイミングで背後から源次が声をかけてくる。

源次は金蔵の書斎の方にいたため熊沢に呼びに行ってもらって後から合流してもらおうとしていたのだが、いつの間にか入室していたらしい。いとこ部屋は構造上、角度によっては出入り口付近が死角になるため接近に気が付かなかったようだ。

「源次さん、祖父様は……」

「……ある程度の衝撃は、受けていらつしやるように思われます。しかしそれでも、今はこの部屋から離れるつもりはない、と仰せでした。よって、嘉音は熊沢と郷田と共に使用人室へと移動させ、私だけがこちらに参りました」

「ちつ……こんな時でもオカルト趣味かよ親父は……！」

「蔵白様が落ち着かれますまでは、留弗夫様が今後の事を取り決めなされた方が良いでしょう。……如何いたしましょう」

「……まあ、まずは警察だろうな。こつちに

来たばかりで悪いが、もう一回本館に戻ってくれねえか。確か無線機があっただろう？」

「……かしこまりました。留弗夫様達はもうしばらくはこちらにおられますか？」

「……兄貴と棲座が落ち着くまでは、な……」

ちらりと部屋の奥の方を見てそう囁く留弗夫に分かりました、では……と源次は一礼した後、再び立ち去り、その場を去って行く。慌ただしいが、きっとこの先、警察が来る頃には更に慌ただしくなるのだ……。きつ

と、源次さんも、自分も、その慌ただしさに
巻き込まれるに違いない……。

そんなことを考えながら部屋を出ると、廊
下に源次と共に退室した霧江、南條が立っ
ている。

言葉は、ない……。

室内にまだ残っている三人はおろか、今部
屋から出てきた戦人と留弗夫にすら声をかけ
る者はいない。

……誰かに、話しかける、という行為を
嫌っているとも言える。

皆が皆、今見た惨状を処理することに、精

神の余力を使っているのだ……

無言で、立ち尽くす四人。

自分達はあと何分ここにいるべきなのか。
五分か、十分か、それとも一時間？ 今すぐ
にでも離れたいのに、背後から聞こえる蔵臼
と楼座、紗音の嘆きが、その場を葬列である
かのように染め上げて、四人の足を逃がさな
い……。

「……………戦人様」

……どれだけの時間が過ぎただろうか。

ようやく思考が惨状から脱却し始めた頃に、紗音が部屋から出てくるのに気付く。

「……紗音ちゃん。……良いんだぜ、まだ譲治の兄貴と一緒に居ても」

「……ありがとうございます。でも、譲治様は……私がつつと泣いていてもお喜びにならないでしょうから……」

「……………。……そうだな……譲治の兄貴

は、きつとそうだよな……」

……戦人は、その言葉のか細さと、未だに赤いままの目を見て、紗音が明らかに無理をしている事に気付いていた。

しかし、かといって戦人にはどうすることもできない。自分には、……例え、それが子供の頃の口約束だったとしても、何も言わずに六年もの間放り出していた自分には、紗音の悲しみに寄り添い、癒やしてやる資格など有りはしないのだと、痛い程に自覚していた……。

だから戦人は、紗音のその言葉を、そうだな、と受け入れてやるしかない。

戦人の同意に対して、紗音はい……。

と、力無く微笑んだ。

その気丈に振る舞おうとする姿を見て、

うっし……！ と頬を叩く。

そうだ、考えることはいくらでもある。自

分は悲しむよりも先に、こんなことをした誰

かをとつちめてやることを考えるのだ……。

行方不明になっていた六人は、死体で発見

された。

南條が先程、六人とも確実に死んでいる、

と検死結果を伝えている。

……しかし、正直なところ死んでいるかど

うかなど検死、いや詳しく見るまでもない。

何せ、真里亞以外の全員が顔を砕かれてい

たのだ。

例えば、夏妃と朱志香は顔の右半分が、譲

治や絵羽、秀吉は左半分がそれぞれ砕かれて

いた。戦人は夏妃の死体を最初に見た時、そ

れが人形ならばどれだけ良いだろう、と考え

たが、それはその四人に関しても同じことだ

ろう……。この惨状に、どうしても死体を注

視することはできなかった……。

そして、例え、この場に居たのが南條のような幅広い分野をカバーする町医者でなくとも、それこそ動物病院の医師であろうとも、彼女達が死んでいることは疑いようもない……。

むしろ、本当に人形なのではないか、と考えて好奇心と現実逃避から夏妃の死体にそつと触れた時、そのあまりの冷たさにゾツとしたほどだ。

真里亜に関してはそのような損壊こそなかったものの、彼女の身体が冷たく、その首に何らかの紐が巻き付けられたような……絞殺

されたような痕が残っていたということは南條以外にも部屋へと突入した何人もの人物が確認している。

紛れもなく、全員が死んでいる。

……けれど、戦人は考えていた。どのようにして頭部を半壊させたのか……、それは定かではない……。問題なのは、手段の方ではない……。

……大事なのは、どのような状況でそれが発生したか、ということなのだ……。

「……留弗夫様。この部屋は如何いたしま

しょうか」

考え込んでいた戦人だったが、気付けば源次が再び戻ってきていた。

ちらりと時計を見れば、いつの間にかかなりの時間が経過している。

「……………」

「留弗夫様」

「……ん、ああ源次さんか……。そうだな…

…警察が来るまで、保存のために閉じておいた方が良いでしょうな……」

「畏まりました。蔵白様と楼座様が落ち着られましたら、この部屋を施錠させていただきます。……しかし、留弗夫様」

「……ん？　なんだ、源次さん。まだ何か悪い話でもあるってのか」

「……無線が、使用できませんでした」

「……、おいおいマジかよ……………」

「通じないのです。故障によるものか、それともそれ以外の理由によるもののかはわかりませんが……………」

「クソツタレ……！　つまり、警察には……………」

「…はい。残念ながら、通報は出来ませんで

した……」

「次の船が来るのは……」

「……月曜日の、朝となります。その無線機を借りる以外に島の外に通報する手段は……」

「脱出する手段は……、……いや、ありません……この天候では船も行き来できない……」

……」

「……はい。蔵臼様がボートを保有しているのですが、それも現在修理中で島内には存在いたしません」

昨夜から明日の朝まで、この島から出入り

する方法も外と連絡を取る手段も存在しません、と源次は現状を締めくくる。

しかし、それを受けて、霧江が「……待ってちょうだい」と顎に手を当てて少し考えたような姿勢を取った上で呟いた。

「……つまり、『この事件の犯人もまだこの島から出られていない』、ということかしら……」

……？」

「……っ」

霧江の言葉に、部屋の外に居た面々が息を
呑む。

それを聞きながら、戦人もああそうだと
内心で首を縦に振った。

そう、犯人……もしもこの惨たらしい犯行
が魔女によるものではないのだとしたら、何
処かに存在する筈なのだ、ニンゲンの犯人が
……。

それが、嵐によって島へと閉じ込められた
親族や使用人達と同じように、今も尚この島
の何処かに滞在したままなのだ……。

六人を、あんな無惨に殺害した犯人が……

……。

「笑えねえ、笑えねえぜ……嵐で脱出不能？
外部との連絡も途絶？ ああ、如何にもって
感じの古典的な、脱出不可能な孤島の完成っ
て訳じゃねえか……！」

戦人は歯噛みする。ああ、笑えない。全く
笑えない。

幾らでも推理小説で読んできた状況に自ら
が追い込まれた、ということに対してではな
い。

犯人が今も何処かに潜んでいる、ということに對する恐怖によるものでもない。

……こんな犯行をしでかしてくれやがったクソ野郎が、今ものうのと笑っているかもしれない、手が届く距離で笑っているかもしれないという事実が、今はどんな感情よりも腹立たしくて笑えない……！

「ちくしょう……！ とっ捕まえてやる……、俺が、こんな惨えことをしでかしたクソ野郎をとつちめて横っ面張り倒してやる……！」

強く、強く手を握り締める。ぎりぎりと音がする程に、強く。

「戦人様……」

今、部屋の中で項垂れている蔵白と楼座。そして戦人の怒りをすぐ側で感じ取っている紗音。

それ以外の人物にとつて、極端な話をしてしまうのであれば、……この六人の犠牲は衝撃こそ大きいものの自制を失う程のものではないのだ。

確かに、姉や義姉、義兄が死に、甥や姪が殺されたことに對するショックはある。

しかし、愛しい家族を無惨に奪われた蔵臼と楼座、そしてこれから家族になるやもしれなかつた男を奪われた紗音に比べれば、そこまではないのだ……。

……しかし、それでも、だからこそ。

だからこそ、戦人は怒る。

彼らが、大切な者達を奪われたことに對する悲しみに嘆いている間に、それを肩代わりするかのように戦人は、怒る……。

「……出血は損壊の程度に見合わないものでした……。おそらくは死後に損壊されたものなのでしょう。しかしそうになると、一体いつ殺害されたのか……。」

「南條先生は詳細な検死などは……？」

「私は町医者ですぞ……。患者が死んでいるかどうかはわかります。しかし、明確な殺害時間までは……。」

力になれず申し訳ない……。と項垂れる南

條に対して霧江がいえ、気にしないでください、と首を振る。

しかし、正直な話をする、戦人は一体何時殺されたのか、という部分よりはどうやってあの部屋で殺害したのか、という部分について考えていたのだ。

「……チェーンは、確かに掛かっていた……中には死者しかない……。俺が部屋を出たときには何も異常は無かったんだぞ……！」

……そうだ。

問題は、「いつ殺されたのか」ではない。

「どうやってあの部屋の状況を構築したか」なのだ……。

「……待って、戦人君。それって、つまり……」

戦人の呟きから、その異常さに気付いた霧江がハツとして顔を上げる。

「ああそうっすよ……くそつたれ……どうやったってんだ……」

「そんな……いえ、でも……。それじゃあ……」

「……すみません、霧江さんと戦人さんが何の話をしているのか、詳しく説明していただいてもよろしいですか……？」

戦人と霧江の会話だけが先行し過ぎて内容について行けなかったのか、南條が説明を求めている。

見れば、紗音も留弗夫も、必要なこと以外は黙して語らない源次ですら説明を欲しがっているような雰囲気で二人を見つめている。

それを受けて戦人は一瞬霧江と顔を見合わせ、自分の中でも状況を整理し直すように現状を説明する。

「……俺と紗音ちゃんが最初にこの部屋に戻ってきた時、恐らく既に夏妃伯母さんは死んでいた。けれど、重要なのはそこじゃない。扉には、チェーンが掛かっていた……」
「……そう、ですな……。我々は番線カッターでチェーンを切断して中へと入った。しかし、チェーンが掛かっているということそれ自体は……」

「いえ、冷静に考えて南條先生。部屋の中には死体しかなかったのよ？」

「誰が、チェーンをかけたの？」

「……?!」

凄惨な現状に冷静な思考を奪われていた南條が今更のようにそれに気付く。

そうだ、中には死体しかなかった。それなのに、チェーンは掛かっていた。

どう見ても他殺死体しかなかったのに、誰

かが生きていないとそれは不可能な筈なのに……。

……誰が……一体……どうやって……？

「おい、なんだよ戦人……つまり、それはつまり……」

「ああそうだ、不可能なんだよ……！　なのに実際にそうなつてやがるッ！　くそつ、チェーンが掛かつたのは俺がこの目で確認してるんだぞ……?!」

「そ、そんな馬鹿な……！　……あ、いえ、そうです。鍵さえあればそれはなんとか、い

とこ部屋の鍵さえあればそれはどうともなるのではありませんか!? この部屋本来の鍵は……」

「……これのことかい、南條先生……」

戦人は、ポケットからいとこ部屋の鍵を取り出す……。

この鍵は、一時間四十五分前の朝七時頃から、ずっと戦人が持ったままだったのだ……。

そして、いとこ部屋の鍵はこの一本だけで、後は使用人達が持つマスターキーでしか

この部屋は施錠できない。

しかし、戦人が起床し、この部屋を施錠してから再びこの部屋に訪れるまで、使用人達は全員が本館に存在していた……!

「なんですと……!?!? そ、[それでは誰にも不可能だ……!][この部屋は、この密室は、だれにも構築できない……!][」

南條の驚愕を横に、戦人は今更のようにポケットの中へと突っ込んでいた洋形封筒の存在を思い出す。

そつと、指紋をつけないように……そんな
冷静さがまだ自分の中に残っていることに内
心自嘲しながら開き、その中に一枚だけ入っ
ていた手紙に目を通す。

「……へっ、へへへっ……。……ああ上等だ
ぜ……上等だぜ上等だぜ、嘗めやがって、こ
んちくしょうがッ……！」

「戦人様？」

手紙を開くや否や、突如として乾いた笑い

声をあげた戦人に対して紗音が怪訝な声を上
げる。

「見ろよ……魔女様が、ベアトリーチェが宣
戦布告をしてきやがった……！」



誤解なきように。

私が求めるゲームは、皆さんが碑文の謎を
解けるかどうかであって、私を捕まえること
ではありません。

碑文の謎を解かなければ、哀れな生贄はさらに倍に増えるでしょう。時間は、私の姿を
探すより、碑文の謎解きに割いた方が賢明で
す。

碑文の謎が誰にも解けないのならば、誰も
生き残れない。

見事、碑文の謎を解けた人間が現われたな
ら、黄金郷の全ての黄金を与え、右代官家の
家督と、我が力の全てを与えるでしょう。

金蔵さまより右代官家の家督を引き継いだ
のは、私。そして、私より右代官家の家督を
引き継ぐのは誰かなのか、楽しみにしていま

す。

——黄金のベアトリーチェ



——そのような内容が記された手紙が、洋
形封筒の中には収められていた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇
“tips.2”が更新されました。



それは、遠回しで、勿体ぶった、生存者達にとつて腹立たしい宣戦布告。

自分が犯行を行ったのだ、ということよりも、昨夜の晩に真里亜を通じて伝えたメツセージを……碑文の謎を解いてみる、という挑戦に関して念押しする、傲慢な内容。

……仰々しく犯行現場を演出しておいて、それなのに現場に残した手紙の中身が、このいとこ部屋での凄惨な犯行に関する内容ではないということが戦人の思考を白熱させた。

派手に、惨たらしく、如何にも魔女の仕業

です、といわんばかりに行われた犯行には言及せずに、碑文を解け、解いてみる、と……。

……まるで、自分の犯行は全て魔法で行われたものだから、その真相を暴くことなんてどうでも良い、とでもいつているよう……。

「……ああ、駄目だ……。全然駄目だぜ……！」

……だが、だからこそ、戦人は宣言する。

魔女が、魔女を名乗る犯人がそう要求する

からこそ、戦人は吠える。

その主張に乗っかる気などまるでなかった。今の彼の中にあるのは、怒りだけだった。

だから、戦人は、叫ぶ。

「ああやってやる……！ 何が魔女だ、何が

碑文の謎だ……！ そんなもんは関係ねえ、

警察が来るまでもねえ……！ テメエは俺が

とっ捕まえて、その横っ面張り倒してやる……

……！！」

そう叫んだ瞬間、雷鳴が轟き、カッと窓の外が白く輝く。

それは、まるで魔女が戦人の宣誓を聞き届けたかのよう……。

そして、戦人と魔女の……双方がお互いを屈服させるための戦い、その開幕の合図のようでもあった……。

《上層世界第一の晩》

よかろうッ！

来るが良い、右代宮戦人アアッ！

さあ、第一の事件の開幕であるぞ！

なお先に宣言しておくが、

【一応はこれまでの地の文を読まなくても推理可能に作っておいたが恐らく読んでいた方が楽しめる筈】

【今後も形式としては、問題文とは別に以下の赤字による展開説明を行う形で進行する】

よいな!? よし、ではゆくぞ！



それでは赤き真実を交え第一の晩の概要を改めて説明する！

以後、構造を単純化するために名称を明確にしておこう。

【いとこ部屋とは、昨晚戦人、譲治、朱志香、真里亞の四人が宿泊したゲストハウスの

大部屋であり、本館とは右代宮の屋敷のことである】

【妾からの赤き真実による宣言、及び問題文の中においていとこ部屋、本館などに関してなんらかの表記ブレがあったとしても、それはそなたらを騙す意図などはない】

戦人はいとこ部屋において朝〆時頃に起床。

本来なら一緒に寝ている筈の譲治、朱志香、真里亜の姿を発見できなかったため、本

館へと移動したと考え、そのままいとこ部屋から外へと出た。

【戦人は朝〆時頃にいとこ部屋の施錠を行った後、部屋の外へと出た。】

【この際、戦人は確かにいとこ部屋の施錠を行っている】

【そのまま朝〆時過ぎまで本館の客間に滞在。】

【朝7時45分までに戦人は蔵臼、留弗夫、

霧江、楼座、紗音、源次、郷田、熊沢、南條

の存在を本館にて確認している。】

【戦人は朝8時過ぎの時点で紗音と共にゲストハウスのいとこ部屋へ向けて移動し、本館を離れる。】

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

おっと、この段階での行方不明者の所在は

宣言せぬぞ！ 妾ではなくガアの魔術論理

の分野である故な！

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

その後、戦人が一度目にいとこ部屋に戻ってきた際、戦人と紗音は扉に書かれた魔方阵と扉の下に差し込まれた洋形封筒を発見。

内部に突入しようとするもののチェーンに阻まれ、扉の隙間から夏妃の半壊した頭部を見ている。

【いとこ部屋を外部から施錠解錠可能な鍵は

いところ部屋の鍵とマスターキーのみ】

【マスターキーは使用人の数〓本数であり、ゲーム盤上に五本のみ存在する】

【いところ部屋の鍵は一本のみゲーム盤上に存在する】

【いところ部屋の鍵は朝七時頃から部屋への突入後まで常に戦人の管理下にあった】

【チェーンは確かにかけられていた】

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

以後妾はこの第一の晩に関する攻防において、

「扉に魔方阵を描いた」「洋形封筒を置いた」

「扉にチェーンをかけて施錠した」という一

連の工程を、「第一の晩における現場構築」と

呼称する！

続けて、密室解放時、及びそれ以後の盤面について説明！



妃、朱志香、真里亞の六人である】

二人は一度本館へと戻り、蔵臼、留弗夫、霧江、楼座、南條を連れてくる。

チェーンを番線カッターで切断し、内部へと突入。

親族達と南條、この段階で遅れて合流した源次はいとこ部屋の内部で、絵羽、秀吉、譲治、夏妃、朱志香、真里亞の六人の死体を発見。

【第一の晩の犠牲者は絵羽、秀吉、譲治、夏

【真里亞は首に絞殺されたような跡があり、残りの五人は頭部を粉砕されていた】

【南條は「六人とも間違い無く死んでいる……!!」と発言】

夏妃の死体だけは床に置かれていたため、蔵臼の強い要望でベッドへと移動された。

各死体の最終位置に関しては先程のいとこ部屋の見取り図に位置を書き加えたものを貼

るのでそれを参照せよ。

第一の盤の犠牲者、つまりは【この段階で

の死者の中には、【第一の晩における現場構

築】を実行可能だったニンゲンが存在しな

い！】

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

……なあんだよお、「人ア。南條を疑つてやがるのかあ？

偏屈なジジイの話相手としてこんな孤島までわざわざやって来て、突如発生した殺人事件の検死作業にまで従事してくれる都合の良いい医者様を疑おうってかあ？ くつくくくくくッ！

……とまあ、そんな感じで密室を破った後に戦人が妾からの手紙を読んで……という流れな訳であるが……。

ならばよからうッ！ 南條の検死結果についてぐだぐだと突っ込まれて横道に逸れるのは妾の本意ではない！ 妾が赤き真実で南條

の診断を保証する！

妾はこの第一の晩における事件を、

「犯行を行ったのは魔女、ベアトリー

チェ！」

【絵羽、秀吉、譲治、夏妃、朱志香、真里亞の六人はこの時点で確かに死亡している！】

「犠牲者以外には実行不可能な筈の密室殺人

無論、【この死亡とは生物学上のものであるぞ！】

と第一の晩における現場構築を可能としたのは妾の魔法によるものである」

そなたらも妾も大好きな【名義死比

喩死人格死狂言死などの生物学的死亡ではな

と主張するツ！！

い死者は上記六人の中には存在しないッ！】

以上を以て、魔女幻想定義ッ！

さあ、来るが良い右代宮戦人ッ！！

妾が構築した新たなる偽書！ この第一の
晩が、その幕開けに相応しい完璧な物である
とそなたらにその身を以て味合わせてくれ
るッ！！

《一九八六年一〇月五日一〇：三〇》不和》

いとこ部屋を施錠し客間に戻ってきた一同だったが、彼らの表情は戦人を除いて憔悴し切っていた。

無理もない。妻が、娘が、恋人が、姉が、義兄が、義姉が、義妹が、甥が、姪が、あんな無惨に殺されて、憔悴しない人間など存在しない……。

戦人の表情が他の人々に比べて憔悴していないのは、彼が魔女を名乗る謎の人物……犯人×とても表現すべき存在に敵意を燃やし、推理を構築しているからであるが、その戦人で

さえも先程から無言で思考を巡らせ続けたことで多少なりとも疲弊した顔をしていた。

「……やっぱり……チェーン……いや、でも……チェス盤をひっくり返さねえと……」

「……戦人様？」

「……ん、いや……なんでもない」

ブツブツと何事かを呟く戦人に対し訝しげに紗音が声をかけるものの、戦人はよそよそしげになんでもないと主張する。

「……？」

それを見て、そういえば先程から戦人がどことなく距離を取っているように感じる紗音。

それが何を意味するのか、紗音には分からない……。

郷田と熊沢に現状を説明し、そして紗音も加えた三人は使用人室へと戻ってゆく。

紗音は熊沢と仲が良いはずだし、弟のような存在だという嘉音もそちらにいる。

ここにいるよりは、恐らくはそちらにいた方が気が休まるだろう……。

客間にいる使用人は源次だけ。

その源次は、重苦しい空気にも顔色を変えずに、普段通りに自ら口を開く必要がない限りは、無言で佇んでいる……。

「……兄貴。ここは一度親父に会いに行くべ

きだ。流石にこのままじゃどうしようもねえ」

明らかに肩を落としている蔵臼に対し、留弗夫が痛ましげに：けれど、確かな声で主張する。

それはその場にいる全員が内心でその通りだと頷く内容だ。

いくらオカルト趣味で部屋に閉じこもっており、常日頃から顔を見せないといっても流石に限度がある。

所有する島の、所有する屋敷の内部で、

娘、娘婿、孫などが六人も死んでいる。しかも外部との連絡手段は途絶し、明日の朝まで警察への連絡は愚か内部に犯人が潜んでいることすら考えられる状況なのだ。

「降りてきてもらって陣頭指揮を執って貰わねえとどうしようもないんじゃないかねえか」

「……………」

留弗夫の言葉に、蔵臼は何も言わずに沈黙する。

長い、長い……沈黙……。

カチリ、カチリ、カチリ、カチリ……。

蔵臼が何も言わないまま、時計の秒針が一

周する……。

そして、最終的に。

「……そうだな。源次さんの話では、親父殿も多少なりともショックを受けていたのだろう。もしかしたら、今度こそは降りてきてくださるかもしれない。仮にそうでなくても、何かしらの指示を下さるだろう」

「つてことは……」

「ああ、親父殿の部屋に向かおう。私と……

留弗夫、二人で親父殿に改めて説得を試みようじゃないか」

一瞬、蔵臼がちらりと楼座の方を見たのは彼女も連れて行くかどうかを悩んだのだろう。しかし、未だに顔を上げない楼座を見て、まだ連れて行くことは不可能だと悟ったに違いない。

留弗夫も彼女をそのままにしておくことに異論はないらしく、二人で腰を上げて部屋を

出ようとする……が、その背中に楼座が声をかける。

「……私も、行くわ……」

「……座ってて良いんだぞ、楼座」

「……いいえ……行くわ……それに、何かしていないとやっていられないのよ……」

「……分かった。じゃあ……源次さん、一緒に来てくれ。おい戦人。母さんをしっかり守るんだぞ」

「……へっ、むしろ俺の方が守られる羽目になるんじゃないかな……せいぜい祖父様に怒

鳴られてこいつてんだ」

「行つてらっしゃい留弗夫さん、戦人君が歩かないようにちゃんと見張っておくわ」

「……」

「……」

蔵臼と楼座は、何も言わない。

平時であれば、きっと二人はこの三人の關係が改善されていることに対して祝福を述べるだろう。

しかし、今は……家族を失った今は、その

光景が、余りにも……、眩しい……。

そして、三人と源次は部屋を出て行く。

客間に残されたのは戦人、霧江、南條の三人だけ。

四人の足音が遠く離れ、完全に聞こえなくなつた後に、霧江が口を開く。

「……戦人君、気付いてるかしら」

「……なんすか、霧江さん」

「さっきは、紗音ちゃんがいたから言わな

かつたけれど……」

「——ストップだ霧江さん。……それ以上は勘弁だぜ」

「……そう。戦人君がそういうのなら、そうしましょうか」

……二人の会話は、それっきりで、終わってしまう。

南條は先程と同じように二人が何の話をしようとしていたのか理解できなかったようだが、戦人と霧江は、お互いが何を話そうとしていたのか、そして何を遮ったのか、それを

完璧に理解していた。

……そうだ。

先程のいとこ部屋の密室……。

施錠された上で、チェーンも架けられており、そして内部にいた全員が死んでいる。これは、一見して不可能犯罪にしか見えな

い。

チェーンというのはシンプルであるが、同時に強固な構築要因なのだ。

鍵ならば、奪ったり、コピーしたり、ピッキングをしたり、幾らでも工夫はできる。し

かし、チェーンは、金属の鎖がドアの開放を妨げているだけ。そして同時に、内側からでなければ架けられない。つまり、内側の全員が死んでいるという状況においては、チェーンをかける方法は存在しない……。

つまり、魔女の……ニンゲンには不可能な犯行であろうとも魔法によって解決できてしまう存在の仕業、ということなのか……。

……いや、一部の例外……例えば、犠牲者の内の誰かが即死ではなく、外部に居た何者かから逃れるために施錠とチェーンロックを

施した、というような状況であれば、限定的に先程のような密室は構築できる……。

けれど、あの状況でそれが可能だろうか…

…？

五人は頭部を半壊させられ、真里亜は絞殺だ。

五人の方は死因は別のものだと思われる、と南條は診断したが、それにしただって最終的には頭部が半壊させられている。そうなる上浮上してくるのはやはり、どうやって半壊を、という問題だ……。

不可能……。

そんな言葉が、脳裏を過ぎる……。

……いや、施錠とチェンロックを両立する方法は他にももう一つある。

……犯人の、自殺。

しかし、それにしても誰か一人は生きていなければならない。

やはり、どうやって頭部の半壊を、という問題が浮上して思考は行き詰まってしまう……。

……仮に、荒唐無稽な仮定をずるとして。

例えば、例えばであるが、あの部屋の何処かに自分達が発見できなかった頭部を半壊させるような凶器✕が存在していたとして。

それを、自分に向けて使った……？ あのような犯行現場を構築した犯人が……？ なののために……？

……などと。

戦人は、いとこ部屋の前で、既にその辺りまでは行き着いていたのだ。

恐らく、霧江も既にそこまで辿り付き、そ

してその先へと進んでいる。

進んでいるからこそ、通じ合った会話が為せたのだから。

……ここまでの仮定は、その全てが、内部にいた六人が施錠した、という観念に則ったものだった。

しかし、仮に。……仮に、例えば、であるが。

犯人が、あの部屋の中に、存在したままだったと仮定したならば、どうだろう。

例えば扉の裏などに隠れていて、皆が突入してきた後にこっそりと脱出……あるいは何食わぬ顔で合流し、さも自分は最初から近寄っておりません、もしくは今合流しました、という風にとぼけているとすれば……どうだろうか。

……可能だ。

それならば、可能なのだ。

それならば、絶対の密室を突破できる。

……けれど。

そうだ。ここでもう一度、けれど、という前置きが入る。

それが、可能なのは……誰……？

……決まっている。

「戦人が姿を見ていない人物……」

「つまりは、使用人達だ……！」

考えたくないが、それならば簡単なのだ。

……ああ簡単だ簡単だそれならば簡単だ……

……！ 嘉音君なんてまさにそれらしい、彼が実際には書斎にはいないのを使用人達が誤魔化していれば簡単にこの密室は構築できる、中に潜んでいて自分達が突入した後にこつそりと抜け出せば簡単じゃないかああそうだ源次さんも怪しいあの人が本館に戻ってきた時本当に書斎にいたのかなんて熊沢さんしか知らない、それに使用人が犯人ならばマスターキーなんて使い放題部屋、密室なんて関係な

い関係ない実行可能実行可能可能可能……

……………。

……溺れていく。

疑念と、疑惑と、疑心の生み出す真つ赤な海に、自分が溺れていくのを戦人は感じていた。

……そんな思考を打ち切ったのが、先程紗音に声をかけられた時の反応だった。

それは、共犯かもしれない紗音に疑われるのはマズい、という意味での反応なのか。

それとも、自分に疑いのない目を向けてく

る紗音にそんな疑念を抱くことを恥じての反応なのか。

そのどちらであつたとしても、それを止めてくれた紗音に戦人は感謝していた。

何故なら、それを思いつき、それが実際に可能だつたとしても、戦人は使用人達がそんなことなどする筈ないと信じている。……いや、少し違う。

……信じて、いたい。

頭の中が、その真つ赤な海に呑み込まれてしまったとしても、自身の心までがそこに溺

れてしまうことを、戦人は想像しなくなつた……。

……だからこそ、霧江が紗音ちゃんがいない今だから、と前置きして話しかけてきた際に、それを遮つたのだ……。

霧江とその説について吟味し、追求してしまふと、全身がその赤い海に溺れてしまいそうだつたから……。

「……」

……先程、戦人は確かに、犯人を見つけ出

してやる、と宣言した。

しかし、彼は同時に、この六軒島に存在する親族も使用人達も、疑いたくはない……。

ホワイダニットがミステリーにおいて最も重要であると言われる題材であるのだとしても、どんな動機かなんて想像したくない……。こんな惨劇を起こす犯人が、親族や使用人達の中にいるのだと、想像したくない……。

だから、戦人は、今、苦しんでいる……。

思考を、犯人は使用人達の中にいるのではないかという思考を、その先に進めても良い

のかと、悩んでいる……。

……と、足音が聞こえてきた。

ああ、親父達が戻ってきたのか、と天井を見上げながら考えているが、その足音は戦人が想像していたものよりも、遙かにペースが速く、荒れている……。

そして、ガチャリ、と客間の扉が開かれて……。

「……………」

最初に、見えたものは。

黒光りする、鉄の、筒……？

それを、構えたまま、室内に入ってくるのは、蔵臼と、楼座だ。

表情は歪んでいて、そして同時に鬼気迫つてもいる……。

……ああそうだ、その重厚感、そのフォルム、その重々しさ……それは、銃だ……。

「っ………!!？」

それが、何らかの銃身であることに気がつき、戦人は身体を強張らせ、霧江は咄嗟に腰を浮かせる。

……凶器。

その言葉が、同時に二人の頭に浮かんできた……。

仮に、あの顔面が破壊された死体を作るのであれば、恐らく最も簡単なものは何らかの重火器だろう。もつとも、この島にそんなものが在るのかは定かでないが……。

そんな考えまで、二人は共通して抱いていたのだ。

それなのに、今、そこには、本物の銃がある……！

本物の、凶器が、眼前に存在している…

…！

「……無事か？ 戦人、霧江、南條先生…
…」

後ろから、同じように銃を持った留弗夫が入ってきて、蔵臼と楼座の表情は少しだけ和らいだ。

「……驚かせてしまったようだ。すまない」

蔵臼はそういって、椅子にどかりと座り込む。

最後に入室してきた留弗夫は、扉の周囲に誰かがいないかを確認した上で戸締まりを行って鍵を閉める。

その手にはもう一丁の銃が携えられており、それを「霧江も持ってる」と渡す。

「お父様のコレクション？ 良い趣味してる

わ」

手慣れた様子特徴的なレバーハンドルを操作して装弾状況を確認する霧江。

「親父の書斎から拝借してきた。こんな状況だからな、ちよつとくらい借りても良いだろうぜ」

ガチャガチャと手に持った時の感触を確かめながら留弗夫は返す。

なんでも、ウインチェスターライフルの銃身を切り詰め、カスタムしたものらしい。

◇

◇

◇

◇

◇

≡tips.3≡ が更新されました。

◇

◇

◇

◇

◇

クルクルとレバーアクションで回しつつ手元でそれを遊ぶ姿は堂に入っていて、そういえば親父は霧江さんと一緒にクレー射撃だのなんだのをやってるんだったか……と戦人は思い返す。

だが、そこで、気付く。

留弗夫は扉を閉めてしまった。鍵まで閉ざしたのだ。

……中に入ってきたのは留弗夫、蔵臼、棲座。

……金蔵は、いない。

「……祖父様は、やっぱり部屋を出ないってことですか？」

「……」

「……」

戦人の問いかけに、蔵白と楼座は、応えない。

それは、金蔵がこの非常時になっても部屋から出てこないのが気まずいから……？

いいや、そうではない……それは、困惑……

なぜそうなるのか……と。理解できない謎

に直面させられた時に人が抱く、混乱……。

蔵白と楼座の顔には、それが浮かんでいる……

…。

「……親父は、いなかった」

「……金蔵さんがいなかった？ それって……」

「言葉通りの意味さ……。親父は部屋にいなかった。……もぬけの空さ、書斎は」

「んな、馬鹿な……。こんな時にどこ行つたってんだよ祖父様は……」

「金蔵さんが、部屋を出た、ですと……？」

南條は、信じられないと言わんばかりの表

情で蔵臼を見る。

金蔵の気性をよく知る南條のことだ。部屋を出るつもりがない、と言ったのであれば、娘や孫が死んでいるとしても出ない可能性はあると考えていたようだが、まさか部屋にいないという可能性は想定していなかったらしい。

「……親父殿は、あの書斎の中にベッドやトイレ、風呂まで備え付けている。だからこそ、あの書斎から出ない、ということが可能だった。……だからこそ、何故親父殿がこの

タイミングで部屋を出たのか、それが分からん……！」

蔵臼は、訳が分からないと首を振る。

「じ、祖父様は事件が起きてることを知ってるんすよね……？ 熊沢さんと源次さんが、それをしっかり伝えたけれど、聞いていなくて散歩にでも行っちゃった、みたいな可能性は……」

「——そんなことはあり得んッ!!」

……突如、蔵臼が激昂し、机に拳を叩き付ける。その激しい音に、客間は静まり返った……。

「……すまない。……ともかく、親父殿は、部屋にいなかった。……つまり、想像したくない話だが……」

「まさか、金蔵さんも事件に巻き込まれたと、そう言いたいのですか……!？」

◇ ◇ ◇ ◇ ◇
“character.4” が更新されました。

……南條のその問いに、答えは返ってこない……。

それは、蔵臼、留弗夫、楼座の三人が、暗にその可能性が高いと、そう考えていることを示していた……。

「……実際に親父が事件に巻き込まれたかどうかは置いておく。ただ、問題なのは、親父はさっきまでは部屋にいたってことだ……」

留弗夫が、片手で頭を抑えながら続け

る。

「さっき、お前がこっちに顔色変えて戻ってきた時、俺たちは急いでいたから熊沢さんに書斎に行ってもらって直接ゲストハウスへ向かった……」

それは、間違いない。

戦人も、それが実際にあったやり取りであると認識している。

「そして、源次さんがこっちへ直接来て、親

父は多少なりとも動揺していたようだった、と言った……ここまでは良いな？」

……それも、間違いない。

その会話も、戦人は確かにあったと認識している。

「……つまり、だ。最後に親父を見たのが、源次さん、熊沢さん、嘉音君の三人だけ、ってことだ。……なんで源次さんをこっちに連れて来なかったのか分かるか、霧江」

……それは、それは……。

「……ええ」

それが、意味するところ、は……。

「……おい、待てよクソ親父。なんだ？ つ
まり、こう言いてえのかよ」

ああ単純だ、分かりきっている、留弗夫が
言いたいことを部屋に残っていた三人は即座
に理解する……！

だってみんなそう思っていた、だってみんな
心の中では疑っていた、だって誰が怪しい
のかなんて決まっている……！

「源次、熊沢、嘉音の三人が怪しいことは明
白なのだから……！」

けれどそれを認めたくない……！ それを
考えていると悟られたくないッ……！

だからといってその判断を当然のものだと
認めたくない……！！

「ふざけんなよクソ親父ッ！ それでっ、源
次さんだけ使用人室に行かせて、自分達のは

このここちに戻ってきたって言いてえのかッ!？」

「……戦人君、悪いけど少し静かに——」

「今この屋敷の中には殺人犯がうろついてるかもしれないんだぞ!？」それを、自分達だけはどこから見つけてきたか知らねえ銃だけ持って親族だけで固まろうなんぞ……」

「——黙りなさいッ!!！」

……先程の、蔵臼によるものよりもなお大きな声と、何かを叩き割るような音が、響き渡る……。

それは、……楼座のもの……。

楼座が、絶叫と共に、その手に持った銃を、目の前の小型テーブルへと全力で叩き付けたのだ……。

銃身が高級なテーブルの天板を叩き割り、そこにめり込んでいる……。

「っ……」

そのあまりの剣幕に、咄嗟に、戦人は口を閉じる……。

バギヤリ、バギ、ベギ、……という異音と

共にその銃を持ち上げながら、楼座は、更に、叫ぶ……。

「ああ良いわよねえ、戦人君は……！ お父さんもお母さんも死んでいないんだもの……！ 親子三人で仲良しなままだもの、羨ましいわ……。……こっちは娘殺されてんのよ、分かってんの、ええ！？」

……絶叫。

憎悪と、苦しみと、悲しみが、痛い程に込められた、絶叫。

それを受けて、……戦人は、……自分が舞い上がっていたのではないかと、冷水をぶちまけられたような気分になる……。

犯人をとっちめてやる、と意気込んでいたけれど……それは、誰も身内が死んでいないが故の、精神的な余裕からくるものだったのではないか。

そう指摘されれば、戦人は、それを否定できな……。

否定できないが故に、楼座の、その今にも再び涙が溢れようとする瞳から、目が離せない……。

「あんたに、あんたにねえ……！ 娘が殺された親の気持ち、あんたに……ッ！！」

激情を、誰にもぶつけようがない激情を、今自分に向けて吐き出しかけているその姿から、……戦人は目をそらせない……。

「……やめたまえ、楼座。……真里亚ちゃんも、戦人君に当たることは望んでいまい……。……それは、朱志香も、夏妃もだ……」

「ッ——！！」

しかし、楼座のその叫びを、……悲痛な響きと共に、蔵臼が制止する……。

「……だって、だって、私、真里亚に、あんな酷いこと、何度も、何度も……良いママになんて、なれないまま……、……うううううッ……！ ああああああッ……！！」

……昨日の夕方、楼座が、真里亞をぶつのを、戦人はしっかりと見ていた。

何度も、何度も……。黙りなさい、うー言うのをやめなさい、と……。そういつて、ぶつのを、……。憎しみすら感じる程の叱り方をするのを、しっかりと見ていた……。

……けれど、楼座にとって、真里亞が本当に憎悪の対象だったのか、と問われると、戦人は一欠片の迷いもなく否、と答えるだろう……。

戦人自身が、紆余曲折を経ながらも、留弗夫と距離を埋めることを選んだように……、

譲治が、絵羽の干渉に対して様々な想いを抱きながらも、それに対して感謝していたように……、朱志香が、夏妃の小言を嫌いながらも、親愛の情を確かに感じていたように……。

親の事が、……よっぽど、どうしようもなく、致命的な歪み方をした家庭でないのであれば、憎い子供などいないように。

……子が、本当に憎い親なんて、いないのだ……。

人は、ただ一面だけで構成されたもので

は、ない……。多くの面が、多くの要素が、複雑に絡み合った、多くの種類が混じり合った鉱物の結晶のようなものが、人なのだ……

。仮に、黒い水晶の輝きが、その表面の大部分を覆っているのだとしても、……きつと、曇り無い、透明なそれは、どこかにある筈なのだ……。

そして、楼座は、今正に……。真里亜という輝きを失ったからこそ、何よりも暗く光る黒き水晶ではなく、彼女の根底にある筈の、透明な輝きが、行き場を失っているのだろう

……。

蔵臼も、紗音も、愛する者に先立たれた悲しみを、その内面に必死にしまい込もうとしているのだ……。それが、ただ少しだけ漏れてしまっただけの楼座を……。今床に倒れ込み、慟哭する楼座を、戦人は、責める気には、……なれなかった……。

……けれど。
それ、でも。

使用人が疑わしい、ということ。それは、
良いのだ。それ自体は、どうしようもないの
だから。

マスターキーを持っており、屋敷内の構造
にも熟知した使用人が疑われることは、抗い
ようがないことなのだ。

戦人も、この場に使用人の誰かがいたので
あれば、彼らが怪しいのだから閉め出してし
まおう、という考えには否を突き付ける筈だ
……。

……けれど、今この場には、使用人は誰も
いない……。

そして、戦人自身も、使用人が怪しい立場
であるということ自体は、大いに理解してい
た。

だから、もう閉め出した後だ、と言われ……
…そして、それに異を唱えようとしたタイミ
ングで楼座が限界を迎えたとあらば……、も
うこの場でそれを主張しようとは、できな
かった……。

……使用人は、使用人室に固まっているの
だろうか。

源次さん、熊沢の婆ちゃん、嘉音君、郷田

さん、……紗音ちゃん。

みんな、無事だといいいんだが……。

ぼんやりと、戦人は、窓の外を眺める……。

…。

推理は、暗礁に乗り上げていた。

……その理由は、言うまでもない……。

……先程考えた通り、犯人は誰か、どう

やって密室を構築したか、となると。

それは、戦人が八時過ぎにゲストハウスに

戻るまでに姿を見ていない時間がある者の中で、本館に一度戻ってきた時に姿を見ていない誰か、に限られる……。

そして、それは六軒島にいる人物の中で

は、金蔵、源次、嘉音、の三人しかいないのだ……。

まず、戦人が紗音と共にゲストハウスへと戻った際に、既に犯行は行われていたと仮定する。そうなるとそれはつまり、現場構築のための猶予は戦人がいとこ部屋を出てから、一時間後に戻ってくるまでの間しか存在しな

いということだ。

そして、内部に潜んでいて後から合流したと主張、或いは最初から本館にいたと主張するためには、慌てて戻ってきた戦人に姿を見られていない人物でなければならぬ……。

その厳しい条件をクリアできるのは、金蔵、源次、嘉音の三人のみ……。

だから、例えば、この島には19人目の未知の人物が潜んでいれば、などと考えても、今度は鍵をどうやって入手するのか、という問題……つまり、使用人が共犯ならば可能で

ある、という答えに行き着いてしまうのだ……。

けれど、戦人は、それ以上使用人を疑いたくはない……。

いくらオカルトかぶれになってしまった金蔵とはいえど、こんな事件を引き起こす程にとち狂っているとは戦人は想像したくなかつたし、源次が六年前から変わらずに一族の仕えているのも大人の男として戦人は尊敬していた……。嘉音に至っては、朱志香と甘酸っぱい関係を築いているかのような雰囲気か

あったのだ……。婚約していたという譲治を失った紗音のことばかり考えていたけれど、そんな朱志香を失った嘉音の悲しみもまた、想像に難くない……。

……いや、例えば、マスターキーが使用人の人数より多い本数が存在していて、その内の一本を未知の19人目が入手していれば、と仮定すれば、それも問題はない……。

存在する、ということは目の前に持つてくれば証明できるが、存在しないかは証明ができない。悪魔の証明になってしまうのだから。

だから、未知の19人目の犯人✕が独自にマスターキーを入手しており、それを用いて犯行を行ったのだ、と仮定すれば……、戦人は、誰も疑わないで済むのだ……。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

うっひゃひゃひゃひゃひゃッ！

見ろよオ、ゲーム盤上の戦人をオ！ 使用人を疑いたくないー、マスターキーを持つてる使用人は怪しいー、でも皆信じたいー、なんて無茶苦茶なことを考えてやがるぜエエ？

くっくくくく！

赤で宣言しよう！

【マスターキーは**い**本の**み**！】

【いとこ部屋の鍵はそなたが持っていた**一本**の**み**！】

……くっくくくく。妾がどれだけ赤を囁くとも盤上の駒には届かぬ。

……しかし、『そなたら』は、これを見ている。……であろう……？

……考えたくない。

……けれど、考えを止めたくない。

そんな、思考の二律背反に戦人が陥り、考えることを放棄しかけていた、その時。

「……ねえ、留弗夫兄さん」

楼座が、急に、口を開く。

◇

◇

◇

◇

◇

「……なんだ、楼座」

して言葉少な氣に答える。

その声が、何故か、異常に、……冷たい……。

「……じゃあ、戦人君」

…。

「……なんすか、楼座叔母さん」

「……昨日の夜、親族会議が開きになった後、霧江義姉さんと戦人君とで、集まっていたのよね……？」

急に話の矛先が代わり、不意を突かれながらも応える。

「……ああ、そうだ」

「……いところ部屋の鍵……朝、施錠したの、

戦人君よね？」

留弗夫もその底冷えるような声の調子に

「……そう、っすけど……」

何か危険な物を感じ取ったのか、身体を硬く

「……、……」

楼座は、その先を続けない。

俯いたまま、沈黙している。

……その沈黙は、非常に、不快な沈黙だった。

何かを、精査されているような……。そんな……。

「……私、昨日、いっとこ部屋の前で戦人君と会ったわよね」

「……さっきからなんだよ……言いたいことがあるなら、はっきり言いやがれってんだ……」

「……ねえ、戦人君」

「……だからなんだよ！ さっきから何を言いたいのか分かんねえんだよ楼座叔母さん！」

「……………の？」

……え……？

……戦人は、最初。楼座が、何を言ってい

るのか理解出来なかった。何を言われているのか理解出来なかった。

……だって、それはあんまりにも無茶苦茶なものだったから……。だってそれは、それは……。伯母が甥へと投げかけるには、あんまりにも、酷すぎる……。

「……朝起きたとき、本当に譲治君や朱志香ちゃんや真里亜は部屋にいなかったの……」

「……は、あ………?」

「絵羽姉さんも夏妃義姉さんもその場にいたんじゃないの? 戦人君が部屋を出たとき、もう既に死体はそこにあったんじゃないの?」

「……楼座、おばさ……」

呆けたような声が漏れる。

……きつと、今鏡を見れば、これまでの人生で一番馬鹿な顔をしているだろう、と。戦人にはそんな確信があった。

「……まだ分からない？ ……ねえ、どうな

のって聞いてんのよッ!!! 殺害する時間

もッ！ 偽装する時間もッ!! たっぷりあつた一番怪しい人物である右代宮戦人ッッ!!!」

……楼座の手が跳ね上がり、その手に……

ライフルが、握られる……。

なんで、今それを持ち上げる必要が……？

窓の外に、怪しい人物でも、いた……？

……違う。その銃口は、今……。

「……な、んでだよ、楼座叔母さん……。な

んで、俺に、銃を向けてるんだよ……ッ!!」

「なんで……？ なんでですってッ……!!? 決まってるッ!! 今ッ！ あんたがッ!!

一番怪しい立場にいるからでしょうッ!!?

!?!」

ガチャリ、と。

重い、音がする。

それはレバーハンドルが操作され、弾が、銃身の内部へと送り込まれる音。

……ライフルが、ただの金属の塊ではな

く、人を殺すことが可能な、凶器へと変わった音……!!

引き金を引くだけで、銃弾が飛び出るような、臨戦態勢……!　それが今、激昂した楼座の手にあり、戦人に、……ぴつたりと、数メートルぼっちの距離だけを隔てて、……照準を合わせている……ッ!!!!

「——楼座ッ!!」

咄嗟に留弗夫が同様に銃を持ち上げる。

その銃口は、……楼座の胸元へと向けられている……。

「……なに、兄さん?　……私を、撃つの……?　……そうやって姉さん達も、撃ったんでしょうッ!?!?」

「楼座ッ!!　いいか、二度は言わねえぞ……戦人から、銃を降ろせ……ッ!!」

「ふざけないでッ!!!　兄さん達が一番怪しいのよッ!!　昨晚三人揃ってアリバイは無し、鍵は戦人君が持ってたッ、戦人君さえ知らぬ

存ぜぬで通せばこの密室は簡単に構築出来るのよ!!!」

……銃口が、戦人から、留弗夫へと向き直る……。

「——楼座アッ!!!」

留弗夫の指が、楼座の指が、引き金に、引き金に、力を、乗せて……。

「……やめたまえッ!!!」

……蔵臼の一喝が、その緊迫感を……ほんの僅かに、霧散させた……。

「頭を冷やせ楼座……！　今お前が何を言っているのか、本当に理解出来ているのか……戦人君と留弗夫に対して何を言ったのか、本当に分かっているのか……ッ!!」

……今のお前の姿を、真里亜の前でも見せられるのか。

……けれど、そんな意味が多分に含まれた

叱責を受けても、楼座は銃を降ろさない。

無言で、戦人と、留弗夫を、睨み付けたまままだ……。

「……楼座」

……先に、銃を下ろしたのは、留弗夫の方だった。

「……お前の言いたいことは、分かった。だが、戦人は誰も殺してないし、俺も、霧江も、誰も殺してない。俺だって姉貴や夏妃さ

ん、譲治くんや朱志香ちゃん、真里亚ちゃん達を殺した相手をぶっ殺してやりてえが、その裁きは警察に任せるべきだ。……だから、銃を、降ろせ」

「……………」

いつになく誠実な留弗夫の声に、多少なりとも心を揺れ動かされたのか。

楼座は、一度…、二度…、と躊躇ったものの、最終的にはライフルを降ろす。

「……でも、私……」

「……何も言うな。これは、一時の悪夢みてえなもんなんだ。明日の朝までじっと耐えていれば、夢も、覚める……」

留弗夫は、今自分達は冷静ではないのだと、そう楼座に説く……。

嵐が過ぎ去って、島から出られるようになれば、この悪夢も覚めて冷静になれるのだ、と。

……嵐で何処かへ飛び去ってしまったうみねこ達が戻ってきて、普段通りになく頃には

……うみねこのなく頃には、きっと……。

「……戦人も、それでいいな……？」

「へっ、……へっ、いや、全然気にしてねえぜ……。俺が怪しいのは俺自身が指摘してえくらいだ……」

……それに、自分が一番怪しい、ということとは、戦人自身も自覚があった……。

犯行現場に一番直近までいたのが自分なのだ……。自分は犯人ではない、という確信がなければ……。或いは、自分以外に自分のよ

うなタイムスケジュールで動いている人物がいれば、戦人はまず真っ先にそいつを疑っている筈なのだ……。

だから、戦人は、今のこの楼座の凶行にも、多少なりとも腹立たしい気持ちはあっても、逆上することはなかった……。むしろ、自分に敵意を向けることで少しでも真里亜を殺された悲しみから逃れてくれるのであれば、それでも良いのではないか、とすら考えていた……。

《一九八六年一〇月五日一一〇五

／□□□□》

「……………」

……客間には、重苦しく、苦々しい、不快な沈黙が流れている……。

時刻は、午前一一時の、少し前。

……先程の、楼座の凶行から、三十分程度が経過していた。

……沈黙にも、幾つかの種類がある。

例えば、それはその場に相応しい沈黙。

誰かの死を悼むための沈黙、誰かの門出を祝うための沈黙、誰かの無事を祈る沈黙……。

……。

そういった沈黙は、重苦しくはあっても、

不快な沈黙ではない。

けれど、今この場に漂う沈黙は、違う……。

……。

それは、張り詰めた敵意と、疑いに満ちた沈黙……。

人の正の感情によつて生み出される沈黙が、不快ではないのなら……、逆もまた、然り……。

誰かへの敵意を育むための沈黙……、誰かへの疑いを膨らませるための沈黙……。

負の感情と思考が生み出す沈黙は、人の本能的な不快感を喚起させる……。

「……………」

今、客間に満ちているのは……、そういった沈黙だった……。

カチリ、カチリ、カチリ、カチリ……。

そんな無機質な針の音と、どこか現実感のない風雨の音だけが、部屋の中に響いている……。

……と。

……ボーン、……ボーン、……ボーン……。

「っ…………！」

一一時を告げる鐘の音が、鳴る……。

身動きもせずじっとしていた親族達の中で、楼座と留弗夫が、咄嗟に手元の銃に手を伸ばし……、そして、我に返ったように手を下ろす……。

重く、暗く、不快な沈黙は、破られないまま……。

……先程の楼座の激昂は、この客間に、致命的な亀裂を刻み込んでいた……。

楼座は、一度は矛を納めはしたものの未だに戦人……引いては次男一家に猜疑心を抱くのを止められていないし、息子に銃を向けられた留弗夫も、警戒心は解いていない……。そして蔵臼も、楼座の発言からその内心で夏妃と朱志香殺害の犯人は次男一家なのではないか、という疑いを育てはじめてしまっている。

三者三様のそれは遂に限界まで育ち……、
そして、ただの鐘の音でその緊張の糸が切れ
かけてしまうまでに、育ってしまっているの
だ……。

「だって仕方ないわ。私達の視点からは私達の
潔白が保証できる。けれど、それは私達か
らの主張でしかない、というのも事実よ」

霧江は、冷静にそれを指摘する。

普段通りに、お互いの立場を前提にした思
考を、滔々と。

「……留弗夫さん、私達は、客間からお暇し
ましょう」

その沈黙を破ったのは、霧江だった。

「……はあ？ 霧江、お前何を……」

「私達以外の視点で見ると、一番怪しいの
は私達であるのもまた事実。私達は昨晚三人
で集まっていた。そして戦人君は最後にいと
こ部屋を出入りした人物よ。誰だって疑いた

くもなる」

「それは、そうだが……」

「そんな私達が今この場にいるよりも、どこか別の部屋に居た方が突発的な同士討ちの危険性が少ないわ。違う？」

「……」

「……俺も、霧江さんの言葉に賛成だ。俺たちはやってない。けれど、それを証明する方法はない。……悪魔の証明になっちゃう……」

「…」

「戦人……。……」

留弗夫は、妻と息子が同じ意見であると聞き、困惑したように二人の顔を見る。

そして、躊躇うように視線を蔵臼、楼座、南條へと彷徨わせた後に、はあと息を吐く。

「……確かに、それも一つの手段ではあらあな。こいつがあれば、まあ仮に犯人が襲ってきたとしても、抵抗くらいはできるだろうぜ……」

ガチャリ、と。

手元のライフルを弄び、留弗夫は二人の意

見を受け入れたようだった。

「……兄貴、そういう訳で俺たち家族は客間からお暇させてもらうが……警戒だけは忘れるんじゃねえぞ」

「……お前こそ、気をつけたまえ。相手は六人を殺害できる犯人だ。単独犯であるという保証すらないのだから……」

……単独犯ではないかもしれない、という言葉には……、どんな意図が込められていたのだろうか……。

日頃であれば、それは蔵臼特有の皮肉気な言葉だと思えたかもしれない……しかし、既に……、猜疑心という不和の種を抱え込んでしまった今となつては……、その言葉は、全く笑えない、悪夢のような冗談そのものだった……。

「留弗夫さん……チェーンの施錠は、忘れてはなりませんぞ……」

「へっ……相手はあんな犯行を可能にする魔女様だぜ……チェーンになんの意味があるっ

てんだ……」

南條の声に力無く応えた留弗夫であるが、その表情には不安と緊張の色が浮かんでいる。

当然だろう。これから、自らが携えたライフルで妻と息子を守らなくてはならないのだ……。霧江もまた同じライフルを持っているが、父親としての自負があるが故に、その責は重い。

突発的な口論から生存者の中で殺し合いが発生するという最悪の事態は次男一家が客間

を辞するという選択によって回避できるものの、同時に、今度は自分達が狙われて全滅する、という事態を想定しなくてはならない……。

そのどちらがマシなのか、留弗夫には判断出来なかった……。

……………。

……………。

……………。

留弗夫と霧江と戦人の三人は、客間を出る……。

屋敷の廊下は、見慣れた普段のそれとはどこかが異なり……、三人に寒々しいような……、そして同時に、獲物を待ちかねている悪魔の口の中のようにもあつた……。

「……へっ……笑えねえな、こりや……」
「右に同じだ……。やっぱ今から客間に戻ったりできねえもんかな……」

「もう、何言ってるのよ二人とも。ほら、留

弗夫さんはちゃんと前に立ってライフルを構えていてちょうだい」

「……いっひっひっひ。こんな時でも尻に敷かれやがって、羨ましい限りだぜ……」

「戦人君は後ろを警戒していて。誰か怪しい人影を見たら即座に留弗夫さんと位置を変えるのよ」

「責任重大だぞ、戦人……。ちゃんとお父様のリーダーとして働きやがれ……」

「うるせえぞクソ親父……。そっちこそしっかりと対空防御みてえに仕事しろってんだ……」。

……因みに霧江さん、もし前後に同時に誰かが現われたら……」

「……まあ、そのときは諦めるしかないわね」

「……笑えねえぜ……」

今にも、廊下の角から誰かが飛び出してくるのではないか……。

その手には、五人の顔をあはしたように、なにか得体の知れない、恐ろしい武器が握られているのではないか……。

そんな想像が、頭の中から尽きない……。

「……先に使用人室へ向かおう。客室の鍵を一本拝借して、そこに籠もるんだ」

……使用人が怪しい、という発想は、無論留弗夫の頭の中にも存在している……。

鍵を手元に置かずとも、チェーンさえかけてしまえば一応の安全は確保できるのでからわざわざ使用人室へと向かう必要もない……。そんなことは、無論分かっている。

……しかし、それでも……鍵が手元にあり、という安心感はある意味では麻薬に近

い……。

自らが存在する空間を閉鎖するための、小さな金属の塊が手元に存在している、という信頼は、甘い……。

それは、富豪達が、ある程度の資産を株式という形では無く、宝飾品や、金塊などの、相場が移ろわないものへと変換して手元に置いておく行為に近い。物理的な金銭、物理的な資産、そういうものは、誰の心だつて乱すこともあれば……、安定させることもある……。

それは、普段から飄々と立ち回っている留

弗夫や、冷静沈着な霧江であっても、同じことなのだ……。

「……誰か居るかい。俺だ、留弗夫だ。悪いが、ちよつと開けてくれ」

扉に背をびつたりと付け、留弗夫はコン、コン、と使用人室の扉を叩く……。

「留弗夫様ですか？ 少しお待ちください……きやつ!？」

……扉を開けたのは、紗音だった。

使用人室の、おそらくはドアに近い場所に座っていたのだろう。何の警戒もなく扉を開けて、そして、自らへと銃口を向ける留弗夫に咄嗟に後退る……。

「つと、紗音ちゃんか……。悪いな、驚かせちゃって」

留弗夫は慌てたように銃口を下げる。

「ちよつと話があるんだが……中に入れても

らつても良いかい」

「は、はい……」

その怯えたような声色に留弗夫は罪悪感を抱く。

そもそも、いくら使用人達が怪しいのは留弗夫も認めるところとはいえど、紗音はずっと戦人と行動を共にしていたのだ。

犯行を行う猶予そのものが存在しない彼女に関しては、留弗夫もあまり疑いを向けてはいない……。

「どうぞ、留弗夫様……」

「ありがとよ……おう、熊沢さんも郷田さんも悪いな」

「どうなされたんですか、留弗夫様……？」

熊沢も郷田も紗音も、銃を構えて入室してきた留弗夫一家に身を引いて距離を取ろうとしているが、留弗夫にとってもその反応は仕方のないことだった。

むしろ銃器を構えたままなのだから、安全のためという名目で突き返されても文句は言

えない立場なのだ……。その意味でいうのであれば、素直に入室させてくれたという一点において使用人たちは、右代宮家に仕えるという立場に真摯に行動したと言えるのかもしれない……。

「つと……はあ、少し休ませてくれ……ここに来るまで気を張ってたんだ……」

どつかりと椅子に座り込む留弗夫を尻目に室内を抜け目なく観察していた霧江が声を上げる。

「……源次さんと……嘉音君は？ 二人はどこへ？」

その声に釣られてふう……と息を吐いていた戦人も二人が室内に存在しないことに気付く。

まさか、二人で外出したのだろうか……こんな時に……？

「二人は今屋敷内の見回りに……施錠を確認してくる、とのこと……あとはお館様の捜

索に、と……」

「……マジかよ」

「わ、私は止めたんですよ？ せめて郷田さんも一緒に、と言ったのですが……」

「え、ええ……！ 私もその場にいれば二人だけで外に向かわせるなんてことは決して……！」

紗音の説明を聞き、戦人から何で外に出したんだ、と言わんばかりの視線を向けられた熊沢と郷田が口々にもごもご口を挟んでくるが、今となつては仕方がない。戦人は二

人の無事を祈るしか、ない……。

……………。

……………。

……………。

熊沢がいそいそと入れてくれたお茶を口に含み、留弗夫霧江戦人の三人はほう、と息を吐く。

楼座の疑いはもつともだ、という納得こそあれど、しかしその疑いを常に向けられてい

るという環境から解放された安堵感で少しだけ力が抜ける……。

「それで……留弗夫様達はなぜこちらに？」

「——それ、は……」

「……へっ、いつも通りの兄妹喧嘩がこじれちまっただけ……兄貴と楼座に気を遣って親子三人で引きこもろう、ってことになったのさ」

……紗音の言葉に、戦人は咄嗟に声が出なかった。

自分が楼座に犯行を疑われ、それに伴って疑惑が留弗夫と霧江にも波及したのだとは、言えなかった……。

それを察してか留弗夫が言葉を引き継いで当り障りの無い内容で誤魔化す。

「まあ……なんという……」

四兄弟の折り合いの悪さをよく知っている熊沢がこんな時にまで……と嘆く。

……平時の留弗夫であればその言葉に蔵白や楼座への何らかの憎まれ口を叩いたのだろ

う。しかし、今の様々な要因が積み重なって疲れ切った精神状態では、それに関してコメントすることすらできなかった……。

「……結局姉貴とは腹を割って話すこともないままに死に別れちまったが……この状況下で兄貴や楼座とカッとなった末に誤射して地獄行き、あつちで姉貴とご面会……なんてのは御免被りてえからな……」

誰か……留弗夫のことを普段からよく見ている霧江以外の誰かであれば……その言葉に

明らかに毒気が無いのが見て取れただろう。
しかし、右代宮家の使用人として長年彼と身近で過ごしてきた熊沢も、この状況下ではその平静さが保てておらず、その事に気付くことはなかった。

「まあそんなこんなで、どこかの空いた部屋の鍵をもらってそこに籠もろうってことになった訳さ……紗音ちゃん、本館の客室の鍵を一個見繕ってくれねえか」

「ちらり、と使用人室の片隅に備え付けられ

たキーボックスを一瞥して留弗夫は本題に移る。

使用人室には本館とゲストハウスの全ての鍵が収められたキーボックスが存在し、使用人はそれをある程度自由に持ち出すことができる上に各々がマスターキーを所持している。

……使用人以外のほぼ全員が少なくとも一度は使用人への疑いを頭に抱いたのもその要素に起因する。

端的に言ってしまうのなら、……使用人さえ犯人ないし共犯であれば、凶行を発生さ

せること自体は容易なのだ。いとこ部屋での殺人が魔女の仕業だと騒がれていたのはひと

えに密室性の高さが問題というだけで、犯行の余地そのものはいくらでも存在する。そしてその余地が最も多いのが使用人である、ということは……恐らく、彼らも理解している……。

「それ、は……」

無論……留弗夫と霧江はいざ知らず……戦人に関しては使用人達のことを完全に疑って

いる訳では無い。しかしそれでも、頭の片隅程度にはその可能性を考えている。

だから今も、使用人室の外へ出たという源次と嘉音の安否を心配すると同時に、その二人が後ろから突然襲ってくるのではないか、という不吉で、侮辱的な考えを捨てきれない……。仮に彼らが犯人ではなかったとしても……そう、共犯であったのなら……ベアトリッチェを名乗る怪人物が今後ろから自分達を突然襲っても、彼らはそれを蔵臼や楼座に報告しないかもしれないのだ……。

そしてそれは、恐らく紗音も理解している

……。例えば、これで彼女が留弗夫一家に鍵を渡し、その後事件が発生したとしよう。

そうなった時……怪しまれるのは、誰……

……？

だから今、彼女は、留弗夫に鍵を渡すか渡さざるべきかを逡巡しているのだ……。

「危険じゃありませんか……？」

「危険だろうぜ……。だが、それでもあの客間にいるよりはよっぽどマシってものだ」

「……」

熊沢と留弗夫の会話を聞きながらも、紗音は尚も答えを出せないでいる……。

……と、そこに戦人が、声をかけた。

「……紗音ちゃん、俺からも頼む」

「戦人様……」

「……本当なら、俺たちも……」

「……いえ、承知しました。客室の鍵を一つ、留弗夫様方にお渡しさせていただきます」
す

戦人が自分に向かって苦々しげに頭を下げ

たのを見て紗音も覚悟を決めたのか、キーボックスへと歩み寄る。

そしてその中から一本を抜き取り、それを留弗夫へと手渡す……。

「ありがてえ……熊沢さんや郷田さん達も気をつけてくれ」

「留弗夫様もお気を付け下さい。もしお腹が空きましたらこの郷田、腕によりを掛けてお食事をご用意させていただきます」

その鍵を受け取った留弗夫は即座に立ち上

がり、踵を返すのと同時に霧江もそれに続く。

……使用人室には、戦人だけが、未だに立ち尽くしている……。

「紗音ちゃん……俺は……本当は、俺も……」

「……私達も、一番怪しいのは使用人ですよね、って話をしていたんです」

ぼそり、と……。

紗音が呟いた言葉に、戦人はぎくりと身を

疎ませる。

何故ならば、それは……戦人が幾度となく
脳裏に過ぎらせ、そして否定し、……それでも
捨てる事が出来なかった、恐ろしい考
え……。

それに則るのであれば、この使用人室は容
疑者達の集まる空間なのだ。用が済んですぐ
に部屋を出た留弗夫と霧江は、至極当然な行
動を取っている。その可能性が否定できない
以上、戦人自身もそれが最適な行動だと迷わ
ずに支持するだろう。

しかし、留弗夫と霧江が既に使用人室から

退出したにも関わらず戦人がその足を動かそ
うとしないのもまた、その可能性に起因する
ものののだ。

……憤り。その危険で恐ろしい、長年勤め
てきた彼らの忠誠を疑うその思考を、捨てき
れない自分自身に対する憤り……。

自分は、彼らを信じたのだ、という彼の
葛藤が……今も尚警鐘を鳴らし続ける彼の理
性から発せられる、すぐにこの部屋から出て
二人と合流しろ、という命令に、抗っている
……。

……そして、それは戦人が自身の手を痛い

程に握り締めているのを眼前で見ている紗音には、十全に伝わっていた……。

だから、紗音は、優しく告げる……。

「使用人は全員がマスターキーを持っている、だからいくら施錠がしつかりと行われていたとしても犯行は可能、そんな怪しい人達の中で長時間過ごすのは危険だ……それは、誰もが思い浮かぶ自然な結論です。ですから、戦人様が気に病まれる必要は、ないんです」

……それは、なんて優しい声色だったのだろう。

あなたが苦しいのは分かります。ですけれど、どうか自分自身を責めないでください。あなたのために、あなた自身のことを最優先で考えてください。

そんな意図が込められたであろう言葉に、戦人はハツとして顔を上げる。

「つ……あ、……くそッ……!」

そして、戦人は、自らを恥じる……。

一瞬、ほんの一瞬だけ、これで気にしなくてもいい、と思ってしまった自分を……深く、深く……恥じる……。

「鍵を持ってもいここ部屋は無理じゃねえか……！ 紗音ちゃんも俺と一緒に見ただろ、チェーンがかかってたんだぜ！」

今も、紗音達使用人を口では庇いながらも、頭の中でどうすれば犯行が可能だったかをシミュレートし続けてしまう自分を……恥じる……。

「無理なんだよ、俺が自分で、ちゃんとチェーンがかかっているとこを見てる！ 完全な密室の中で六人が死んでいた！ ニンゲンには不可能なんだよ、全部魔女の仕業なんだ……！ ああそうだッ、それで良いんだ……！ 皆を疑わなくても良い、皆から疑われなくても良い、魔女が不思議な魔法で密室を作って事件を起こしたんだ、それで全部解決じゃねえか……!!」

戦人は、叫ぶ……。誰かに、この感情を理

解して欲しいと言わんばかりに、叫ぶ……。

……本当に、そうなら。戦人自身が、本当にそう思っていたら……それは戦人にとつて、いったいどれほど楽なことだっただろう。

もし本当にそうなら、戦人は誰も疑わなくても良いのだ。脳内で「いや違う、こうすれば可能だ」と囁き続ける思考に抗わないで済む。全てを、魔女ベアトリーチェの仕業にしなければ、もう、考えなくても済む……。

「俺は……俺は、疑いたくない……！ 皆

を、疑いたくない……疑われたくないんだ……！！ あんなひでえことをした犯人が俺たちの中にいるなんて、あんな事件を起こしておいて、俺たちの中に平然と紛れ込んでいる人間がいるだなんて、考えたくない……！」

……ニンゲンには、幾つもの顔がある。

職場で厳しく部下に指導する顔と、家庭で家族に向ける顔が異なるように、ニンゲンは幾つもの顔を持つ。

戦人のこの慟哭も、その一つなのだ。

先程、犯人を暴いてやる、と叫んだ彼も。
今ここで、誰も疑いたくない、と叫ぶ彼も。

そのどちらも、右代宮戦人という個人を構成する、異なる顔。

だから、そのどちらも、彼にとっては、本当の感情……。

それは嘘偽りのない……真実。

「なのに、それなのに……！」

そして、真実だからこそ……、それは、痛

い……。

どちらも、彼にとっては嘘ではないからこそ、苦しいのだ……。

「そんな訳がないって思っちゃまう……！ 皆を疑いたくないって思っても、誰がどう動けばあの密室を成立させられるのかを、考えちまう……ッ！」

今の戦人に、そのような二面性が存在していることは、きつと六年前の人となりを知る者ならばすぐに気付く筈だ。

今の彼は過去と変わらず人情家で、日頃から明るく騒ぐことが好きで、けれど同時にそれを一步引いたところから醒めた目で俯瞰できる人物なのだ、と。

この六年の空白を経て、ただ無邪気なだけの青年ではなく、論理的な思考を持った一人の男として成長し、そしてこの島に訪れているのだと、きつと誰もが気付く筈だ。

冷徹に、シビアに、事態を俯瞰出来る能力を持つが故に、今彼が苦しんでいるのだということを、きつと、誰もが、すぐさま理解する筈なのだ……。

「……戦人様……」

自らを恥じる余り、目尻に涙さえ滲ませながら叫ぶ戦人に対して、紗音は何も言えなかった。

いや、自分には、彼に対して何かを言う資格はないとすら考えていたのかもしれない。

……こうして、誰かと会話をしている限りは表出しないものの、今の彼女の実態は生きる屍に近い。

譲治という、将来を誓い合った相手を……

…、昨夜、そのプロポーズを喜んで受け入れたにも関わらず、たった一晚でその相手を失ってしまった彼女は、“普段通りの紗音”という顔を被っているだけの、生ける屍ではない。

だからこそ、彼女には、戦人にかける言葉が見つからない。

彼が苦しんでいるということは痛い程に伝わっても、それに何をしてやるべきなのかが、分からない。

譲治との幸せという運命のルーレットに記された“出目”が、既に失われてしまったか

ら。■を失ってただの家具へと戻ってしまったからこそ、彼女には、何も、言えない…。

……だと、いうのに。

「……なら、戦人様。お願いがあります」

ならば、紡がれたその言葉は、誰の意志だったのか。

ニンゲンのフリをした家具が、人形が、戦人に告げたその言葉は、一体。

「讓治様を殺した犯人を、……例え、戦人様が、今この島に存在するニンゲンの誰をも疑いたくないのだとしても、それでも」

それは、なんだったのだろう。

愛する者を奪われた事に対する怒り？ 復讐したいという感情？

いや、きっとそのどちらでも、そしてそれらに類似した如何なるものでもなかった。

それは、きっと……。

「戦人様の手で、この事件を解き明かし、真相を暴いてください」

【それだけが、私の望みです】

「——それ、は……」

舌がもつれる。思考が白濁する。

今度は、戦人の方が何を言うべきなのか分からなくなる。

紗音が、何を思つて真相を暴いて欲しいと告げたのか。

その、能面のような、人形のような顔からは何も窺い知れない。

そして、それは、その言葉は……。

「紗音ちゃん、俺は……あの時のや——」

「——戦人！　いつまで喋ってんだ、行くぞ！」

……廊下から留弗夫の怒鳴り声が響き、その声で戦人はハッと我に返る。

気付けば、郷田も熊沢も、固唾を吞んで自分と紗音の会話を見守っていた。

いったいどれだけ紗音と話し込んでいたのかが曖昧で、今自分達が何を話していたのか……、いや、何をお互いに言おうとしていたのかすらよく分からない。

「……私にはお構いなく」

「……」

……これで話は終わりです、と。そう告げるかのような雰囲気と共に、紗音が一礼する。

曲がりなりにも交差していた目線が断た

れ、これ以上何も語ることはないとかかりに深く沈んだ上体は上がってくることはない。

寒々しい沈黙が、使用人室を満たす……。

「……分かった」

……だから。

「分かったぜ、紗音ちゃん……」

戦人も、覚悟を、決める……。

……この事件のせいで、六年の歳月を埋め

るために考えていた言葉……すまなかった

と、そう告げようとしていた言葉は、新たな人生の門出を祝う言葉と共にその機会を永遠に失った。

それはどうしようもないやるせなさ、悔

恨と、怒りを戦人に抱かせる。

だから、戦人は、宣言する。

「——俺が、暴く……」

人を殺す、ということは、ただその殺され

た誰かの人生を終わらせるということだけを

意味するのではない。

その人と共に過ごす筈だった誰かの人生を、その誰かが築くはずだった幸せの全てを、その根こそぎから奪い尽くすのが、誰かを失う、ということなのだ。

夏妃、絵羽、秀吉、譲治、朱志香、真里亞……その六人を殺し、そして彼らの死によってその奪った命と比べものにならない人数の人生を刈り取った誰かを、戦人は、許さない。

だから、戦人は、覚悟を決める……。例え、誰が犯人だったとしても。その誰か

に、その落とし前を付けさせてみせるのだと、覚悟を、決める……

「俺が……！ この事件の犯人を……ベアトリッチェの正体を、暴いてみせるッ……！」

《一九八六年一〇月五日一一…二五

「家族」

カチャリ、と。軽い金属質の音と共に、扉にチェーンが掛けられ、客室が完全に施錠される。

「……ふう……たった数十メートル移動するだけだったのに……やたら疲れた気分だぜ……」

「そうね……昨晚からずっとよ……」

留弗夫と霧江が憔悴した表情でベッドにど

かりと座り込む。

厨房から出た後も周囲を警戒し続け、そしてこの客室に入ってから室内に誰かが潜んでいないかどうかのチェックまでこなしたのだ。張り詰めた精神が限界を迎えたのか、先程まではいつでも発砲できるように抱え持っていたライフルもベッドの上に放り出され、二人揃って伸びをしている。

「……ほらよ、親父。霧江さんも」

そんな二人に戦人が洗面台から組んできた

水を渡す。コップは客室に備え付けのものだ。

「おう、助かる」

「ありがとう、戦人君」

お世辞にも冷たいとは言えないその水を、二人は礼を述べて受け取り、グツと飲み干す。はあ、と息を吐くその表情には昨晩からの疲労が未だ色濃く残っており、本来ならばこのような場所に三人だけで移動するべきではないということが明らかだった。

そうだ、本来ならば、この状況下で三人だけ別行動というのは明らかに異常なのだ。

どうやってあの密室を構築したか、という部分は度外視しても、六人を殺害できるのが犯人なのだ。仮に、本当にこの島に潜んでいる未知の集団✕が…というのが真相だった場合、その未知の集団✕の人数によってはここに籠城しようとも数で押し切られてしまうかもしれない。そうなってくるとやはり数を分散させたことは、失策だったと考えるしかないのだ……。

「……悪いな、二人とも」

……だから、そのコップをベッド脇のサイドテーブルに置くのを見届けて、戦人は突然そう呟いた。

「は？ 何だよ戦人、俺はお前に謝るようなことは幾らでもあるがお前に謝られることは何もねえぞ」

「いきなり頭を下げられても困っちゃうわ。どうしたの？」

二人の反応は至極当然のものだ。使用人室を出てやっと人心地付けられる空間に辿り付いたかと思えば、いきなり息子に頭を下げられるのだから混乱するに決まっている。けれど、戦人は戦人で二人に謝って然るべきだと考えていた。

何故なら……。

「……俺が、疑われたせいで、客間を出ることになっちゃったから……」

……そして、それはある一面としては正し

い。もしも戦人が疑われなければ……いや、
楼座があゝの推論に至らなかつたならば。きつ
と留弗夫一家はまだあゝの場所に居られた筈な
のだ。家族を失つた蔵臼と楼座に、昨日より
も少しだけ関係修復に成功した彼らの姿を見
せつけることになるのだとしても、霧江が戦
人を守るためにあゝの客間を出ようとまで提案
することはなかつた筈なのだ。

だからそうであれば、きつと、……………。

「……戦人君。顔を上げて」

けれど、そんな自責の念に駆られる戦人
に、霧江はそつと声をかける。

「霧江さん……」

恐る恐る視線を合わせたその瞳は……、彼
の記憶にある霧江のどんな瞳よりも、澄んで
いた……。

「……、……………。……リスク軽減のためだ
もの、戦人君のせいじゃないわ」

口を一度、二度開き……何事かを逡巡した後に告げられた言葉は、優しい声色のもの。

これまで戦人に対して、義理の息子であるとはいえどこか他人行儀な態度を取っていた霧江のものとは思えないような声……。

「あの状況下ではきつと誰かがストレスに耐えきれなくなつて遅かれ早かれ不幸な事故が発生していた……だから、今の私達の選択は、至極論理的な物……そうでしょう？」

戦人君が気にする必要はないわ、と励ます

ようにその肩に手を置く。

「おう、お前は気楽に昼寝でもしてろい。お迎えが来たら起こしてやるさ」

留弗夫も霧江の手の上から戦人の肩に手を置き、パン、パン、と叩く。

「二人とも……」

その言葉に、瞼の奥が僅かに熱くなる。お前のせいではない、と告げられることが、胸

に染みる。

感極まって何も言えずにベッドに腰を下ろす俺を、親父と霧江さんがにまにまとした顔で見ているものだから見せ物じゃねえ！と手を振った。

……………けれど、正直、意外だった。

クソ親父がこうやって軽快に軽く流そうとするのはまだ分かる。

けれど、霧江さんがこんな風に……………まるで本当の家族のように俺を励ましてくれるなんて、想像もしたことがなかった。

霧江さんは今、論理的な判断だ、俺に責は

ない、と言ったが、それは俺と霧江さんの普段の関わり方からすると少し……………いや、かなり奇妙なものだ。

俺は許されなくても構わない、くらいの覚悟で頭を下げたのだが、仮に霧江さんがその謝罪を受け止めてくれないのだとしても、もう少しクールな……………悪くいえば、ドライな反応を返してくるものだと思っていた。……………しかし実際の反応は今見た通り……………。なんだか、……………違和感がある……………。

「……………おつ、夕方頃には暴風圏から抜けるら

しいな」

「あら、それなら気が楽ね。最悪、月曜日も丸々潰れるかもしれないと思っていたし……いえ、現状を考えると外界と通信が復旧した後の方が気が重いわね……」

「まったくだ。なんて答えたもんか……」

……二人の会話は普段通りだ。強いて言うのであれば声色に覇気がない。また、会話内容も犯人への対処ではなく明日以降の警察が来た後の対応へ傾いている。

だがそれも無理もない。親父は深夜かなり

遅くまで呑んでいたらしいし、霧江さんもそれにつき合って遅くまで起きていたのだろう。そこからあの事件が発生して、ずっと気を張り詰めっぱなしという状態なのだから、精神的に疲労が蓄積している筈だ。二人の会話内容が島の中に潜んでいるかもしれない犯人への対処よりもやり過ぎた後の方に傾くことは……理解できなくも、ない……。

……いや、今はそんなことはどうでも良い。

今考えるべきは、いとこ部屋での事件の真

相だ……。

俺は、紗音ちゃんに、俺がこの事件の真相を暴くのだと宣言した。

紗音ちゃんは、俺に、この事件の真相を暴いて欲しいと願った。

……今度は、俺は、約束を守りたい。

……祝福の言葉すら許されることはなかった、だから、せめて……。

……考えをまとめよう。

重要なのは二つ。

俺は七時四五分頃までには、この島に存在している大部分の人物と顔を合わせており、八時過ぎにもう一度本館に戻ってきた際には直接顔を見ていない人物がいる、ということだ。

俺がゲストハウスから本館に来たのが七時過ぎ。

俺がゲストハウスへと戻ったのが八時過ぎ。

そこから慌ててとんぼ帰りして、親父たちを引き連れてまたゲストハウスへ……という

のがあの部屋を開放した時の流れだ。

ゲストハウスに戻るまでに、俺は蔵臼伯父さん、楼座叔母さん、親父、霧江さん、紗音ちゃん、源次さん、郷田さん、熊沢さん、南條先生を本館で見ている。

その中でも使用人の何人かは仕事で別の場所に行ったりしていたが、少なくとも一度は見ているのは間違いない。

そして俺が紗音ちゃんと共にゲストハウスから戻った際、蔵臼伯父さん、楼座叔母さん、親父、霧江さん、郷田さん、熊沢さん、南條先生の所在は確認済だ。

……いとこ部屋で発生した殺人は、「俺が鍵を持っていた」、「チェーンが掛けられていた」、「全員が他殺である」という三つの要素によってその密室性を担保している。

これはつまり、「中にいる全員が死んでいるから密室構築は不可能」というロジックだ。これによっていとこ部屋での事件は一見してニンゲンには不可能な魔女の仕業に思えてしまう。

しかし、これはあくまでも「中にいる全員が死んでいる」というロジックを前提にして

いる。

……そうだ、確かに中にいた全員が死んでいた。

俺は詳しく確認した訳ではないが、六つの身体が転がっており、そしてその全員が一目で死んでいると分かる状態だった。

だが、だからこそ、ここでチェス盤をひっくり返す……！

そうだ、逆なんだ、「中にいる全員が死んでいる」完全な密室だった、ではなく「生存者が実際には存在していた」密室性は失われる」なんだ……！

つまり、考え方はこうだ……！

『中に生存者が存在していれば密室構築は可能』……！

そしてそうなると自動的に推理はこう展開される。

『俺がゲストハウスから本館に戻ってきた際に所在を確認していない人物が、あの時にいどこ部屋の中に潜んでいた』……！

だからこそ、ここで先程の「七時四五分

頃までには、この島に存在している大部分の

人物と顔を合わせており、八時過ぎにもう一

度本館に戻ってきた際には直接顔を見ていな

い人物がいる」という部分が重要になる。

どちらのタイミングでも俺が視認していな

い人物は祖父様、嘉音君、被害者たちを加え

た八人。

八時過ぎに戻ってきた際に直接顔を見てい

ないのは祖父様、嘉音君、源次さんの三人。

……敢えて碌でもない言葉を使うのであれ

ば、狙い目はここだ。

そう、『俺が本館に戻った際に視認してい

ない人物はいとこ部屋の中に潜んでいること

は可能だった』のさ！

普通に考えればそんなことは不可能だ。し

かし、いとこ部屋は間取りの関係上、俺が源

次さんの入室に気付けなかったように、「室

内からは洗面所、トイレ、浴室の内部が視認

不可能。かつ、特定の角度からは入り口が見

え辛い」という特徴を持つ。だから、『俺た

ちが室内の死体に気を取られていた間にこつそりと部屋を出た』というロジックは成立する……！

そして俺はだからこそ、以下の推理を構築する……！

『密室を構築したのは俺が八時過ぎの時点で視認していない人物！ そいつはいとこ部屋の洗面所、トイレ、風呂場のいずれかに隠れており、俺たちが室内の死体に注視している間にこつそりと部屋から出た後どこかの段階で何食わぬ顔をして俺たちに合流、アリバイ

を主張した……！』

いける……！ これならあの事件は説明できる……！

祖父様、嘉音君、源次さん……死体が六つも運び込まれていた辺り、この三人が全員共犯であることすら想定できる……！

これならば、事件の構築は可能だ……！ 後はあの三人をまとめて一カ所に固めて監視をしてしまえば……。

三人、を……。

……と、そこまで考えて、俺はハッと思考の海から浮上する。

「……待てよ、じゃあつまり今祖父様が姿を眩ませたということは……」

……そうだ……。

仮に、今構築したこの推理が真実だったとして。

ならば、犯人ないしは共犯であろう祖父様が姿を消したというのは、一体どういう意味なのか。

「素直に考えるなら祖父様が姿を消したのは犯人に襲われたか、或いは自分で姿を消したか……。でも、どっちにしろ、やっぱり……」

「戦人君、何の話？」

……いつの間にか、考えが口に出ていたのだろう。

霧江さんが、祖父様がどうこうという発言を耳にしたのか話かけてくる。

「……。……祖父様はなんで消えたんだろう
な、って考えてたんすよ」

一瞬、これまでの推理を全て話してしまおうか……。と考えたものの、それはまだ時期尚早だと思い直す。

仮にこのまま、あの三人が犯人ないしは共犯であればいここ部屋での事件は解決可能だ、と示したとしても、それイコール事件の真相であるとは限らない。可能性の全てを考慮した上で改めて結論を出すべきだろう。

それに、この推理の細かい部分を詰めていくのは構わないが、この推理はなんというか……。

……この推理は、非常に……。『如何にもそれらしい』のだ。

祖父様と嘉音君と源次さんの全員ないしは誰かが犯人。その仮定は一見して全てを説明できてしまうからこそ、それを真相なのだ、と突き付けてしまえば、……。俺は何か大事な部分を見逃してしまうのではないか……。？
そんな第六感じみた、警鐘を鳴らす感覚が、俺の中にはある……。

そもそも、俺はあの部屋の完全な検証を

行っていないし、この島に未知の人物である

一九人目の✕が潜んでいる可能性も否定されていない。

まだあの三人が完全なる黒だと決めつけて

しまうには、早過ぎる……。

「お義父様？ ……そうね、確かに謎だわ」

ベッドから立ち上がり、俺の向かいのソ

ファアに移ってきた霧江さんと会話を始め

る。

ぼんやりとテレビを眺めている親父を二人

して横目に見ながら俺たちは霧江さんの手帳

や部屋に備え付けてあったメモ帳に様々なこ

とを書き込みながら祖父様消失の謎について

考えていく。

「朝八時頃の時点では源次さんや嘉音君が金

蔵さんの部屋に出入りしていた。これを素直

に受け取ると、金蔵さんは少なくともその時

間までは書斎に居たのよ」

そうだ。……少なくとも、そういうことになっっている。

「朝∞時点での祖父様の所在は本館だった」のだ。

だが、俺がいとこ部屋で夏妃伯母さんの死体を発見して本館へと戻り、皆を引き連れてゲストハウスへ、そこで現場を見た後に本館へ……という流れを踏んだ上で親父、蔵臼伯父さん、楼座叔母さんが祖父様に意見を仰ぎに向かったところ、祖父様は姿を消していた。

……姿を消したこと自体は、あまり重要ではない。

なんでも祖父様は普段は書斎に引きこもっているながらも、時折気まぐれを起こして周囲には何も伝えずに散歩に出かけるということが時折あったそう。

だから、祖父様が書斎に居ない、ということとそれ自体はそれほど重要ではない。今回もご当主様には何か深謀が在らせられるのだろう、と気紛れで外に出たことを否定する必要がなくなるからだ。

……しかし。

「……でも、源次さんが、祖父様に事件のことを知らせた、と俺たちに言ってしまったてる……」

「そうなのよ。源次さんは金蔵さんに事件のことを知らせた、と私達に報告した。つまり、その段階でも金蔵さんは部屋に居た」

源次さんは、祖父様がその段階に至ってもまだ部屋に居たのだと、俺たちに言っ

まった。

そして、絵羽伯母さんたちが無惨な姿で見された、という源次さんからの報告を聞いている筈なのだ。

……いくら祖父様が常人の思考では測れない傑物だったとしても、流石に娘や婿養子、孫たちが何人も死んだというにも関わらず呑気に散歩に出たとは思えづらい。

しかし、散歩で部屋を出たのではないとしたら、それは……。

「……お手上げね」

「そうっすね……現状では祖父様が事件に巻き込まれた被害者なのか、それとも何らかの意図を以て部屋を自らの意志で出たのが判断できない」

二人で揃って首を振る。

……ダメだ。やはり、これ以上推理を進めようとするのであれば、この部屋に籠もっているはどうしようもない。

実際に祖父様の書斎に赴いた上で詳細な検証を行わなくては、この先へと進めない。

そもそも、俺は今暫定的に祖父様、源次さん、嘉音君をそれぞれ容疑者であると仮定しているが、やっていることは安楽椅子探偵のそれではない。

何度も繰り返すが、本当にこの三人が犯人ないし共犯であることと、一八人の中のこの三人以外の誰かが犯人である可能性、そして一九人目の×がこの島に潜んでいることは、全てが並列する。

真相が完全に暴かれ、あのいとこ部屋での事件はこれこれのように行ったのだということが確定し、それが皆に認められるま

でこの三つは全てが成立する。

……だから、それは逆に言えば、ここから更に推理を進めるにしても最低でもこの三つを同時に進行させなければならぬということなのだ。

……情報が、足りない。

「……霧江さん、俺はちよつと外の空気を…

…」

だから、俺は決意を固める。

テーブルの上に散らばったメモ用紙を掴み取ってポケットに突っ込み立ち上がる。

……外が危険だ、というのは簡単だ。だが、俺は約束したのだ。必ずこの事件を解き明かして見せると、誓った。

俺は名探偵でもなんでもない。だから、

『実際にこの目で見なければ、きつと何も分からない。』

しかし逆に言えば、『この目で見れば、何が分かるかもしれない』のだ。

だったら、俺がやることはただ一つ。

それは今すぐこの部屋から飛び出して、現場検証を行うことだ……！

「——ダメよ」

……だというのに。

「ダメ。……それだけは、認めないわ」

霧江さんは、これまでこの人と関わってきた中で、一度たりとも聞いたことのない強い口調で、俺を、止める……。

「……なんだよ、ちょっと廊下に出て、窓の外のを空気を吸ってこようってだけじゃねえか」

「嘘ね。ダメよ、戦人君。それは留弗夫さんと同じ嘘の吐き方よ」

……一瞬で見抜かれた。

いや、見抜かれたなら仕方がない。

「……分かってるなら仕方ねえ。悪いが俺は

行くぜ……！！ 事件の真相を暴くんだ……

……！！

「いいえ、ダメ。それだけは許さないわ。ここに居なさい」

……冷たい、声。

そしてその声の主は、あろう事か、俺の腕を掴み引き寄せてくる。

その力が想像以上に強く、ぎちり、と……万力に挟まれたように鈍い痛みを奔らせてくる。その痛みに、思考が沸き立ち声が上擦る。

「——なんでだよ！ 譲治の兄貴や、朱志

香、真里亜……絵羽伯母さんも秀吉伯父さんも、夏妃伯母さんも！ みんなベアトリ―チェを名乗る犯人に殺された……！ その犯人をとつちめようってのは何かおかしいのかよ……！！」

カッとなつてその腕を振り解こうとするが、それでも霧江さんは俺の腕を離さない。

「……そうね」

その声は、冷たい……。

これまで霧江さんと関わってきた中で体感したことない、日頃のクールな雰囲気とはまた違う別種の冷たさに俺は身体を竦ませる……。

「冷たい言い方になるけれど、それはおかしいことよ。戦人君が身の危険を冒してまで探し求めることではないわ」

「な、んでそんなことを言うんだよ……！」

俺はよ、霧江さんのことはクールな人だとは思ってても、そんな無慈悲なことを言う人だとは思ったことはないぜ!?　なのに、なんだよその言い草は……!」

「……何とでもいって頂戴。けれど何を言われようとも私は戦人君がこの部屋から出ることを許さないわ」

尚も変わらずに俺の腕に手を食い込ませながら、きつぱりと。

霧江さんは、再びそう言い切った。

冷たい、某かの決意を秘めたような声色

は、やはり普通の彼女のイメージとは一致しない。

……しかし、俺はその感覚そのものには既視感がある……気がする……。

霧江さんではない。誰か……身近にいない誰かとの会話でその感覚に触れたことがある気がするのに……それが誰だったのが、思いつけない……。

……いや、俺が思いつけないというよりは寧ろ、霧江さんがその雰囲気醸し出すことが信じられない、といった方が正しいのか……

……？

霧江さんだから、……いや。

「霧江さんから向けられた感情だから」、

「それがそうなのだと分からない」……？

「……戦人、それくらいにしておけ」

「親父……！」

けれど、そんな俺の思考は親父が声を掛けてきたことで中断される。

……どうやら、ぼんやりとテレビを見てい

るフリをして俺たちのやり取りを伺っていたらしく、霧江さんと二人して俺を止めに回る。

「霧江は、……母さんはお前のことが心配なだけだ。……今お前は讓治君たちの仇を捕まえてやる、と言ったが……それだって簡単にできる事じゃない。お前が返り討ちに遭う可能性だってある」

頭のどこかで見ないようにしていた可能性を指摘されて、息が詰まる……。

……そうだ、確かに俺は、その可能性を無視している……。

ミステリーの探偵のように、無事に全ての証拠を集めきるまで無事であるという保証は……その探偵ですら場合によっては危害を加えられることもあるというのに……。だから、ミステリーではない、ただの個人である俺が、無事に犯人を突き止められるという保証はない……。

……だが、俺には……約束が、ある……。

「……それくらい、覚悟の上だぜ……」

「……戦人」

自分でも、声が震えていることが分かる。

そんな俺に、親父は気持ち悪いくらい穏やかな声で、語りかける。

……正直、親父が俺を止めるだろうことは想像できていた。

けれど、親父がその後に続けた言葉は俺の想像を超えていた。

「……いいか戦人。霧江が客間を引き上げた

のは同士討ちを警戒してのこともあるが、：

…それ以上にお前を危険に晒したくなかったからだ」

「……は……？」

「お前が、楼座に疑われ……銃口まで向けられたからこそ、霧江はあの提案をしたんだ」

あまりにも信じられない言葉が、その口から告げられたせいで素っ頓狂な声が漏れ、咄嗟に霧江さんの方へと振り向く。

霧江さんが、わざわざ俺のために……？

俺と霧江さんの関係は、……端的に言つて冷えている。

傍目には、俺たちは、母親とは呼べないが人間としては継母を慕っている俺と、それを受け入れている霧江さん、という構図に見える筈だ。

だが、それはきつと、俺たちがお互いに……お互いに大人なのだから妹の縁寿にも悪いだろう、と……そういう風に、継母と息子としての関係を、装っているに過ぎない……。

……そして俺は、俺には……きつと、霧江さんは、俺のお袋である右代宮明日夢との関係が陰悪だった、少なくとも好ましいものではなかったのだろう、という確信がある……。

判断材料は、幾つかあるが……。それは、家を飛び出してから数年後には、もう既にお袋の面影を感じさせる様々な物が目の届く範囲から消えていたこと……。そして、それ以上に……聞いたことがあったのだ。

……霧江さんと親父には学生時代からの親

交があったこと、そして……お袋と親父の馴れ初めに関する話で、判断出来てしまう要素が、あった……。

……きつと……「親父と出会ったのは、霧江さんの方が先だった」……。

後から入ってきたのはおそらく、俺のお袋の方……。

だから、恐らく……俺が産まれなければ、或いは……。

……そんなことを、考えたことがあるの

だ。

だから、だからこそ……俺と霧江さんの関係は、冷えている……。

お互いに、そんな「もしも」を、内心に抱えながらも……縁寿と、俺に頭を下げた親父のために、仲が良いフリをしている……いや、それを二人とも理解した上で振る舞っている節すらある……。

なのに、そんな霧江さんが……俺のために、あの安全な客間を、出た……？

「……留弗夫さん、やめてちょうだい」

霧江さんは俺の腕を掴んでいた手を離し、顔を覆う。

まるで、一時の気の迷いを咎められたかのように、俺の視線から顔を逸らす……。

……その反応で、分かってしまう……。親

父の言葉は、事実なのだと……。

思考が、まとまらない……。

これまで、……特に、事件発生以降、俺た

ちはお互いの考えていることを簡単に推測できた。

お互いに、お互いが考えていることを推測した上で、新たな考えを語り合うことができた……。

だというのに、今は、霧江さんが何を考えているのかが、分からない……！

「なん、で……霧江さんは、俺のことを……」

…」

……“内心憎んでいるのでは”……とまで

は、言えない……。

……その言葉を、本当に口にして、それが真実になってしまふのが、怖い……。

本当は違うのだとしても、それが俺の口から出たせいで、「俺が霧江さんに対してそう思っていたということが真実なのだ」と確定してしまうのではないか、そんな恐怖が……抑えられない……！

「……」

霧江さんは、何も、言わない……。

……俺が今、呑み込んだ言葉を理解しているのか、……それさえも分からない……。

「……戦人。お前が、俺のことを恨む分には、構わない。だが……霧江の、お前の母親のことは、分かってくれ」

……
そんな俺に、親父がゆっくりと、語る……。

「親父……」

……もしかすると、俺は、何かを間違えていたのだろうか。

……人には、幾つもの顔がある。

六年前より以前の俺は、親父のことをキザで女にだらしないけれど、スマートでカッコいい父親だと思っていた……。

けれど、その認識を、俺は一度は捨てた……。親父に失望し、そのイメージを幻想だと、切って捨てた……。

……しかし、それは否定されるべきもので

はないのかもしれない。

親父が持つ顔はその一つだけではない、というだけで、それもきつと一つの真実なのではないか。

そしてそれは、俺が抱いている霧江さんに対するイメージも、同じこと……。

俺は、霧江さんは本当は俺のことを邪魔だと思っているのだと、そう考えていた……。

……仮にそれが正しかったとしても……。それが真実だったとしても……。もしかしたら、それだけでは、ないのかもしれない……。

霧江さんも、俺に対して……何らかの歩み
寄りをしようとしていた……それを、俺が……
…気付かなかっただけで……。

……それは、なんて、幸せなことなのだろう。
う。

霧江さんと話している時に……親父や、縁
寿と一緒に、四人で過ごしている時に……そ
の考えを胸に秘めておくだけで、俺はきつと
霧江さんの笑顔の裏にあるものを恐れなく

て、済むようになる……。

霧江さんを、クールでかつこいい大人の女
性として懂れていた幼い日の俺のように……
その他愛ない会話の内容を、純粋に信じられ
るようになるのかも、しれない……。

そうなれば、俺はこの部屋で、明日の朝ま
で俺と親父と霧江さんの三人で穏やかに会話
しているだけで、本当の家族になれるのだ……

…。

それは、それは、なんて……。

……。

.....。

.....でも.....。

——ちゃんは、あの子との約束は.....。

「あの子との約束を、また.....」

幸福な想像に心が揺らぐ中で、それに待ったをかける俺が居る。

「また約束を破るのか」と、咎める俺が.....

別の顔が、居る.....。

「.....分かった」

「！ 戦人.....！」

.....そうだ、もしも俺が今、その思いを受け入れて.....ここから出て行かなければ理解できないと、そう確信している事件の真相への歩みを休ませてしまったのなら.....。

俯きながら答えた俺に、親父が一步步寄りるのが分かる。

顔を上げれば、その表情は明るく、そして

視線を巡らせれば霧江さんも表情を和らげているのが見て取れる……。

……胸が、痛い。

今、二人が考えていることが、手に取るように見えるからこそ、それを今から否定する選択をしなければならぬことが、痛い……

でも、俺は……。

もう、決めたのだ。

「親父と、霧江さんの気持ちとは、分かった。

……でも、俺は、約束したんだ」

そう告げて、俺はドアへと向かう。

「戦人君……!!」

「……悪い」

「……!!」

霧江さんの腕は、もう届かない。

俺は、ドアの前へと、立つ……。

「……戦人」

「……悪いが、俺は行くぜ」

……正直なところ、まだ引き留められるも

のだと思っていた。

しかし、親父が口にした言葉は、違う。

「……女との約束か？」

凶星を言い当てられて、息が詰まる。

……クソ親父め。そういうところだけ鼻が

効きやがる……。

「……はあ。女との約束だったら……まあ仕方ねえよなあ……」

おい、持っていけ、と。

親父が、何かを俺に放り投げる。

「っ、……おいクソ親父、これは……」

咄嗟に受け止めたものが、一瞬何なのか理解出来なかった。

いや、何なのかは分かる。だが、何故それ

を渡したのが、理解出来ない……。

それは、鍵……。

この部屋の、鍵……！

「留弗夫さん……！」

「あのバカはもうこうなったら言っても聞
きやしねえよ……全く、ろくでもねえところ
ばかり俺に似やがって……」

「……っ……。……そうね。もう本当、その
通り。留弗夫さんにそっくり……」

「親父、霧江さん……」

目尻が、熱い……。

この部屋の鍵を、今部屋から出て行く俺に
渡したということは、つまり……。

「お使いを頼むぜ戦人。昼時だから腹減っち
まってよ、郷田さんに何か用意してもらって
きてくれ」

「なるべく、……できるだけ早く帰ってきて
ちょうだい。外は危ないもの」

冗談めかして笑う親父と、肩を竦めて苦笑
いする霧江さん。

……もう、何も言うことはなかった。

二人が、俺のことを案じて、それでも尚俺
のやりたいことを優先しろと言ってくれたの
だ。

そうして俺は、安全な部屋から、……凶悪
な殺人鬼がうろついているかもしれない外へ
と、自らの意志で舞い戻る……。

「……………」

ドアの鍵を外から施錠すると、すぐさま
チェーンが架けられる音がする。

その音は、こちらは心配しなくて良いか
ら、思いつきりやつてこいという、親父から
の激励に聞こえた……。

「……さて、まずは……。……へっ、お使い
から済ませるとするか……」

俺はばしやり、と自らの頬を打ち、気合を
入れ直すのだった……。

「ああ、それは俺も同感だ……つと」

◆ ◆ ◆ ◆ ◆
……そして。

部屋から出た戦人が自ら貸し与えた鍵でドアを施錠する音を聞き届けて、留弗夫はドアのチェーンを架けました。

「……はつ。戦人のやつ……いつの間にか大人になりやがって……」

「……あんまりあなたに似られても困るわよ」

留弗夫はそうぼやきながら、視線だけはドアに向けたままベッドに飛び込みます。

「……無事に帰って来いよ、バカ息子……」

これで留弗夫と霧江の部屋は完全な密室となりました。

扉には鍵が掛けられて、チェーンまでが架けられた二重の施錠。

部屋に入るには鍵を持っているだけではな

く、二人が部屋に入ろうとするそれを誰のかしつかりと確認した上でチェーンを外さなければ入れません。

そして今の二人は、恐らく戦人以外にこの扉を開くつもりはないのでしょうか。

だから今やこの部屋は完全な密室。ニンゲンには如何なる手段を以てしても立ち入れぬ、鉄壁の空間……。

……そう、ニンゲンには。ただのニンゲンである二人には……、それを感じ取れないのです。

その、魔力の、揺らぎを……。

今正に、ドアの前に、一匹の黄金の蝶が、舞っていることを……。

コン、コン。

……最初、それを二人は聞き間違いかと思いました。

或いは、窓に枝か何かがぶつかった音なのかと、考えました……。

……けれど、その考えは……。

コン、コン。

二度目の……「ドアをノックする音」と主に、溶けて消えてしまいます……。

「……………」

「……………」

二人の間に、緊張の糸が張り詰めます……。

手元にそれぞれ一丁ずつのライフルを引き寄せて、そつと……そーつと……ドアに、近付いていく二人の顔には、冷や汗が、ひとすじ……。

「……悪いが、ただいま夫婦の時間を漫喫中でな……ベッドメイクはご遠慮願いてえんだが……」

扉ではなく、その脇の壁に背中をぴったりと付けて留弗夫が尋ねます。

仮に、いきなり壁が蹴破られても、すぐさ

ま反応できるように。

そして、霧江も、いつ誰がいきなり部屋に飛び込んできても良いように銃口を扉へと向けています……。

……それだけの万全の警戒を行った二人でしたが、しかし、部屋の外から聞こえてきたのは――。

「――はあ？ 何馬鹿なこと言ってるんだよ親父。忘れもしちゃったから入れてくれ」

「……」

「……」

それは、戦人の声でした。

留弗夫は霧江と顔を見合わせて、用心深くチェーンを外すことはせずにゆつくりと、扉を開き……。

「……すっげえ間抜けな顔してるぜ、クソ親父」

「……つはあ……勘弁しろい……」

そこにあったのは紛れもない二人の息子、

右代宮戦人の姿でした。

一度扉を閉めた留弗夫が霧江にアイコンタクトでそれが間違いなく戦人であることを示し、張り詰めた緊張の糸が、あっさりと解けます。

「おい親父、早く開けてくれ。閉め出すなんて勘弁だぜ」

二人は脳天気な息子の声に、すっかり毒気を抜かれてしまいました。

うるせえよ馬鹿、この間抜けが……。そんなことを呟きながら留弗夫はチェーンを外し、そして扉を開けました。

そこにはバツの悪そうな顔をした戦人の姿が――。

「ハアアアロオ、ナイストウミイチュウウ、ル・ド・ル・フウウウウ??」

「……は？」

留弗夫は、思わず素っ頓狂な声を漏らして
しまいます。

ですが、それも、無理はありません。

何故なら、扉の前に立っていたのは戦人では
なく、全く別の人物。

見覚えのない人物でした。

けれど、嫌でも顔を知っている人物でもあ
りました。

豪華なドレスを身に纏い、端正な顔立ちを

悪戯っぽい笑みで歪めた、金髪の女性……。
それは、この右代宮の屋敷に入った時、嫌が
応にでもその顔を見ることとなる顔。

「そ、んな——」

留弗夫の肩越しに、そこに立っている人物
が誰なのか、霧江は見てしまいます。

それは、それは……。

「——ベアト、リーチェ……!？」

「ッ……!!」

一瞬呆けていた留弗夫ですが、霧江のその驚愕の声を聞いて即座に判断を下します。

扉を閉めて、そしてその上でチェーンを架けるのです。

そうしなければ、命はない。そんな確信すらありました。

……だと、いうのに。

「な、……!?」

その扉は、……閉まってくれません。

まるで扉とその枠の間に、大きなゴムの

ボールでも挟まっているかのように……ギチギチとその扉が閉じることは、ないので……。

「う、ぐうお……!!」

「くくくつ!!」

どうにか扉を閉じようとする留弗夫を見ながら、ベアトリーチェはその無様な姿を嘲笑います。

その手に反魔法力の権化のような銃器を持

ちながらも、動揺のあまりその使用に思い至らない無様さを囁きます。

「うおおおッ!」

「どうしたア、留弗夫うう?? そなた、昨夜

黄金の魔女ベアトリーチェは、莫大な魔力を持つ千年の魔女。

の親族会議でこう言っておったではないかア。"もし本当に魔女様なんてものが居るのなら顔を拝んで口説いてやりてえぜ"、と……。口説いてみるよおお!」

第一の晩の生け贄を捧げられ順調に全盛期の存在へと復活しつつある彼女は、その歩みだけで彼女の眷属である黄金蝶の暴風を生み出します。

……そして、その言葉と共に、魔女は一歩、……踏み出しました。

吹き荒ぶ黄金の旋風に思わず留弗夫が後退りし、ぎりぎりのところで抑えられていた扉が遂に開け放たれてしまします。

一歩、二歩……。

よろよろと後ろに下がっていく留弗夫とは
対象的に、ベアトリーチェは優雅に、そして
傲然と部屋の中へと踏み入ってゆき……。

屋敷の真の主たる、黄金の魔女ベアトリー
チェの前においては、そんなものは紙切れほ
どの防御力もないのです……。

パチンツ——と指を鳴らした瞬間、ボタン
と音を立てて部屋の扉が閉ざされて、黄金の
蝶が纏わり付いたチェーンと、鍵が、ひとり
でに閉まってしまふ……。

「さて……これで邪魔は入るまい……。第一
の晩は慌ただしかったのでな。一服させても
らおうぞ」

そう、つい一分前までは留弗夫と霧江の安
全を保障する聖域だった筈の鍵とチェーン……
それは、所詮ニンゲンの護り……。

黄金の魔女が優雅に煙管を持ち上げると、
その先端に黄金の蝶が一匹留まりポツ——と
火を灯します。
それを一口吸い、怪しげな香りのする煙を

吐き出すと魔女は改めて硬直する二人へと向き直りました。

「光栄に思うが良い、そなたらが、第二の晩の生け贄よ……！」

煙管であると同時に、魔女のケーンであるそれを振り上げると、部屋の内側が黄金の旋風によって塗り潰されていきます。

「思えばそなたらが第二の晩の生け贄に選ばれることは珍しいよなア。まあ、此度のゲー

ム盤は寄り添う者達が第一の晩におおよそ選ばれ尽くしてしまった、という特殊な事情もあるが……」

「……？」

それは魔女の視座を持つ者へのみ理解できる発言。

ニンゲンでは、駒では、その言葉の意味を図ることさえできないでしょう。

……けれど、逆に言えば、魔女の視座を持つ者であればこのゲームが些か奇妙であることに気付くでしょう。

かつて、ラムダデルタ卿がゲームマスターを務めて行われたゲームがありました、今回はそれとも趣きを異にしています。

それが何を意味するかは、ベアトリーチェも与り知らぬこと……。

今の彼女が未だ復活を果たさざる駒である以上、まずは彼女が復活しないことには、何も始まりはしないのです。

「——なんなの、貴女は……!?!」

先に混乱より復帰したのは、霧江の方でした。

妻がガチャリ——とレバーを回し、銃弾を再装填するその姿に留弗夫も気を取り直し、同じようにライフルを構えます。

「妾が何者か、と？　くつくくく……愚問であるなあ霧江よ。妾こそは、六軒島の真の主、黄金にして無限の魔女ベアトリーチェ……!?!」

けれど、魔女は銃口を二つも向けられてい

るにも関わらず、なんらそれを意に介しませ
ん。

……魔女や、その異界の眷属達の中では、
不用意に銃の前に姿を顕わすことは致命的な
行動であるとされています。

それは、銃器そのものが反魔法の毒素の結
晶であるが故。

その銃弾は、幾重にも入念に準備された結
界でなければ、例えば大魔女であっても容易に
防ぐことは能わない……。

「そのライフで妾を撃つも良し、それを投

げ捨て慈悲を乞うも良し、そのどちらかだけ
を選ぶ権利を与えようではないか」

しかし、それを当然理解し、熟知している
というのに魔女は傲然と嗤うのみ……。

それは、つまり……。

「……そうかよ、じゃあ俺たちの答えは一つ
だけ」

「貴女の正体は死体を漁ってから考えさせて
もらうわ……！」

自分から死を選ぶやつがあるか、と引き金に指をかける霧江と留弗夫。

ガチャリ——と。その二つの銃口が、違わず魔女の頭部に向けられる。

「——はン、よからう、その無謀が何を産むか……、それをそなたら自身の身体で試すが良い……！」

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

“character.5” が更新されました

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

《引き裂かれし二人》

「悪いな嘉音君」

戦人は前を先導して歩く嘉音に声をかける。

息巻いて留弗夫と霧江と共に入った部屋を飛び出した戦人であるが、ちょうどすぐそこで屋敷内の見回りから帰ってくるタイミングだった嘉音に鉢合わせ、行動を共にしていたのだ。

「いえ……お一人で屋敷内を歩くことほど危険なことはありませんので……」

「……源次さんと一緒なんじゃなかったのか？」

「源次様は反対側に回っておられます。それに、戦人様こそなぜこんなに……」

「ん、ああ……ちよつと、犯人捜しをしようと思つてな……」

「そう、ですか……」

そこで会話は止まってしまった。

二人の僅かな足音と、窓の外から響く雨音

だけが、二人の間に響いている……。

……当然、戦人は疑っている。

目の前にいる嘉音を、……少なくとも一人の中の最有力候補の一角として、今も冷静にその行動を観察している。

何か武器のようなものは……持っていないように見えた。

それに、昨日の昼、嘉音と薔薇庭園で出合った時、力仕事はあまり向いていないように見えたことも、戦人は記憶していた。

……仮に、嘉音と源次が、二人で一緒に居

たならば……戦人は、きっと二人に気付かないように動いただろう。

しかし、嘉音一人であれば……。

「……戦人様」

「……なんだよ嘉音君」

注意深く、それと疑われないように……。

さりげなく嘉音を警戒していた戦人に対して、嘉音は無防備に背中を向けたまま声をかける。

「紗音から、聞きました。真相を暴き出す

と、約束なさったそうですね」

「……ああ。素人探偵いっちゃ上がり、って感じだぜ……。探偵だと思ってたら二番目の事件で殺されて読者を驚かせるための賑やかしに……って要員にはなりたくねえところだ
が……」

紗音が嘉音にあの約束のことを話したとい

うのは正直なところ以外だった。

しかし、二人は血こそ繋がらないものの、

孤児の養護施設である福音の家で実の姉と弟

のように育った仲だという。

そう言われてみれば血が繋がっている訳でもないのに雰囲気似ているような気がしないでもない。自分は与り知らぬ二人の関係と
いうものがあるのだろう。

「……そうですか」

「……」

……嘉音の声からは、一切の感情が感じられない。

それはどこことなく、先程の紗音に似ている

ように感じられた。

……どこか、非人間的な、雰囲気が……。

「……でしたら、戦人様。大変厚かましいお願いだとは自覚しているのですが、一つよろしいでしょうか」

——ピタリ、と。

その言葉と共に、嘉音が何の脈絡もなく立ち止まる。

「ッ……」

その唐突な動きに戦人も思わず立ち止まる。

嘉音が振り向かないのを良い事に咄嗟に周囲を確認するが、源次の姿は見えない。

会話で自分を引き留めその間に襲撃する気はないようだ……と判断し、嘉音の言葉を聞く。

「……おう。俺に、出来ることであれば」
「……」

——ザ——————……。

——ザ————————……。

……雨の音が煩い。

嘉音との沈黙しがちな会話の中で、お互いが口を噤む度に風雨のざわめきが空気を侵食していくような、そんな感覚を抱く。

「……………さい、ですか」

「……………なんだって？」

その言葉は、最初はなんと言ったのか分か

らないほどにか細いものだった。

だから、意識が嘉音と周囲への警戒よりも、その言葉を聞き取ろうとする方へと向けられていく。

……驚愕したのは、そういった理由もあるだろう。

嘉音が、振り返った瞬間、戦人は息を呑む。

「この事件の真相を、暴いてくださいますか」

……その表情に、絶句する。

それは、昨日から幾度か見た嘉音の端正だが物憂げな表情ではなく、まるで……。

脳裏に浮かぶのは、デスマスク、死体、……

……人形。そうだったもの……。

既に人の魂を失っている存在が、どういう理由か動き続けているような、そんな不気味な雰囲気、薄暗い廊下に嘉音の顔で、浮かんでいる……。

「……それは、紗音ちゃんと同じように、と

いうことでもいいのか」

「はい」

「……」

……考える。

……朱志香。

紗音と譲治が事実上の婚約者の関係にあったことは、……知っている。

昨日の内に、それを朱志香に聞いたからだ。

しかし、朱志香と嘉音。この二人が、お互いに淡い好意を寄せ合っているというのは、

鈍い自覚がある自分でも、一目で分かった。

そういったものは、島の本人達よりも、周囲でそれを眺めている人物の方が理解し易いものだ。だから、きつと、朱志香と嘉音の関係性は、多くの親族達が、ほんのりと感じていたに違いない……。

……譲治を失った紗音のことは、考えていたというのに……。

嘉音の方は、目の前で嘆いている様を見ていないからといって勝手に脳内で犯人扱い……。

戦人は、恥じる。その短絡的な思考が、例

え嘉音本人には一切の影響を与えないのだとしても、どれだけ嘉音の名誉を穢したのかを想像し、その考えを悔いる……。

先程からの警戒心を剥き出しにした行動が、どれだけ彼の心を蔑ろにしていたのかに思い至り、それを今更のように悔いる……。

……そう考えれば、嘉音のこの不気味な表情も、朱志香を殺された怒りと悲しみをどうにか押し殺した結果の表情なのだ、と……思えなくもない……。

……だが、それとこれとは、別の話だ。

紗音と交わした約束を遂行するには、きっと事件の真相として考えられる全ての可能性を除外せず、その全てを十全なものに仕上げなければならぬという確信が戦人にはあった。

だから、例えば嘉音が朱志香の敵討ちを望んでいて、紗音と同じように自分に事件の真相を暴く事を願っているのだとしても、それは犯人から除外するには、早計に過ぎる……。

仮にそれを考慮するのだとしても、それは犯人から除外するのではなく、「なぜその上

で犯行を行ったのか？」と考える方向でなくてはならないはずなのだ。

……。

しかし……。だとしても。

「……嘉音君」

「はい」

「俺は、……使用人達を疑っているんだぜ……」

……？」

「当然だと思います。戦人様の視点からでは、恐らくそう考えるのが最も自然でしょう

から」

「……最終的に、嘉音君自身に……」お前

が、犯人だ”と指を突き付けることもあるかもしれない……」

同じことを……？」

……沈黙があつた。

息苦しく、重い、重い沈黙があつた。

戦人は、言葉を選びながら、慎重に続け

る。

けれど、その沈黙を破るように嘉音が深

く、深く息を吸い込み――。

それでも良いのか、と聞きながら。

――……。――。

「……」

「それでも、嘉音君は……俺に紗音ちゃんと

だった。

……それは、戦人の耳にだけ届いたもの

「……待ってくれ嘉音君、今あっちで……な

んだか、——銃声みたいなの……」

「え、銃声……ですか？ いえ、僕には聞こ

えませんでしたか……」

嘉音はふいを突かれたような顔で耳をそば
だてる。

しかし、嘉音にはそれを聞くことはできな
かった。

……本当に、銃声なんてあったのか……？

そんな疑念が嘉音の脳裏に浮かぶほど、周
囲は雨音による静かなざわめきに満ちてお
り、遠くの物音など聞こえない……。

だが、微かな残響だけだったが、確かに戦
人はそれを聞いた。

そして、それは、それが聞こえてきた方向
は……。

「……………!!」

——戦人は思わず走り出す。

「ば、戦人様……?!」

嘉音が慌てて引き留めようとするが戦人はそれを意に介さない。

……もしもそれが気のせいだったら、それに勝ることはない。

慌てて駆け込んだのに留弗夫と霧江はぴんぴんしていた、というオチであれば自分が二

人に笑われるだけで済むだろう。

……しかし、もしも……。

もしも、それが気のせいではなかったら……

…?

「ッ、嘉音君も付いてきてくれ！」

戦人は、走る……。

廊下を、走り抜ける……。

今戦人と嘉音が歩いていた場所から留弗夫と霧江が残っている客室まで、走れば本来なら一分足らずで辿り付く。

なのに、それが……、胸に抱く焦燥感と危機感のせいで、こんなにも、遠い……！！

だが、その短くて長い道のりも、その廊下の先の部屋に辿り着けば……！！

……そこに、ちょうど源次も走り込んでくる。

「源次さん、今この辺りから何か聞こえなかったか!?」

「はい、今し方、こちらの部屋の内部より銃声のような音が……」

「！ 親父、霧江さん!! 開けてくれ!!」

「うおおッ!? つと……!!」

源次さんもあの音を聞いていた……!!

「っ、戦人様……!!」

それを確認し、戦人は扉を猛烈な勢いで叩

き始める。

——ドンドンドン……、——ドンドンドン

……。

……だが……反応は、ない……。

「……………くそッ！」

戦人の中の、焦りが……一瞬にして膨れ上がる……。

先程ポケットに突っ込んだばかりの鍵をまさぐり、飛びつくように鍵穴へと押し込む。

……回った。

つまり、施錠されていた。

……しかし。

——ガチャリ、と。

扉は、開かない……………！

金属音と共に、その開閉が、阻まれる…

…！

「ッ……………！！」

戦人の全身が、……凍り付く。

……架かって、いる……。

何が……？ 決まっている……。

「チェーンが、ドアの向こう側の室内に、
架かっているのが見える……！」

チェーンが、なぜこうも……行く手を阻む魔
女の結界のように思えてしまう……！

「おい……、おい、親父、霧江さん……？
部屋の中に居るんだろ……？ ……返事をし
ろよッ!!」

——ガチャリ、——ガチャリ、と。

ああ、朝のいとこ部屋と同じだ……部屋の
外からの侵入を阻み、内部の人間を守る為の

戦人が、ドアの僅かな隙間に向けて声を張
り上げる度に、チェーンの音が虚しく響く。
しかし、二人からの反応はない。いや、そ

れどころか、室内からは人の気配が……生き
た人間の気配すら、感じられない……。廊下
と何ら変わらない雨音とテレビのか細い声が
聞こえてくるだけだった。

「……戦人様、番線カッターを……」

「——いいやそんなものは後だッ!! 嘉音君
も来てくれ、扉をブチ破るッ……!!」

緊急事態であると確信したのでろう、源次
が部屋への突入を阻むチェーンを切断するた
めの工具を取りに行こうとするものの、戦人

の判断は室内から人の気配が感じられなかつ
たことで既に振り切れていた。

一步、二歩。後ろに下がったかと思えば、
……身を翻し、チェーンで侵入を阻んでい
る扉に跳び蹴りを浴びせ掛けるッ……!!

バギヤギヤリツツツ!!! という凄まじい異
音が発生し、戦人は床へと落下する。

高級な木材が用いられた扉にはその跳び蹴
りによつて一瞬で幾条もの傷が刻まれ、間違
いなくその一撃によつてどこかのパーツが破
損したという確信がその場にいる三人には

あった。

しかし、その一撃では、まだチェーンと、

扉の接続を破るには至らない……！

「ちっ、くしょうがアア……！！」

戦人も、ただ一蹴りでチェーンが破壊出来るとは考えていなかったに違いない。だからすぐさま立ち上がり、肩から体当たりを繰り出す……！

それは、魔女の結界を、ニンゲンがその身

体一つで破ろうとする無謀にも似ていた……

…。

「ば、戦人様……！！」

その行動に嘉音が啞然とするものの、すぐに気を取り直し駆け寄ってくる。

源次も身を寄せ、三人は次々に、ドアに向かって体当たりを始める……。

バギヤ、メキヤ、ギヤギツ……。

そんな異音を幾度か発生させ、そして……

…。

「せーの……!!」

……だが。

戦人のその掛け声と共に、三人が一斉に扉へと突っ込んで……。

そこに、いたのは……否、**「ある」**のは……。

「親父！ 霧江さん!! 無事か!？」

「……う、うう、……うおおおおおおあああ
あああッッッ!!」

チェーンが、魔女の鎖が、その基部ごと破壊されて扉が開け放たれる。

ああ、クソがッ……!!

戦人と、源次と、嘉音の三人が、留弗夫と霧江が居る筈の客間に、足を踏み入れる。

平静を失った、一種狂乱とすら言つて良い絶叫が、自らの喉から全力で搾り出されるの

を、戦人はどこか他人事のように感じていた。

……分かっていて、覚悟はしていた、銃声のようなものが聞こえた時点で既に嫌な予感
はあった……!!　なのに、なのに……ああ、
くそくそくそひいいいいッ!!

留弗夫と霧江の姿は、ドアを開け放ち、部屋に立ち入ったすぐそこにあった……。二人とも、横たわっている……。

……ベッドに横たわっているというのであ

れば、それは寝ているのだと勘違いできる……だが、それが、床に横たわっているというのなら、それは、横たわっているのではなく、倒れていると表すべきなのだ……。

……そう、二人は床に倒れ込んでいるのだ……。

血の海の中で、二人ともが驚愕に歪んだ表情を浮かべて、身動きせずに倒れている……。二人ともその胸に真っ赤な血の染みを滲ませ、だというのに痛みにも身を振ることもなく……ああ、それは、それは……。

「ちくしょう……ッ!! 数分なんだぞ……
!?! たった数分離れただけでなんでこんなこ
とになるんだよッ!!??」

部屋を出て、すぐそこで嘉音君と会って、
会話しながら歩いていたら銃声が鳴って、…
…それで急いで戻ってきたら二人ともなん
で、なんで……!!

戦人は、自分のスーツが汚れる事も気にせ
ず、血の海に膝を付いて二人の側に跪く。

けれど、自分達の息子がすぐ側に来たとい
うにも関わらず、二人は一切反応しない。見
開かれた目はもう自らの意志で閉じられるこ
とはないし、半端に空いた口がこれ以上開か
れることもない……。

おそろおそろ首筋に手を伸ばすが、……脈
を測る、という決定的な結果を自ら確定させ
ようとする行為が恐ろしくその手が震える。
だというのに、まだ人肌を残した温かさが、
親の身体であるというにも関わらず、本能的
な不快感を抱かせる……。

「ちくしょう……ッ！　なんで、なんでだよ……ッ！」

二人のすぐ側には……ライフルが落ちている。

……血の匂いの中に、僅かな硝煙の匂いが混じっていることに三人は気付く。

……部屋は、密室だったのだ……。そして、銃声は、複数回聞こえることはなかった……。

……だから、今、この部屋にまだ三人以外の誰かが潜んでいるのでなければ……留弗夫と霧江は、自ら……？

「……」

「……」

源次と嘉音は、留弗夫と霧江に縫り付く戦人に声を掛けることが出来ず、ただ立ち尽くして所在なさに室内を見渡すことしかできない。

「……、つ。源次様、これは……！」

だけだった。

だからこそ嘉音はそれを見つけてしまう。

テーブルの上に、当然のように置かれてい

た、それを……。

……と、そこへドタドタと数人分の足音が
近寄ってくる……。

「さっきの物音は——、ッ………!?」

「……まだ触ってはいかん。そのままにして

おけ」

銃を構えながら部屋に入ってきたのは蔵

「……はい」

臼、楼座、南條だ。

蔵臼の言葉を考えるに、銃声を聞いた、と

源次の言葉に、嘉音はそれをただじつとり

いうよりは戦人達が部屋の扉を蹴破ろうとし

とした……憎悪すら籠もった目で睨み付ける

ていた音を聞きつけてやってきたらしい。

しかし、三人とも室内に倒れ伏す留弗夫、霧江、そしてその傍らに跪く戦人の姿を見て絶句する。

「こ、これは一体……!？」

我に返った南條が急いで二人に駆け寄ってその傷の手当を試みようとするものの、しかし……。

「……心臓を、撃ち抜かれている……。これは……もう……」

……分かつていたのだ。

源次も、嘉音も、そして戦人も……戦人が、その息子が、幾度も必死な声で、まるで祈るように呼びかけたというのに、一切の身じろぎがなかったという時点で、既に……分かつていた……。

「二人は、死んでいる……」

鍵と、チェーンによって二重に施錠された、密室の部屋の中で、その胸に風穴を開けて、息絶えている……。

如何にして二人が殺されたのか……それを知るのは、きっと……その死体の傍らに転がる発砲済の二丁のライフルと……、

「部屋のテーブルに乘せられた洋形封筒」の

差出人だけなのだ……。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

“character.6” が更新されました

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「……戦人様。よろしければ、お飲み物などお持ち致しましょうか」

源次がそう聞いてくるが、とてもそんな気分ではなく戦人は首を横に振って断った。……しかし、数秒後にはそれが自分に気を遣ってくれているが故の言葉だと理解して立ち上がる。

「……ありがとな、源次さん。その気持ちだけいただいておくれ……」

「……いえ、家具の務めですので」

ぐいっと目元の涙を拭い、こちらを見ていた蔵臼、楼座に向き直る。

……今は、泣いている場合ではないのだ。
今は、考える時なのだ……。

「わりいな、蔵臼伯父さん、楼座叔母さん。
……ちよつと泣いて、すつきりした」

「……戦人君は……立ち直りが早いのね」

……戦人は、楼座のその言葉に、どこことなく言語化し難い不快感を覚える……。だが、
敢えて、それを無視する。

「……そうっすね。泣いてりや犯人が見つかる……とはいかねえだろうし」

考えなければならない。
なぜ、留弗夫と霧江が死んでいるのか、それを考えることが大事なのだ……。

「そうだな……戦人君には悪いが、留弗夫と

霧江の死体を発見した際の状況を聞きたい。

……源次、嘉音、お前達も頼む」

「……かしこまりました、何なりとお聞き下

さい」

「……」

仰向けに倒れた留弗夫と霧江の顔に布を掛

けた南條も、二人の死体から……無意識の内

に……離れた場所に集まった五人の元へと近

寄ってくる。

「……では、戦人君。まず、どういう状況

でこうなったのかを聞かせてくれ」

その蔵臼の言葉に、戦人は数秒切り出し方を考えた後に口を開く。

「……異変に気付いたのは、数分前……俺

は、この部屋の外に居た」

「——待って、外？　なんで外に？」

ギロリ、と。

楼座がその言葉尻を聞きつけて戦人に厳しい視線を向ける。

「……事件の、調査をしようとしてたんす

よ」

「……犯人に襲われるかもしれないのに？」

……無論、戦人もそれを聞かれることは分
かりきっていた。

しかし、だからといって、それを口にしな
い、ということはありません。

仮に今は隠せたとしても、もし後からそれ
が発覚した場合、その時点で留弗夫と霧江の
最終目撃者である自分が自動的に犯人として

最も疑わしい人物へと昇格するのは間違いな
い。

だから、今は真つ先にそれを告白し、身の
潔白を主張するしか、ない……。

「……まあ……それは分かってたさ……。…
でも、あんなことをしかした犯人をとつ
捕まえるためには、この部屋で色々考えるだ
けじゃどうしても足りなかった。……それだ
けだぜ」

……それを話しながら、戦人は内心で自嘲する。

なんだ、その言い訳は。

……まるで、稚拙な犯行を咎められた犯人みたいじゃねえか……。

そんなことを考えながら、その言い訳に対する楼座の追求を覚悟する。

「……………そう。ごめんなさい、話の腰を折ってしまつて」

「え……………あ、おう。……………それで……………、俺は部屋の外で嘉音君と会つて……………」

……覚悟、していたのだが。

続けてちようだい？ と促す楼座に、戦人は毒気を抜かれてしまう。

正直な話、その反応は想像していなかった。

……………そもそも、楼座は先程の客間において、ゲストハウスでの六人の殺人を『戦人が犯人ならば実行可能』と言つたのだ。そんな楼座であるからして、今の自分の話を聞いて鬼の首を取つたように追求を繰り返すのかと思つたが……………。

しかし、戦人も、他人から見れば自分が怪しいことは理解している。

自分自身は自分が犯人ではないと確信しているから、自分の容疑を除外することが出来ているものの、そうでなければ、自分も、真っ先に自分を疑っている筈なのだ。

だって、「最初の事件でも、今発生した事件でも、そのどちらでも生存者を最期に目撃しているのが同じ人物なのだから……」

ああ、そんなもの、何をどう考えてもこい

つを真っ先に疑うべきなのだ……！

「——そこで、戦人様が銃声のような物音を聞いた、と仰ってこの部屋の前へ……」

「……はい、おそらく、私も同じ銃声を聞いたのだと思います。この部屋の前で、戦人様と嘉音と合流致しました。そしてノックを繰り返し、幾度か声を掛けたのですが反応がなかったため鍵を解錠……しかし、チェーンが架けられていたため、やむを得ず我々三人でチェーンを破壊、内部へと突入致しました」

「……なるほど、私達が聞いたのはその

チェーンを破壊しようとする物音だった、ということか……。……それで、室内に入った時点で既に留弗夫と霧江さんは倒れた状態だった、という訳かね？」

戦人の言葉を引き継いで部屋への突入までの経緯を語った源次に対し、蔵臼は更に慎重に確認を取る。

「はい、既にお二方は今の状態と同じに見えました」

「源次様と同じです。この部屋に入った時に

は、既に留弗夫様と霧江様は、あの状態だったと思います」

「むう……」

源次と嘉音の話す内容は……チェーンと、施錠。その二つによって、この客室が完全な密室であったということは、留弗夫と霧江の殺害に関して、一つの不可解な謎を提示している。

「……ならば、誰が二人を殺したというのだ……？」

この部屋には、誰にも入れなかったというのに……？

「っ……」

戦人は歯噛みする。

たった数分。

彼がこの客室を離れていた、僅か数分。その数分の間に、彼の両親は死んだ。……いや、殺された。

……自殺、という言葉も、脳裏に浮かん

だ。死体のすぐ脇に落ちていた二人の銃……。発砲してまだ間もないと思われる、硝煙の匂い……。鍵の施錠とチェーンによる完全な、密室……。

これらの要素を考えれば、その言葉が脳裏に浮かぶのも当然のことだ。

寧ろ、それ以外にはこの現状の説明ができないと言って良い。

だが、この場に居る全員が、その可能性を否定する。

何故なら、室内のテーブルに置かれていた洋形封筒に……今し方中身が改められたその封筒の中に収められていた手紙に、こう書かれていたからだ……。

裏に過ぎったのは、黄金の碑文……その内の一節。

中程から始まる、第何の晩に……という一連の部分。

その内の第三の晩が、確かそのような内容ではなかったか……。

我が名を讃えよ。

そう、確か……。

「……第三の晩に、残されし者は誉れ高き我が名を讃えよ」

……これを見て、客室に集まった者達の脳

楼座の、擦れた声で、全員が確信する。

第一の晩は、鍵が選んだ六人を生贄に捧げよというもの。

第二の晩は、寄り添う二人を引き裂けというもの。

そして、第三の晩の内容を暗示させる手紙が、今ここにある……。

それはつまり……。

朝、いとこ部屋で発見された六人の無惨な死体も、今この部屋で見つかった留弗夫と霧江も、碑文の第一と第二の晩に沿って殺され

たものなのだと言えるのではないか……？

自分達は明日の朝までいとこ部屋での事件について考えながらも身を守れば良いと考えていたが、それは早計に過ぎる考えで、この一連の事件は、未だ口火を切ったばかり……

…？

“tips.4” が更新されました。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

そうだ……、碑文に則るのであれば……ま

だ五人も、捧げられるべき生贄が必要なことになる……。

いしてやる……！

そんな怒りが、戦人の中で燃える……。

もう朝から既に八人もの犠牲者が出ているというのに、両手の指の大部分を使い尽くす

——だが。

程の人数が、たった一日で死んでいるというのに、更にこの上五人……！

「ふざけ、やがれ……！」

「……ん？ 待て、何をしている楼座」

とっ捕まえてやる……！

肩を怒りで震わせる戦人を、なんとも言え

必ず真っ先に見つけて、顔面に数発お見舞

ない表情で見ていた蔵臼が突如不審げな声を

あげた。

……その言葉で戦人もようやく楼座が自分の輪から離れていたことに気付く。

「……」

楼座は、今まさにベッドの脇から立ち上がるところだった。

……ベッドの下を覗いていた？ 何故…

…？

だが楼座は蔵臼の疑問の声に応えないまま、部屋の角にあるクローゼット、バスル―

ム、トイレ……とその扉を順に開け放ち、中を確認する。

「……そう、……いえ、そうとしか、考えられない」

ブツブツと、何事かを呟きながら室内を動き回っていた彼女は、戦人達の所へ戻つてくると、こう言った。

「……蔵臼兄さん、南條先生、申し訳ないのだけれど、ちよつとこつちへ来てもらつても

良いかしら」

……親父と霧江さんが死んで、俺への疑いも晴れるかと思いきやこれだぜ……。

戦人は自分への警戒心を隠し切れていない
楼座の態度にささくれ立つものを感じるが、
それを口にすることはなかった。

先程、客間で楼座が自分達三人を疑ったのは、
身も蓋もない話をしてしまうのであれば
次男一家だけが誰も被害者を出していなかったからだ。

だから、娘を失った楼座が戦人と、留弗夫と霧江に疑いを向けたのだ。

だが、今は違う。

留弗夫も霧江も、如何なる方法によつてかは定かならずとも殺害され、次男一家で残るのは戦人のみ。そうなれば最早戦人を疑う理由には存在しない。

ある意味では、留弗夫と霧江は、その死で
以て戦人への嫌疑を晴らすことに貢献したのだ、とも言えるだろう。

……だから、戦人は、油断していた。

親が死んだばかりの身なのだから、これで
楼座叔母さんも自分を疑うことを止めてくれ
るだろう、と。感情にまかせて自分が犯人な
のだ、と断ずることは抑えてくれるだろう、
と。

そう、思っていた。

……なのに。

しら」

「……、何だよ楼座叔母——」

だから、顔に布を被せられた留弗夫と霧江
の死体を眺めていた状態から、楼座に声を掛
けられた方向へと何も考えずに向き直り…

…。

「——今、確認したわ」

「——ごめんなさい戦人君、ちよつといいか

「ベッドの下にも、クローゼットの中にも、
バスルームにもトイレにも……。この部屋に
は、誰も隠れていなかった」

「でもこの部屋は密室だったんでしょう？」

「じゃあどうして留弗夫兄さんと霧江義姉さんは殺されたのかしら？」

「今私には、一つの仮説があるの」

「犯人は中に潜んでいたのよ。そして密室を構築した上で外からそれを破ってもらい、後から来た私達にはさも一緒に入りましたというような顔をして事件の説明をする」

「……戦人君——」

「……あなたを、犯人だと断定するわ……」

……！」

突き付けられた銃口と、その告発に、世界の全てが停止した。

《上層世界第二の晩》

……くっ、くくくっ……！

おやア？ ゲーム盤上はなにやら面倒なことになっているなあ、戦人ア？

当然だよなあああ？？ ニンゲンからしてみれば右代宮戦人こそが一番怪しい立場にいるんだからよおおおッ！！？

【部屋の鍵を持っているのは右代宮戦人】

人】、【最後に生きているのを見たと言言したのも右代宮戦人】、【最初に事件に勘付いたと言言したのも右代宮戦人】、【一番最初に死体を発見しているのも右代宮戦人】……！ お

いおいおいおい、クロも黒、真っ黒じゃねえかよオ！ いまのお前の駒はどんな上手に弁解してもローラー釣り一直線のグレー位置役職持ち白のみてえなもんなんだぜえ、哀れすぎていつそ笑えてくるというものよッ！！ うひゃッ、うひゃーっひゃっひゃっひゃっひゃ、あひっひゃっはっはっ！！

……はあゝっ、ひっ、ひゝっ……。あー、笑った笑った……。

いかんいかん、笑い殺されて死ぬところであつた……。

まあ、ニンゲンの視点であればそなたが
真つ黒なのは確かであるが、それはそれ、こ
れはこれであるぞ。

そもそもそなたは実際に鍵もチェーンも架
かっているのを確認しておるのだからな！

よってここで見当違いの方向を向き始めた
楼座は無視し、一度時間の進行を停止して我
らは我らの戦いへと移ろうぞ！

それでは、これより第二の晩に関する攻防

戦を開始する！

第一の晩と同じく赤字を交えて再度状況説
明を行おうではないか！

【五日午前九時過ぎ、ゲストハウスから蔵
臼、留弗夫、楼座、霧江、戦人、源次、紗
音、南條の八人が本館へと戻ってくると同時
に、紗音は使用人室へと移動】

【同日午前九時四五頃、蔵臼、留弗夫、楼
座は金蔵に合うため本館三階の書斎へと源次
を伴って移動】

……しかし、【蔵臼、留弗夫、楼座、源次

の四名は書齋において金蔵を発見出来なかったッ！」重ねて赤字で宣言しよう！【蔵白、

留弗夫、楼座、源次の四名が書齋に立ち入った際、書齋内に金蔵は存在しない！】

とはいえレシートだのガムテープだのは今回使用されていないためどうにでもなるな。一応妾が魔法で外へと誘った、と主張しておくが今回はこれに関して言及しないものとする。

【書齋より蔵白、留弗夫、楼座の三名は金蔵が所蔵するライフル銃を持ちだしてくる】

同日午前10時5分頃、蔵白、留弗夫、楼座が客間へと帰ってくる。

【源次はこのタイミングで使用人室へと移動、客間に存在するのは蔵白、留弗夫、楼座、霧江、戦人、南條のみ】

同日午前10時半頃、客間内で言い争いが発生。

楼座が戦人、及び留弗夫霧江の次男一家が犯人ならば第一の晩の事件は実行可能なだ

と騒ぎ出し、客間内で留弗夫と楼座が銃を向け合う事態に発展。

その場では収まったものの、同士討ちの危険性があつたため、霧江が次男一家で別室に移動することを提案し、留弗夫戦人共にそれを許諾。

【留弗夫霧江戦人の三人はまず使用人室へと移動し、一階の客室の鍵を手に入れた後にその部屋へと移る】

ではここからが本番であるぞ！

これより第二の晩の事件現場となつた客室について赤を加えて説明していく！

やり取りを分かりやすくするために名称に関して先に述べておくが、

【これより留弗夫霧江戦人が利用した客室を

「次男一家の客室」と呼称する】

【第二の晩を巡る攻防中に妾が「客室」という言葉を用いた場合、それは「次男一家の客室」のことを指すものとする】

【妾からの赤き真実による宣言、及び問題文の中において客室、本館などに関してなんらかの表記ブレがあったとしても、それはそれなたらを騙す意図などはない】

た。

そして、【客室の扉が閉じられ、施錠とチェーンによるロックがされるのを認識している】



さていつものやつも済ませたことだしゆくぞ！

【客室の鍵を解錠できるのは客室の鍵と使用人の持つマスターキー五本のみ】

【客室の鍵は留弗夫から戦人に所持者が移行して以来、ゲーム盤上の時間が停止されるまですと戦人が管理していた】

同日午後一時頃、戦人は客室より外へと出

在しない】
【部屋には窓と扉以外に外と通じる空間は存

客室の構造は画像をあげるのでそれを見よ

【この画像の部屋形状は真実であり、何らかの騙し要素はない】

その後、嘉音と合流。

嘉音と合流後に銃声のような音を遠くに聞いたためすぐさま客室へと引き返し、そこで合流した源次、後ろから付いてきた嘉音と共に扉を蹴破って突入する。

【そして内部で戦人、源次、嘉音が留弗夫、霧江を確認】

留弗夫と霧江には共に胸元を銃で撃ち抜かれたような外傷があり、血の海の中に倒れていた。

【二人の身体は上記の画像の位置にあり、傍らには発砲済の銃が落ちていた】



無論、【客室の扉はチェーンが破壊され内

部に人が突入してくるまで施錠状態を維持し

ていた】。以後、【このチェーンが破壊された

タイミングを客室が解放された瞬間として扱

い、妾が赤字で客室解放時と述べた場合、全

てのこのタイミングを指すものとする】

では続けて客室開放後の盤面について説明

を行う！

嘉音と源次は客室内で洋形封筒を発見、そ

の中には《妾を讃えよ》とのみ書かれた手紙

が入っていた。

直後、蔵臼、楼座、南條が合流。

こちらの三人を暫定的に客間組と呼称。

【客間組は「物音を聞いたので急いでやって

きた」と証言】

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

この客間組の三人と戦人源次嘉音の三人が
合流したタイミングを第二の晩発覚時とす

る。

【第二の晩の犠牲者は留弗夫と霧江】

【二人とも心臓部を撃ち抜かれた状態で発

見】

【南條の検死結果は「恐らく、二人とも即死
でしょう……」というもの】

死体の位置に関しては先程の見取り図に位

置を書き加えた物を貼るのでそれを参照せ
よ。



以後、妾が「客室の扉の施錠」という言葉
を用いた場合、「鍵による施錠」と「架けられ
たチェーン」の「どちらかが維持されていれ
ば施錠状態は維持されている」ものとして扱
う。

そして第一の晩と同じく、「鍵を掛けた」

「洋形封筒を置いた」「扉にチェーンを架けた」という一連の工程を、「第二の晩における現場構築」と呼称！

その上で、第二の晩までの犠牲者つまりは【この段階での死者の中には、**「第二の晩における現場構築」**を実行可能だったニンゲンが存在しない！】

無論、【留弗夫、霧江共にこの時点で肉体的に確かに死亡している！】

以上を以て、魔女幻想定義ッ！！

妾はこの第二の晩における事件を、

「犯行を行ったのは魔女、ベアトリーチェ」

「留弗夫と霧江以外には実行不可能な筈の密室殺人と第一の晩における現場構築を可能としたのは妾の魔法によるものである」

と主張するッ！！

……おやア？ 何を呆けた顔をしていると

いうのか。

そなたが犯人である訳がなからう。そなたは盤上の右代宮戦人の視点より全てを見ているのだぞ。であるにも関わらずその視点を信じてない？ 妾がどんなミスリードを仕込んでいるか分からないから赤くない言葉は何も信用出来ない？

ならば一体何が信じられるというのであるのか！

さあ、第二の晩の開幕であるぞ！ この幻

想、穿ってみるよ右代宮戦人人アアッ!!!

《一九八六年一〇月五日一二…二〇

《死神の鎌》

棲座叔母さんが何を言っているのか分らない。

俺が、……え……？

「……戦人君、あなたを、犯人だと断定するわ……！」

突き付けられた銃口に、世界が停止する。

「は、……え……？」

真っ黒な銃口が俺の目の前に突き出され、

強張った声が鼓膜を刺す。

「どッ、……どうして……!？」

「今私はこの部屋を見回って、この室内には誰も隠れていないことを確信しているわ。…

…そしてあなた達はこの部屋の扉が蹴破られて以降に誰も部屋から出なかったと証言した。それが嘘でないというのなら……、なら答えはこれしかないッ……!」

「そ、そんなのって、……いや、め、滅茶苦

茶だッ!! 何で俺が犯人なんだよ!! 俺に親父と霧江さんを殺害するどんな理由があるってんだ!?! どうして俺が疑われるんだよ!?!」

理路整然と、如何にして俺が怪しい立場なのかを説明する楼座叔母さんに対して、哀れな程狼狽した声を上げる。

……きつと今の俺は、核心を突き付けられて見苦しい言い訳をする犯人の姿そのものだろう。

「どうして? 決まってるわ、あなたにしか、その手紙をそこへ置けない! あなたにしか留弗夫兄さんと霧江義姉さんを殺害できないッ!! そう、これは自作自演ッ!!」

だが、その疑惑を突き付けられ、更にはボルトテージが上がっていく楼座叔母さんの言葉は俺の中の何かの一線を突破しようとしていた。

「あなたがこの室内で留弗夫兄さんと霧江義姉さんを殺害し、たった今突入して発見した

かのように振舞った……。密室の中に魔女が侵入して殺人を行ったという幻想を作り出すためにッ!!」

「……………馬鹿野郎お……………、ま、……………またそういう考えなのかよ……………？　なんで俺がそんなことをしなきゃならないッ！　なんで俺がわざわざ殺人なんかしなきゃならないんだよ、理由がねえじゃねえかッ!!」

そうだ、理由がない。

俺には、親父と霧江さんを殺害する理由がないのだ。

俺はそもそも親父に頼み込まれてつい先日右代宮に籍を戻したような身だ。そんな俺が、何故この親族会議のタイミングで親父と霧江さんを殺さなければならないというのか。

「そうね、理由がない。自分の親を殺せるような人はいない。私も可愛い甥である戦人君がそんな人間だと思いたくない」

「だったら……………!」

……………俺は、まだ信じていなかった。

楼座叔母さんが、本当の本気でそんな言葉のナイフを俺に向けているのだと、俺は信じていなかった。……いや、信じたくなかった。

なのに。

「でもね、いるかもしれない。ううん、言い方が悪いわね。……例えば、『戦人くんにとって、留弗夫兄さんたちが親ではなかったとしたら?』」

「は、……はあッ!」

「確かに、右代宮戦人君にとって留弗夫兄さ

んは父親でしょう。……でも、あなた本当に留弗夫兄さんの息子の戦人君なのう?」

「――」

そ、それは。

「覚えてるかしら? 昨夜私は言ったわよね、『空港で顔を見た時、この子本当に戦人君なの? って思った』って、私言ったわよねえ?」

「楼座、それは、まさか……!」

「私達は六年ぶりにあなたに再会している

わ。あなたが本当に「右代宮戦人」かなんて誰にも証明できないッ！　それができた留弗夫兄さんは殺された！　なら答えはこうなのよ！」

ずい、とこちらに迫る楼座叔母さんの指が、引き金へと掛けられる。

暗い銃口が、少しでも動けば発砲すると言わんばかりに、命を奪う奈落の穴が、俺へと向けられている……！

「あなたは本当の右代宮戦人じゃなくて、留

弗夫兄さんが何らかの陰謀で紛れ込ませた替え玉なのよ！　そして兄さんを裏切り、ベアトリーチェを名乗る人物と共謀して殺害した！　使用人達には金でも掴ませて言いなりにしてるんでしょう!？」

「っ……!」

銃口を突き付けられ、対応を間違えれば撃たれかねないという局面にもかかわらず、銃弾よりも先にその言葉の暴力が俺を滅多打ちにしていた。

優しかった筈の親族にお前が犯人なのだろ

う、と詰め寄られることが一体どれほどの
ショックを人に与えるのか。俺は今、それを
我が身を持って存分に体感していた。

先程のような反論の言葉すら述べることも
できず、ただ喘ぐような息を漏らすことしか
できない。

「いいえ、それともベアトリーチェなんて人
物は居ないのかしら？ あなた自身がそう名
乗り、あたかもこの島に一九人目の人物が存
在するかのような幻影を昨夜から私達に振り
撒いていた、自分はいとこを殺されて怒りに

燃える好青年のフリをしながら隙を見て事件
を続けていく！ ええそうよお父様もう殺
したんでしょう！」

「ろ、楼座さん言い過ぎですぞ……！ まだ
戦人さんが犯人と決まった訳でも金蔵さんが
犠牲になったと確定した訳では……」

「南條先生は黙っていて!! どうなの、戦人
君……いいえ、右代宮戦人ツツ!!」

この流れは良くない結果を招くと感じたの
か、南條先生が俺を庇ってくれたが、楼座叔
母さんはそれを一蹴する。

蔵臼伯父さん、楼座叔母さん……。

「……戦人君。悪いが私も君を庇えんよ。今朝も、今も、そのどちらも君は最初の発見者の一人だ。そしていずれも何らかの工作を行う猶予は十分にあった……。君が本当に何も知らないのだとしても、我々は君を隔離するという選択肢を取らざるを得ない……！」

「蔵臼伯父さん……」

……そして今、蔵臼伯父さんまでもが、……消極的にはあるものの、俺への嫌疑へと賛同の意を示す。

蔵臼伯父さんは、俺にとっては朱志香の父親、という以外にあまり印象のない人だ。大人達ばかりで話しているイメージが強く、六年間の空白を持つ俺にとっては親しみが少ない。……だが、それは必ずしも、疑われてもショックを受けない”という意味ではないのだ。

今朝、俺と親父と霧江さんが会話しているのを見て、気安く話しかけてくれたあの時、俺は六年ぶりにこの伯父のことが好きになれ

るかもしれない、と感じた……。

俺しか考えられない、と。

楼座叔母さんだって、俺にとってはいつ

だって優しくておっとりとした叔母さんだった。

娘の真里亞との関係には彼女なりに悩んで

いることがあったようだが、この親族会議

の二日間で真里亞共々もつと打ち解けられた

ら、と昨夜までは思っていた……。

なのに。

今二人は、俺を責め立てている。

俺が犯人だ、と。

……幾度となく、その言葉の刃を、俺に突き立てる……。

……だから、……俺は……。

「……それじゃあ、さ……言わせてもらうが
よ、二人とも……」

そうして、戦人は……、決して、口にしな

かった考えを、漏らす……。

「親父と霧江さんの犯行まで俺の仕業にして語るってんならよ……俺だって言わせてもらうぜ……。……ああそうさ、なんで俺だけが責められなきゃいけないんだよ……!!」

「俺は我慢してたぜ……？ 俺らの一家だけ誰も死んでいなかったから、俺は受け入れてたさ……！ 俺らだけは言われても仕方ない、疑いを向けられても仕方のねえことだと受け入れてたぜ、ああそうだツ!!」

指を、突き付ける。

銃口を向けられていることも完全に頭から吹き飛んで、激情を叩き付けるだけの機構へと成り下がってゆく。

「その理屈で言えばよお、俺の家族も死んだんだぞ！ 今そこで死んでるのが俺の家族だった……!! ああ、だからもう好き勝手に言っただけなんだよな、くそがツ!!」

倫理観と良心によつてブレーキがかかつて
いた思考が、親族二人から疑いの眼を持つて
見られるという多大なストレスによつてつい
に振り切れて動き始める。

「じゃあ言わせてもらうが、今朝のいとこ部

屋での事件は俺への疑いをそっくりそのまま

あんたら二人に移し替えても良いんだぜ!?

最後に確認したのは俺、最初の発見者は俺、

だから俺が一番怪しいだあ? いいや違

うッ! 「あんたらは俺より後から客間に来

たッ!!」そしてあの段階での六人の生死は

不明ッ! あの密室が構築不可能だったのは
俺も同じ! だったら、あの犯行が可能だつ
た余地はあんたら二人にも同時に存在するん
じゃねえのかよ!!?」

「なッ……!」

突然喚き散らし始めた戦人に気圧されたの
か二人が身じろぎするが、戦人自身ですら自
分が何を言おうとしているのかコントロール
できなくなっていた。

地面をドンドンと踏みつけて声を荒げなが

ら尚叫ぶ。

もう自分自身でも自分が何を主張しているのかすら分らない。

ただ……、それは、今まで彼が突き刺されてきた言葉の刃を、そっくりそのまま投げ返す行為に他ならないのだ……。

「ああくそ、くそくそくそッ!!　そもそも俺たちの中に怪しくないニンゲンなんていねえじゃねえか……!　動機なんて無視しちまえば俺たちの全員が容疑者だ……!!　もう家族が殺されているから、とかそんなことをする

理由が、なんて言い訳は関係ねえ!」

「犠牲者が本人かどうかだって分かるもんかよ!!　替え玉死体を用意して、……ああそうだ南條先生に金でも掴ませればいいッ!　医者さえグルならどうとでもなるだろ!!　鍵だってそうだ、使用人達がグルならこれもどうとでもなる!!　これはあんたが言ったことだろ、楼座叔母さん!!」

「祖父様が居ない?　部屋に居たはずなのに消えている?　馬鹿にしてんのか!!　俺たち

が！ 何時、何処で！！ 祖父様を見たってんだ！？ 見てないぜ、俺は一回も見ていないッ

！！ 六年前から今日の今に至るまで俺は一度も見ていないッ！！ ああそうさ、「ご当主様は研究に没頭されており時間が惜しい」んだろ？ 親族会議を嫌がって何処かに隠れてるなんてのもあり得るよなあ！？ 蔵臼伯父さんはそれにつき合って何処かに祖父様を匿っている！ 昨晚の夕食で祖父様が降りてこないというのも嘘、源次さんが祖父様に報告に行ったというのも嘘、親父達と一緒に部屋に行ったら消えていたというのも全部嘘！！ 最

初から部屋に居ないなら祖父様の消失の謎は全て解決だ！！」

「ふざけやがって、ふざけやがって……！！ ああもつと、幾らでもッ！！ 無理矢理それらしい屁理屈をこじつけてあんたらをクロにしようと思えばできるんだッ！！ なのになんで俺だけが責められるんだよ俺だけが怪しまれなくちやいけねえんだ馬鹿にするのも大概にしろおおおおおッッ！！」

……血を吐くような絶叫。

考えたくない、と思いつながらも、浮かぶことを止められなかった、「その人がそれをするかどうか」ではなく、ただ「それを可能かどうか」、「実現しうるかどうか」で判断した暴論が、止めどなく放たれる。

その剣幕に蔵曰は既に言葉を失い、嘉音、源次、南條の三人もこれまでの戦人の姿からは想像もできない激昂の度合いにただ固唾を呑んでその激情が収まるのを見守るしかなかった。

……ある意味では、その姿は痼癢を起こした金蔵に対するものに似ていたかもしれない。金蔵が怒りを吐き出し尽くし、その激情が鎮まるまで、他の者はただじっと待つ……。この六軒島の主をなだめる方法を、使用人と長年の友人は良く心得ていた。

六年ぶりに戻ってきた孫が、才氣溢れた祖父に良く似た一面を見せた、というのは喜ばしいことなのだろうが……、それを口に出せる者は、居ない……。

「さつきから言わせておけばべらべらと……

!!」

楼座だけがそれに曲がりなりとも反論しようとしたのは、やはり娘を奪った犯人を……目の前の人物がそうであるという確信は、その余りにも真に迫った反論によって揺らぎつつあるが……追及しようという決意、つまりは母の愛によるものだ。

……だが、今の戦人にとって、それすらも容疑の否定には繋がらない……。

「……楼座叔母さんには、もっと直接的に言つてやる……!! あんたは自分が真里亞を殺せないから犯人ではないとでも言いたいみてえだが俺に言わせりやそんなもんじゃ足りねえぜ……! ああそうだ、駄目だ駄目だ、ぜんっぜん駄目だ……!!」

嗜虐的な笑みすら浮かべながら、戦人は遂にそれを口にした。

……それは、真里亞が単独で死んでいたならば、もっと即座に飛び出す可能性のあつ

た仮説だ。

「俺は昨日の薔薇庭園での一件を見てるんだぜ？ ……あんたが犯行を否定する根拠であ

る「自分には真里亞を殺せない」という理屈は、昨日みたいに何かの理由で真里亞がぐずりだし、それに対してあんたがカツとなつてついやり過ぎた、黙らせようとしていたら過失で真里亞を殺しちゃった……！ そう仮定すれば簡単に否定できるよなあ、楼座叔母さん!?!」

「——黙りなさいッ……!! それ以上、そ

の口を開かないで……!!!!」

……確かに、可能性が絶無という訳ではない。

そういった、つい力加減を間違えて過失で殺してしまった、というケースは……、痛ましい話だが、確かに存在する……。ストレスと、日頃の鬱憤の積み重ねが、もう少しだけ、あと少しだけ力を強くしても、という心理を働かせ、……そして、取り返しの付かない悲劇を生む……。

仮に、真里亞だけが絞殺されて死んでいた

のであれば、生存者達はそれを疑い、そして同時に脳内で否定しただろう。

絶対にない、とは言えないかもしれないが……だが、まさかそんなことは……、……と。

そして、それは楼座自身も恐れていたことだった。

彼女にとって一番恐ろしいことは真里亞を失うことでも、真里亞からの愛を失うことでもなく、真里亞を自分自身で害すること。

真里亞の頬を打つ度に、熱く痛む手を押さえながら、どうかこれ以上は……と怯えていた彼女が、本当に恐れていたこと。それを今、彼女が戦人を言葉の刃で傷付けた結果、これまでの行いの結果だとも言うかのように彼女へと返される。

だから、楼座は遂に一線を踏み越えた。

……思えば、この家ではいつもそのような事が繰り返されてきたのかもしれない。誰かから受けた仕打ちしか知らないから、自分も誰かにその仕打ちを繰り返す。

親から子へ、兄や姉から弟と妹へ。

そして今、叔母から甥へ。

誰かに自分が受けた傷を押し付けることでしかその重荷を下ろせない人々が、あの日の自分を再び生み出すという無限の地獄。

そんな黒き魔法の連鎖がどこまでも止まらずに、惨劇を引き起こす……。

ああ、それならば……、この島には、本当に邪悪な魔女が存在していて……、その悪意で以て悲劇を生み出している、としてしまった方が幸せなのではないだろうか……。

けれど、今ここにいるのは魔女ではない。

猜疑と、恐怖と、怒り。

それは魔女や悪魔が好む物ではあるけれど、彼ら以外にもそれを好む者は幾らでも存在する。

そして今やその存在は、……その獲物を、ゆつくりと、次なる獲物に向けて振りかぶり始めているのだ……。

「怪しいから犯人、という論法は通用しねえ!!
俺たち全員が怪しい以上、俺だけに一方

的に詰め寄るような真似は止めてもらおう

か、なあッ!？」

「喋らないでッ!! よくも、よくも私が真里

亜を殺したなんて……ッ!! そんな世迷い言

をおおッ!!!!」

「ま、待ちなさい二人とも……! 銃を下ろ

して……!」

「——ッ! 戦人様……!」

……それこそ、猜疑と、恐怖と、怒りを好

む者、……死神が振りかざす、「不和」とい

う銘の凶器……!!

——バアンッ……!!!——

振り下ろされる死神の鎌……。

その標的は……。

……それは、……鎌。今この部屋で振り

上げられているのは、……大鎌なのだ……。

……。

.....。

.....。

何かが破裂したような、耳をつんざく音……。

「……………が、ッ……………は、……………」

……………え……………？

誰かが力を失い、崩れ落ちるような音……。

何が、……………起きた……………？

そして最後の一つは、バタリという音。
誰かがよろめき、倒れかかってきたような音……。

客室に響いたのは、三つの音。

一つは轟音。

……………それ以外は、全てが、無音……………。

俺も、楼座叔母さんも、先程までの罵り合

いがまるで嘘のように、ぽかんと口を開け

て、何も言えないまま……それを、見ている

……。

「……………う……………ぐ、

……………」

何が、起きたのか。

俺には、最初それが分からなかった。

……………けれど、彼が……、嘉音君が、何

故か、咄嗟に俺と楼座叔母さんの間に割って

入ったのは、分かる……。

……………でも……………、なんで……………？ 嘉音君が、

苦しげな息を漏らしながら、……………俺に倒れか

かってくるのだ……………？

「……………あ、……………あ、あ……………！」

……………ぱくぱく、と。魚のように口を開け閉

めする楼座叔母さんが、正面にいる。

その手にしたライフル銃からは、……たつた今発砲したことを示す硝煙の煙が、棚引いている……。

「……ち、違うわよ……！ 私、私そんなつもり……！ 嘉音君が、割って入ってくるから……!!」

「……楼座、お前……!!」

その楼座叔母さんと蔵白伯父さんの狼狽ぶり、ライフル銃を見て、……俺は、ようやく、理解する……。

「う、……撃ったの、か……!? 楼座叔母さん、あんた……!!」

「撃ってないって言ってるでしょうッ!? 嘉音君が入ってきて、銃を奪おうとしたから一瞬もみ合いになって……！ とにかく私じゃないッ！ 私は撃ってないのよ!!」

「信じられるか……！ 嘉音君が割って入ってこなかったらどさくさに紛れて俺を撃つつもりだったんだろ……!!」

崩れ落ちた嘉音君を抱き留めながら俺は楼座叔母さんを追及する。

そうだ、そうに違いない、それ以外考えられない……！ 俺を殺してしまえば後は全て俺のせいということにしてしまえる……！

嵐がこの島から過ぎ去り、警察がやって来て全てを明らかにするまでは俺のせいというところで生存者達を納得させられる……！

「違うわよッ！！ 私じゃない、私は人殺しなんかじゃ……！！」

楼座叔母さんはその嫌疑を否定しようとするが、……俺の視線と、……そして、真っ赤な液体をぐぼぐぼと胸から滲み出させ、力無く横たわる嘉音君の姿に一步、……後退る。

「……………」

「違うの……、私、私、そんなつもりじゃ……、……………ッ！！」

「!? 待て、楼座!!」

……彼女の中で、どのような葛藤があったのだろう。楼座叔母さんは、突如として、踵

を返して走り去ってゆく。

良心の呵責に耐えられなくなったように、

……或いは、疑惑の目から、逃れるように。

……その視線を、……その怯えたような眼

と、僅かに視線が交差して、……急速に熱が

冷えてゆく。

蔵臼伯父さんが、「南條先生、嘉音を頼み

ます……！」と言い残し、楼座叔母さんを追

い掛けていくのを茫然と眺めながら、俺は、

……嘉音君の腕を、強く握り締めていた。

……今、俺は……、一体何を喚き散らして
いた……？

確かに俺は、もう楼座叔母さんや蔵臼伯父
さんに疑われるのが、耐えられなかった。

……だが、今俺がしていたことは、一体な
んだ？ 自分が疑われるのが耐えられなかつ
たから、逆に自分から疑いをふっかけて……

この客室に不和をもたらしただけなんじゃな
いのか……？

犯人を見つけるだとか、推理するだとか、
そういった探偵ごっこに被れて俺は……。

「嘉音さん、大丈夫ですか、嘉音さん！」

「……嘉音。大丈夫か……」

そんな放心していた俺に南條先生と源次さんが駆け寄ってきて、俺はようやく、腕の中の嘉音君が、胸の中心を撃ち抜かれて重傷を負ったことを思い出す……。

……そうだ、そもそも、その傷は恐らく……。

「ッ！ 嘉音君！ 嘉音君！！ しっかりしろ

……！！ くそっ、なんで俺を庇って……

！！」

止血のため、胸の傷を抑えている嘉音君の手の上から俺も手を重ねて強く押し付けるが……、胸の中央を撃たれているのだ、その程度で出血が止まる訳が無い……！！

見れば、出血性ショックによるものなのか、嘉音君の両手は戦慄くように握ったり閉じたりを繰り返している。何かを握り締めているのか、と思いその内の左手を握り、強く握り締めるがそこには何も握られておらず、

それでもただ弱々しく握ったり開いたりを閉

じているだけだ。……そして、既にその力

も、弱々しいものとなってしまっていた……

…。

「戦人さん、一度手を退かしてください…

…!! 傷口の処置をしなければ……!!」

「お、おうッ!」

南條先生の言葉に我に返り、傷口を押さえ

ていた嘉音君の手ごと、手を浮かす。

「ッ、ぐう……!!」

……と、その瞬間、ぎゅつと強く嘉音君の
両手が握り締められ、——ごぼつ……!! と
いう音がしそうな勢いで血が溢れ出す。

「こ……、これは……」

患部を見た南條先生が顔色を変える。

俺にはその真つ赤な惨状で患部がよく見え
なかったが、南條先生は町医者といえども本
業のお医者様だ。おそらく、出血量だけでそ

れがマズい負傷だと悟ったのだろう。

「……源次さん、控え室から医療道具を、…

…そして、紗音さんを、呼んできてくださ

い」

「……分かりました」

その言葉で、きつと源次さんは現状を察したのだろう。……即座に、走り去ってゆく。

タッタッタッタッタ……という足音が厨房の方へと向かい、消える。

……そして、俺も、悟る……。

医者が、患者を診て……、その親族を連れて来い、というのは、……その発言の意図は、つまり……。

「そんな……嘘だろ……？ 南條先生、嘘だつて言ってくれ……!!」

愕然としながら南條先生に食ってかかるが、南條先生は力無く首を振るだけだ。

「……そんな……」

嘉音君は最早、苦しそうに呻くことすらしていなかった。

意識が朦朧としているのか、首を力無く振り、そして弱々しく唇を開く。

「……あ、……ば、とらさま……」

「嘉音君！　しっかりしろ……！　今紗音ちゃんが来てくれる、それまで気を強く持つんだ……！！」

手を強く握り締める。

既にその手からは力は失われ、……恐らくそんなことはないのだろうが、どこことなく手が冷えてきているような錯覚すら覚えてしまう。

「……しゃ、のん……」

「そうだ、紗音ちゃんだ！　二人は姉弟みたいに育った仲なんだから、顔を見るまで耐えるんだ……！」

紗音ちゃんの名に反応して、僅かに瞳がこ

ちらを向く。

ぱくぱくと、まるで魚のように口を開き、
何事かを呟き始める。

咄嗟に耳を口元に寄せ、何を言いたいのか
を聞き取ろうとするが。

「……………しゃの、ん

から……………おねがい、を……………されましたね…

…」

……………その言葉に、思考はいとも容易く吹き

飛んだ。

「」

……………された。されている……………！ この事件
を解き明かし、真相を暴いて欲しいと、俺は
紗音ちゃんに頼まれている……………！

……………そして、俺は……………先程、嘉音君にも、

……………それを、頼まれている……………。

「ぼくから、も……おねがい、します……」

…この、じけん……はんにん……」

「っ……！ 分かった、分かったから、もう喋らなくて良い……!!」

彼が口を開く度に、どくり、どくり、と南條先生の手の隙間から血が溢れ出していたが……それも、もう、緩やかだ。

……太古、血は命の象徴そのものだったという。

血は命の象徴であり、命は血と共に失われるものだった。

その考え方は、中世以降の医療技術の発展と共に見直され、血それそのものが命であるというのではなく、命を維持するために必要な要素の一つである、という風に見直されたというが、……今の嘉音君の、血が流れ出すと共に弱々しくなっていく嘉音君の言葉を見れば、それはある意味では間違っているのだと確信する。

「おねがいます……真相……朱志香、お嬢

様……、ころした犯人……みつけ、……だして………」

「嘉音、君……」

そして、その命そのものを溢れさせながらも、嘉音君は、俺へと懇願し続ける。

「お願い、します……。……それだけが、僕
の………」

【それだけが、僕の望みです】

……舌がもつれる。思考が白濁する。

今度は、俺の方が何を言えば良いのか分からなくなる。

彼が、何を思つて真相を暴いて欲しいと告げているのか。

その、表情のない、能面のような顔からは、真意が窺い知れない。

……だが。

「……………分かった」

俺は、……頷く。

……。

溢れ出す血の流れは、止まっていた。

未だに人肌の温かさが残る手をそっと手放

すと、……それはぱたり、と落ちる……。

その身体を横たえて、俺は自分の手を強く握り締める。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

“character.7” が更新されました

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

……強く、強く。掌に爪が食い込む程に、

握り締める。

「……すまねえな、嘉音君……」

「……なんだよ……。さっき、紗音ちゃんに、俺が真相を暴くって言ったのによ……。その筈なのに自分がちよつと疑われただけでこのザマだよ……！」

ああそうだ……。俺は先程、使用人室で紗音ちゃんに向けてもう迷わない、と宣言していた筈じゃねえか……！

それが、少しばかり疑われただけでこの有様だ。情けない情けない、ああ俺はいつもそうだ、何か大事な約束があつてもいつも途中で

で忘れちまつて二の次にしてしまう……！

自分が情けない。恥の感情が自分自身を焼いているのが分かる。

……けれど、今は、その情けなさが、少しだけ力をくれる。

自分への怒りが、逆に思考を澄まさせてくれる。現状への恐れではなく、自分自身が成すべきことを考えろと頭の中で声がする。

「戦人さん……」

嘉音君の臉を閉じさせていた南條先生が俺を見る。

「……さつきはすいませんでした。いきなり偽装死体の片棒を担いできれば、なんてこと言ひ出しちまって……」

「いえ……、良いのです。こんな状況です、誰かを疑いたくなるのも、仕方の無いことだ……」

そういつて優しく苦笑する顔は、気難しい

祖父様の友人を長年勤めていられるだけのことはある、と即座に思わせるものだ。

だが、俺は今からその優しさを踏みにじることすらしなくてはならない。

南條先生が最もグレーな立場であることは依然変わらない。

検死が可能な医者である、という圧倒的なアドバンテージ。それが、南條先生の人格の全てを無視して共犯者であるという可能性を内包しているのだ。

だが……、例えば誰を疑ったとしても、そして誰に敵視されようと、嘉音君と紗音ちゃん、そして殺された八人の為にも、俺は犯人を見つけ出してみせる。

そう、約束を、紗音ちゃんとの、……………

…。

……………え……………？

そういうえば、…………その紗音ちゃんは、…………いつになったらこの部屋に来るんだ…………？

そこで、…………ようやく、俺は大事なことを思い出す。

「その紗音ちゃんを呼びに行った源次さんは、何処へ…………行った…………？」

この客室から厨房まではどんなに長く見積もっても五分で行き帰りが可能な筈だ。

特に源次さんなんかは背が高い。一步一步のコンパスが大きいから、手ぶらで走って行って紗音ちゃんを呼んで応急セットを持ち

出してここに帰ってくるまでを考えても五分程度で確実に帰ってこれる筈だ。

……なのに、源次さんが飛び出していつて——今何分が経過した？ ……「分が経った今でも、源次さんが帰ってくる気配が、ない……。

「……おい、……おいおいおい……！ ふざけろってんだ……!!」

「ま、まさか……」

その事実を、俺たちに最悪の想像を抱かせ

る……。

……そもそも、今俺たちは極めて危険な状況にあるのだ。

俺は基本的に一九人目の未知の人物Xは存在しない、という立場だが、仮にこれが未知の人物Xなどではなく一九人目、二〇人目、二一人目、二二人目、……といったような未知のグループXが存在していた場合、今の状況は非常に危うい。

楼座叔母さんの嘉音君への誤射……、故意かどうかは一旦保留し、今は本当に誤射であるとして仮定するが……、それによつて俺たちは散り散りになつてしまつてゐる。

厨房に居る紗音ちゃん、熊沢さん、郷田さん。

駆けだして行つてしまつた楼座叔母さんとそれを負つてゐた蔵臼伯父さん。

この客間に残つてゐた俺、嘉音君、南條先生、源次さん。

しかし、もうこの客間の中には俺と南條先生しか「い」ない。

急を要する事態に、咄嗟に源次さんだけを一人で送り出してしまつた俺たちは、今更のやうにその浅慮さに総毛立つ……。

「こうしちゃいられねえぜ……！ 南條先生一緒に来てくれ！ 厨房で紗音ちゃん達と合流しねえとヤバイ!!」

「わ、わかりました……。源次さん、どうか無事で居てくれえ……!!」

そうして、俺たちは嘉音君をそこに置いたまま部屋の外へと飛び出した。

或いは、書斎から消えた祖父様もこんな状況だったのだろうか。

「……………嘉音君。……必ず、犯人を見つけ
てみせるからな……………！」

確かな施錠で守られた筈の空間からどのようにしてそんな状態に追い込まれたのかは定かではない。しかし、仮にそうだったと仮定すれば、俺たちは完全な密室に何者かが入りした、という最悪の想像からは逃げる事ができる。

横たわったままの嘉音君の身体を一瞥し、俺たちは廊下を走る。

……ああ、くそッ！ だめだだめだぜんっ

……………もしかすると、……………親父達もこうやって、何らかの事情で部屋の鍵を解放せざるを得ない状態に追い込まれたのかもしれない。

ぜんだめだ……………！ そうやって魔女の幻想から逃げられたとしても、今は俺たちがその親父達の立場に回らされている状態なのだ…

…！
そこには何の意味もない……！！

田さん！！
源次さんは無事か？！

「ちつくしよう……！
気をつけてくれ南條先生、曲がり角の先に犯人が待ち伏せてる可能性も……、……ッ！！」

……その扉が、固く閉ざされていたのであれば、俺は慎重にノックをして内部に誰かが息を殺していないか確かめただろう。

だが今、厨房の扉は、「開け放たれてい
る」……！！

曲がり角を警戒しながら足早に進む俺たちだが、厨房の前まで辿り着いた瞬間、息を呑む……。

「——紗音ちゃんッ！！
熊沢の婆ちゃん、郷

閉ざされていたのであれば、源次さんがこの部屋に辿り着く前に襲われたから何も知らない三人がまだ中にいる可能性も、狂暴な襲撃者が狩人のように内で息を潜めている可能

性も考えられた。

……だが、開け放たれている……！！

ああ、そうだ……！ 開け放たれている
というのであれば話は別だ。

開け放たれている、ということとはつまり、
既に事は終わった後なのだ……！

襲撃者がその中に居るにしても、居ないに
しても、そのどちらも扉を開け放ったままで
は行えない。

そして、襲撃者がどちらにしろ、既に何一
つ安全性が担保できない状況である以上、生

存者が中で立てこもっているという可能性も
除外される……！！

だから、俺は、何の武器も持たず、嘉音君
の血に塗れた姿のまま厨房の中へと駆け入っ
た。

……内心、四つの死体が転がっているの
ではないか、という最悪の想像すらしながら…
…。

「……………え……………」

《幕間》厨房》

「熊沢さん、申し訳ないのですがそちらの棚から香辛料の瓶を……そうそうそれです、蓋が緑色のそれです」

「こちらですか？ はい、どうぞ」

「ありがとうございます。食欲増進や胃腸の働きを良くするスパイスです。隠し味に加えるようかと思ひまして」

郷田が熊沢から渡された小瓶を鍋に振り入れながら効能を説明する。

「ほほほ……わざわざ昼食用にスープを作り直すだなんて、聞いた時はなんて面倒な……、と思つてしまいましたよ、ええ」

「はは……。……私は現場を見ておりませんが、大層酷い状態であつたことは聞いております。食欲がないのは当然、けれどだからといってこの郷田、ただただ残される料理を作るつもりはありませんとも」

「ええ……迎えの船が来るのは明日の朝ですものねえ……」

——一九八六年一〇月五日一二三二五。

厨房。

穏やかな——数百メートル以内の場所に、死体が六つも転がっているとは想像できない程に穏やかな空間に、熊沢と郷田の穏やかな声だけが響いている……。

……いや、この時間であれば、既に……留弗夫と霧江の死亡は、南條によって確認されている……。だから、彼らが知らないだけで……この島に存在する死体は八つ……。〃第
二の晩、寄り添う二人を引き裂け〃までが、

既に達成されてしまっている……。

であるにも関わらず、それを知らない熊沢と郷田は次男一家の部屋に直接料理を持っていく算段などを立てており、源次と嘉音の帰りを待っているのだ……。

……だがその会話に平時のような朗らかさはない。……いや、違う。
それを、朗らかな会話をを行うのは、人形のように無言で窓の外を眺め続ける紗音がいるこの空間では、不可能だったというだけの話

……。

特に熊沢などは紗音と讓治の関係についてある程度を把握していたのだから、尚更に紗音に話しかけられない状態が続いている。

ちらり……ちらり……と、会話の最中に

そつと視線を向けても、紗音は窓の外を眺めているだけで何の反応も返さない。

そもそも気付いてすらいらないのか、もしくは全てを把握しているにも関わらず何も見えていない振りをしているのか。……或いは、

人形のような抜け殻となってしまうのか……。

それは誰にも分からない。……いや、もしかすると、紗音にすら理解できていないのかもしれない。

既に、自身に設定された“出目”を失ってしまった彼女の今の立ち振る舞いなど、所詮は人形のそれに過ぎない。今の彼女はニンゲン未満の家具、否、そうですらない模造品。“普段通りの紗音”というペルソナで駆動するだけの、仮面を被った人形。

だからきつと、紗音自身ですらも、今自分が何を考えているのかなど、まるで分かっていないのだ……。

「――」

「……しゃ、紗音さん……」

そんなマネキンと勘違いしそうな程に無言で立ち尽くす紗音に恐る恐る声を掛けたのは郷田だった。

「……………はい？」

……きいいい……と。そんな、油の差されていないペダルが漕がれるような音を、郷田は聞いたような気がした。

……無論、そんな音はしていない。この厨房にそんな異音が鳴るような物品は存在しない。不気味で、響き渡るような、異音。それを発する事ができる物品そのものが存在しないのだ。

ならば、それは何なのか。……決まっている。それは勿論、幻想……、妄想……。

を抱くだろう。それ程に、今の紗音は生気に欠けているのだ……。

あまりにも、……自然に、無造作に……

いつそ機械的とすら言って良い動きで振り向

いた紗音の、その不気味極まりない動作を見

て、郷田が勝手に抱いた、幻想……。

「昼食なのですが、紗音さんもスープとパン

でよろしいですか……？」

「……ありがとうございます、郷田さん。……

…ですが、お気持ちだけで結構です」

けれど、それはきつと、誰が見たとして

——食欲がないので……。

も、皆等しく抱いた幻想に違いない。

今この島で生き残っているニンゲンの内、

……淡々とそう答え、また窓へと向き直る

誰が紗音を視ても、皆郷田と同じような感覚

紗音。

その姿は余人を完全にシャットアウトするもので、哀れな郷田はそれ以上は何も言えずにすごすごと尻尾を巻いて引き下がる。熊沢の元へと歩いて行き、申し訳なさそうな顔で何事かを話す姿を、窓の反射でちらりと把握できた。

……僅かに、良心が痛む。

今だって郷田は完全なる善意でその言葉をかけてくれた筈だ。譲治を失って意気消沈しているであろう自分に碌でもない対応をされるであろうことは分かっている。尚、声をかけてくれたのだ。

それを思うと、紗音の胸は、……微かに痛む。

……だが、その返答ですら、彼女のニンゲンとしての残滓が紡ぎ出した精一杯の取り繕いだった。

……だって、本当なら……紗音は最後に「——もう必要ないので」と答えるつもりだったのだから……。

——人形には、食事など必要ない。
人間であれば当然だ。家具であっても糧は要る。

だが、人形にはそんなものは必要ない。

人が食事を摂るのは生存のためだ。

活動のための栄養を摂取して、明日を生きるため、他の命を糧とする。

家具が食事を摂るのは目的のためだ。

奉仕のための休息として食事を行い、その使命を果たすため他の命を糧とする。

ならば、人形は？

ニンゲンの形をしているだけの模造品は？

当然、必要ない。

使命などもう存在しないのだから、休息も必要ない。

明日を生きる意味などないのだから、糧すら必要ない。

生存に他者の存在を必要としない完全生物とそこに存在するだけの死体。

その両者がそこに在ることで周囲に与える影響が限りなく等価に近いのと同じこと。

紗音も、そして嘉音も。

二人は目的を失った人形、模造品。

ニンゲン未満、家具以下の、出来損ない。

……そして。

——だから、その目に映る景色は、紗音が今見ている景色は、当然のようにかつての、灰色の色彩のそれだった。

映っているのは嵐の空だけ。

渦巻く雲。叩き付ける風雨。

時折、屋敷を囲む森の木々から暴風によつ

てもぎ取られた小枝が飛来し、音を立てる。

魔女の領域と化した島の中で、人形はた

だ、その時を待ち続ける。

その「——コン、コン」という音も、最初

はぶつかってきた小枝の立てた物音だと、熊沢と郷田は思い込もうとした。

だが、再びコン、コンという連続した音が発生し、二人はそれが間違いだと気付く。

ノック音。

……誰かが、扉を叩いていた。

「っ——！！？」

室内の空気が、一瞬で張り詰める……。

先程の留弗夫一家の来訪の際は、廊下に誰かが歩いてきていることが察知できた。

声を潜めた会話、恐る恐る進む足音、そして、扉のこちら側を伺う息遣い……。

そういったものが扉の向こう側に存在するのであれば、それは同じくニンゲンが向こう側に居るのだとも信じられる。

だが、……熊沢と郷田は、そつと顔を見合

わせた。

扉がノックされた、というのに……それらの要素は、何処にも存在しない……。

……いや……そもそも、それらの内一つでも感じ取ることができたならば、二人はそれをただの物音だとは間違えなかっただろう。

けれど、二人はそれを認識しなかった。

誰も、そこには居ない。

ニンゲンの存在を示す物が、扉の向こうから感じ取れない。

だというのに、そこには、
“誰か”が“い
て、ノックをしているのだ……”。

「オ、オホホ……ど、どなたでしょう……
…？」

……二人は、思う……。

……本当に、今扉の前にいる“それ”は、
ニンゲンなのだろうか……？

そして、もし……もしも……。

“それ”がニンゲンではないというのなら
……そこに“いるのは……”。

震えた声で、扉の向こうへと呼びかける熊
沢。だがその声に対して、返ってくる声も、
音も……いや、息遣いすらそこには存在しな
い。

「……………、……………」

ゴクリ、と郷田が息を呑む。

厨房を支配する、じつとりとした沈黙に、

背筋を嫌な汗が伝う……。

「い、郷田さん……」

郷田に熊沢が近寄り、そつと腕に縋り付く。それだけで、郷田は熊沢が自分に何を求めているのかを理解してしまう。

「そ、そんなあ……!? 私に、確認しろと言うんですか熊沢さん……!?」

「わ、私や紗音さんが行くよりはマシですよお……! ほら郷田さん、お願いします……」

…!!

「うぐ、ぐぐぐぐ……」

手にお玉を握り締めたまま、人生の岐路に立たされたかのような唸り声を上げる郷田。それは当然だろう。彼に熊沢が求めていることは裏を返せば、扉の向こう側に存在する謎の存在に最も近づく、という一番危険な役目を強いることでもある。

彼がこの島に就職することを決意した時ですらここまで逡巡したかどうか、という深度で悩み抜いた末に、郷田はその手にお玉を

持ったまま一步を踏み出す。

「ど、……どなた、でしょうか……？」

恐る恐る扉に——先程のノックの後から依然として不気味な静寂を保ち続けているそれに——近づき、そつと声をかける。

……しかし、その郷田の呼びかけに応える声は存在しない。

それどころか、吐息も、気配も、存在感すらそこにはない。

「」

ごくり、と喉を鳴らし、ゆっくりと……

ゆっくりと、扉のノブに手をかける……。

鍵を開けた途端、まるで狼が子ヤギたちだけで留守番をしている家に踏み入るかのよう
に、誰かが押し入ってこないとも限らない。

その大柄な身体で内開きの扉を抑えながら、そつと鍵を……。……なるたけ音がしないように回しているのに、鍵からはカチャリという音が鳴って……。ああ駄目だ駄目だ駄目だ……

…音なんて立てるつもりは無かった、音を立てれば気付かれてしまう、音を立てれば外に居る“それ”がこちらに気付いてしまう……そんな恐怖に支配されても、……でも既に扉は開いてしまつて……。

キイ……、キイイイイ……。

「つ——、……、………?」

扉が開き……、……既に止められないと悟り、覚悟など決められないままに郷田はその

向こうを見る……。何者かが其処にいる、と信じ切つて……。

「……………だ……………、誰も……………居ませんよ……………!」

なのに、……そこには、誰も“い”ない……。厨房の前の廊下には、誰も“い”ないのだ……。

……確かに、ノックはあつた筈だ。だといふのに、そこには、誰の痕跡も、存在しない……。

誰の姿も、ない。

「ええ？ ……ええ……？ それじゃあさつき
きのノックは、……聞き間違い……？ ……
じゃありませんよねえ……？」

ならば、それは熊沢の呟いた通りに聞き間
違いだったのか？

——いや。それも、違う。

熊沢も郷田の「誰も居ない」という報告を
聞いて恐る恐る廊下に出てくる。

そこには、
「それ」がある。

左右をキョロキョロと見回すが、やはりそ
こには誰も居ない。

「……郷田さん、それを……」

誰も、
「い」ない。

きよろきよろと周囲を見渡す熊沢と郷田が
気付かぬ「それ」を、紗音がそつと指し示
す。

「え？ ……ええっ!？」

熊沢が、何の気なしに紗音の指の先を見
る。

……ある。

熊沢も、郷田も、昨晚の騒ぎではそれを見
ることはなかったが、それでも話は聞いてい

た。

真里亞が何者かから手渡されたという、金
蔵が愛用し、そして当主の指輪による封蝋が
押された「洋形封筒」……!

紗音にとっては数時間ぶりに見るそれは、
今度は無造作にその場へ……厨房の扉の前へ
と置かれていた。

「っ!？ これはっ、これが例の……!」

「ど、どうしましょう郷田さん……! 旦那

様方を呼んできた方が……ああつ、開けちゃ

駄目ですよ、紗音さん……！」

「……………」

混乱する郷田と熊沢を余所に、音も無く歩み寄ってきた紗音がすい……とその洋形封筒を拾い上げ、そしてそのまま封を開く。

「……………ベアトリーチェ様からです」

その内容を一瞥し、想像通りだった、と言わんばかりの態度で顔を上げる紗音。

「なんと書かれているんです……!?」

郷田の焦ったような問いかけにも、紗音は能面のような表情を動かさず、その内容を二人に示しながらゆつくりと……、分かりきつたことを語るかのように答えた。

「……………私達を、第四の晩以降の生贄に選ばれるそうです」

曰く、「運命のルーレットはそなたらを選んだ」と。

「な——!？」

「ええっ!？」

どうぞ確認してください、と手紙を差し出す紗音からそれを受け取り、内容に目を通して郷田と熊沢は目に見えて表情を青ざめさせる。

「——ルーレットは、第一の晩の生贄として六人を選び……」

「……第四の晩以降の生贄として、あなた方

を……ひい、ひいひいひいっ……!!」

紗音が語ったその恐ろしい内容を自ら確認した熊沢は絶叫し、郷田はその手紙を放り出して後ずさりする。

二人は第一の晩の犠牲者がどのようにして殺されたのか聞き及んでいる。だが、それは飽くまで聞き及んでいるだけ。実際にその場にいた訳ではなく、そして朝方以降はある種身内のような使用人達で固まっていたことによつて、譲治を殺された紗音と一緒にはいてもそれはどこか現実感を伴っていないかった。

ともすれば、これは一種のお芝居で、六

か」

年前にはミステリ小説好きで知られていた戦人をもてなすためのゲームか何かなのではないか、とさえ熊沢は思っていた。

……なのに、なのに……。

「しや、紗音さん……！　ベアトリーチェ

様が私達を迎えにくる、というのは……」

「……………儀式の生贄とするために、直接

ここに来られるということではないでしょう

「ど、どうしましょう郷田さん……！？　且
那樣方のいる客間に逃げた方が……！！？」

「私に聞かないでください……！　でも一
体どうしたら……」

厨房は二人の恐慌に包まれる

——もしかしたら、二人は信じたくなかつ
たのかもしれない。

つい昨晚まではごく普通に過ごしていて、

言葉すら交わしていた人々が夜が明けたら殺されていて、しかも誰がどうやったのかが分かっていない。

嵐で閉ざされ、逃げ場も無い孤島で今も尚殺人犯が闊歩しているというこの状況を。

夜が更ける頃には殺されたと聞かされていた人々がむつくりと起き上がり、みんな良い芝居っぷりだった、とパーティを囲んで笑い合う。

そんな妄想、幻想に縋り、自身の平静を保ちたかったのかも、しれない。

だが、それは所詮妄想、幻想。
魔女は運命のルーレットが示すままに、既に次なる生贄を選んでいるのだ。

一分、一秒毎に島全体に魔力が満ち、魔女の黒きマスへと染められていくこの六軒島では如何なる施錠であろうとも、如何なる警戒であろうとも、最早意味を為さない。

それは魔女にとってはニンゲンの施錠など靴ヒモの結び目を解くようなものだ、という意味でもあるし、それはニンゲンが如何なる相手ならば警戒を解くか、ということを理解

しているという意味でもある。

魔女とニンゲンの価値観は決定的に異なる物。

ニンゲンにとっての一生など、魔女にとっては瞬きの間に夢見る光景に同じ。

だが、だからといって魔女がニンゲンの思考を理解していない、という訳では断じてない。

魔法の行使にはニンゲンの思考も、精神状態も、その全てが重要なファクターなのだから、それを理解していない魔女などいない。

……人の思考を理解できるからこそ、魔女は魔女としてのカタチを取るのだから。

魔女の、次なる一手。

部屋に閉じこもるニンゲン達を、密室に充滿する反魔法力の毒素を無視して魔法を實現するための一手が、紡がれる。

——コン、コン。

「――！」

「……………」

ノックの音が、再び。

驚愕が、二つ。

沈黙が、一つ。

「ひいつ、ひiiiiiiiiiiiiッ!!?」

――ガタガタッ、ガタンッ。

熊沢が腰を抜かし、椅子を二つ巻き込んで

尻餅をつく。

「だッ、誰だぁッ!」

郷田が普段の丁寧な口調をかなぐり捨てて

ドアの向こうに叫ぶ。

「……………」

紗音が、じっと、扉を見つめる。

……その向こうに、立つ存在を、見据えるように。

三者三様の反応に対して、ドアの嵌め窓の向こうに見える人影が僅かに身じろぎし、――そして。

「――今の物音は熊沢の婆ちゃんか？」

「おいおい、大丈夫か？」

……右代宮戦人そのものの声と、口調で、軽やかに喋り出す。

「……戦人、様……？」

「お、郷田さんもここに居るのか。ちよつと入れてくれ。個人的に調べたいことがあつて色々と聞き回つてんだ」

アリバイとか、何か見てないか、とかさ。磨りガラスの向こうに見える人影はそういつて手を振る。

その動きは確かに右代宮戦人のもので、それを見て郷田と熊沢はほっと胸をなで下ろす。

「……………よ、よかったあ……………ベアトリー
チエ様じゃないんですね……………」

「お、おほほほ……………もう……………驚かせない
で下さいよ戦人さんったら……………」

「いっひっひっひ。分かんねえつすよ？
実は俺が犯人で、のこのこと扉を開けたら実
はナイフとか持ってグッサリ……………なんて事
もあるかもだぜ？」

……………戦人にしては笑えないジョークだっ
た。

特に、今のこの、殺人者が闊歩している状
況では尚更に。

……………本当に、扉の向こうに居るのは右代宮
戦人なのだろうか？

郷田と熊沢の脳内にそんな当然の疑問が浮
かぶ。

しかし今、二人が会話している相手は右代
宮戦人の声で喋っているし、ガラスの向こう
側の動きも右代宮戦人そのものだ。

ならば、……それは右代宮戦人以外の誰だ
というのか。

……二人には、選択肢がなかった。

お互いが扉の向こうの“それ”が本当に右
代宮戦人であるのか、という疑念を持ってい
たにも関わらず、それをお互いには口に出来
ないでいる。

自分の感覚が隣のニンゲンに否定されてし
まえば、今自分が抱いている疑念は否定しな
くてはなくなる。

ならば、それは口にしない方がマシなの
だ。『部屋の中に閉じこもった生存者』という
自らの在り方を念頭に置くのであれば、不和
など招かないことが何よりの延命策なのだか
ら。

……だから、二人はそれを選択してしま
う。

「……………分かりました。開けますよ戦人
様」

——カチャリ。

郷田が、本当に開けてもいいのだろうかと
疑念を抱いてはいながらも鍵を開ける。不気
味な状況に自分達が置かれていることは理解
しているし、扉の向こうに居る戦人が本物な
のか、そして本物だとしても信用してもいい
のか、それを判断できないままに厨房という
密室の封印を解放してしまう。

……広く知られた言説だ。

魔なる者を、招いてはならない。

如何なる声で、姿で、その扉を開くように

訴えても、それに応えてはならない。

彼らは、招かれなければ反魔法力満ちる領
域には立ち入れない。

だから、決して、内へと招いてはならな
い。

……童話において、母親が不在の状況で、
「母親を名乗る何者か」を家へと招き入れて
しまった子ヤギたちの末路がそうであるよう
に。

……伝説において、魔なる声で魅了された

乙女が、血を啜る不死者達の王によつて拐かされてしまうように。

例え、それが……。

自分達がよく知る、人情に厚く誰かの痛みを理解できる青年の声と貌に、よく似ていても。

「へ、え……………」

……郷田は、呆けたような声で、ドアを開いたままの体勢で硬直する。

扉の向こうで、分かりきっていた答え合わせを今か今かと待ちわびたと言わんばかりに立つのは、ドレスの貴婦人。

「———出迎えご苦労。その働きに

免じ、妾と直に対面することを許す」

金の髪、豪華なドレス。

その姿は、右代宮家に出入りする者ならば誰もが知っていた。

しかし間違いなく、断じて右代宮戦人ではない。

いや、そもそも見間違う要素すら在りはない。

容姿も性別も、その身に纏う気配すらも異なっている。

だというのに、何故自分達はこの人物を、今の今まで右代宮戦人であると認識していたのか……？

この、黄金の魔女ベアトリーチェを……！

「う、うわああああああツツ!!?」

「ひつ、ひiiiiiiiiツツ!!?」

郷田と熊沢が悲鳴をあげながら後退る。

「……………ベアトリーチェ様」

紗音は、ただ静かに呟く。

「運命のルーレットはそなたらを選んだ…

…！ さあ家具共よ、解放の日に感謝するが
良いッ……！！」

《一九八六年一〇月五日一二・五〇

《絶対の約束》

俺は、何の武器も持たず、嘉音君の血に塗

れた姿のまま厨房の中へと駆け入った。

……内心、四つの死体が転がっているの

はないか、という最悪の想像すらしながら…

…。

「……………え……………」

……だというのに。

扉だけが乱暴に開放たれて、室内には鮮
血が散っているのではないかと思わせる状
況で、……けれど厨房の中はとても穏やかだ
つた。

精々椅子が二つ倒れている程度で、荒らさ
れている様子もなければ争った形跡もない。

隅の方には灯油のポリタンクが幾つかポン
プが刺さったまま置かれていて、火力は弱い
ながらもストーブによって雨風に負けない程
良い温かさが保たれていた。

……勿論、血痕なども存在しない。

何も、異常は存在しない。

……その光景を見て、俺はガキの頃に聞いた怪談を思い出す。

名前は忘れたが……確か1872年に、ポルトガル沖で無人のまま漂流していた帆船が発見された、という有名な事件のことだ。

その船は漂流中の所を発見され、発見した船の乗組員によって内部の調査が行われたものの、乗員は0。

いや、それだけならば嵐などで沈みそうになつて救命ボートに乗り移つたが、帆船は予

想に反して持ちこたえて漂流していた、という可能性もなくはない。

問題なのは、その中の様子だ。

中には十分な食料と水が残されており、直前まで人が存在していたかのような痕跡だけが残っていた、という。

温かいままの朝食が手を付けた途中の状態で放置されていた、という話もあった筈だ。

結局、その事件はそれから百年が経過した今でも解決されていない。

……真里亞にでも聞かせてやったら、それは魔女の仕業だ、とでも言い出すのだろうか……。

しかし、今のこの厨房の静けさは俺にその怪談を思い起こさせるに足るものだった。

コンロには火こそ入っていないものの、郷田さんが作ってくれたのだろうスープがまだ鍋の状態で温かいまま入っているし、ストーブに至ってはまだ付いたまま。

紗音ちゃんと熊沢さん、郷田さんが三人で

楽しげにまかないの昼食を作っている光景が脳裏に浮かぶ……。

「こ、これは一体……!？」

南條先生も厨房のこの空虚な不気味さにたたらを踏んだのかぎり、と後退る。

ああ分かるぜ……。俺も本当なら今すぐ回れ右して何処か安全な部屋に籠りてえよ……。

だが、それは無理な相談だ。今は、紗音

ちゃん、熊沢さん、郷田さんの三人と源次さんが何処へ消えたのかを探さなければ……。

「くそっ……なんでこんな綺麗に……」

室内をぐるりと見回しながら何らかの痕跡が残っていないものか、と探してみるが何も見つからない。

何かを引き摺った痕や、血痕など、何も見つけられない。

……ここに居た紗音ちゃん、熊沢さん、郷

田さんが襲撃された、という証拠が、……存在しない。

襲撃され、何処かへ連れ去られた、という痕跡が何処にもないのだ。

だとすれば、その三人に加えて源次さんがこの部屋に居ないのは、まるで……。

「……まさか、自分で部屋から出たとしても……？」

「んな馬鹿な……。いや、でも銃声を聞きつけて一斉に固まって厨房から出た可能性は確

かにある、か……………」

南條先生の言葉に対してそんな馬鹿な、とは返しながらも、俺の頭にもその可能性は浮かんできていた。

恐らく、一番この状況を単純に説明できるのはそれだ。

『三人、そして源次さんは、自発的にこの部屋を出た。だから襲撃などされていないし、また同様に何かが発生したような痕跡も存在しない』……………といった風に考えることもでき

る。

……しかし、この安易にして単純明快、かつ強力な推理を否定する問題が一つある。

仮に、三人と源次さんが自発的にこの部屋から出て行ったのだとしよう。

……なら、その四人は一体、何処へ向かったというのか……………？

「一体、四人は何処へ……………」

そんなことをぼやきながら何の気なしに
テーブルに手を付いた瞬間——カサリ、と。
そんな音がした。

どうやら紙か何かの上に手を付いたらし

い。

何の気なしに手を持ち上げて、……俺は眼
を見開く。

「——ッ!!??」

「……どうなされましたかな、戦人さ、……」

!」

瞬時に持ち上げられた俺の手にある物を視
て、南條先生もすぐに俺と同じ顔になる。

ああ、それは当然だ。だって……。

「洋形封筒……!!」

俺が偶然見つけたそれは、……昨晚からこ
の島に魔女の影がチラつく度に、幾度となく
姿を顕わしていたものと同じ……片翼の鷲の
封蝋が押された、洋形封筒……!!

しかも、……ああちくしょう！
封蝋が破

られている……!!

既に、開封済だ……!!

「四通目の、魔女からの手紙……!! 戦人さ

ん、この手紙にはなんと……?」

そして、これが存在するということは、やはり三人は……。

「……ああ、読むぜ……。」「……右代官家使用人、紗音様、嘉音様。並びに他の使用人の皆様。この手紙をあなた方が読んでいる、と

いうことは――」



「右代官家使用人、紗音様、嘉音様。並びに他の使用人の皆様。

この手紙をあなた方が読んでいる、ということは、既に私が復活を遂げるための儀式が実行され、そしてその儀式のために捧げられた六人の犠牲の中に紗音様と嘉音様の想い人が含まれていた、ということでしょう。

此度のゲームにおいて、ルーレットの出自

はあなた方の想い人を選び、そして、第四の晩以降の生贄として、あなた方四人を選びました。

想い人を失い、既に稼働する意味すら失った家具であるあなた方に、せめてもの慈悲としてこの手紙を送ります。

……くつくくくく……。……くくくツ、
くっひっひっひっ、あーひゃっはっはっ

はツツ!!

おいおいおいおい、しゃあのおおん、かあのおおん?? そんな能面みたいな顔をしてどうしたあ?

家具であつたそなたらが、譲治と朱志香の死によつて解放された訳だぜえ?

良いじゃねえかよ、内心お前達だつて譲治と朱志香に不満があつたんじゃねえのかああ??

譲治は誰にでも優しい好青年、といえば聞こえは良いがその実、意志薄弱な金持ちのボンボン!

朱志香は活発で活動的、といえば聞こえが良いがその実、がさつで礼儀すら碌に知らぬドラ娘!!

そなたらは遂にお守りから解放された、と

いう訳だ！　コングラッチュレーショオオ

ンツ！　拍手すら送ってやろう、家具共ツ！

……ああ、いや、違うな。

うむ、少し違う。今のそなたらは、家具ではないのであったな。

ああそうさ、役目を果たす為に生み出されるのが家具、それが恋を实らせてこそ、そなたら家具はニンゲンへと昇華する。

だが譲治と朱志香を失い、その設計目的すら果たせなくなった以上もはやそなたらは家具ではないッ！

既にそなたらは人形、模造物！　家具未満

の、ニンゲンの模倣品ツツ！！

家具ならばゲーム盤の上をかき乱し妾の手駒を迎え撃つことも出来よう、妾の家具に刃向かい一矢報いる事も可能であろう、しかしそなたらには既にその自由すら存在しない！！今のそなたらは妾に糸で操られる傀儡に過ぎぬ！　そなたらなど最早意志の無い駒よ！

……おいおいおいどうしたよお？　良いんだぜえ???　今すぐこの手紙を破り捨てても良いんだぜえええええええ???　むかつくだろお？　腹が立つよなアア??　大事な譲治様と朱志香様を殺されてご立腹なんだろう、人形

がよおおおッ!?!?!

……………くつくつくつく。

さて、人形共。そして使用人共。

第四の晩以降に捧げられる生贄はそなたらで既に決まっている。

無論、妾はそなたらが抵抗しようとも構わぬ。無為な足掻きを眺めることは至上のハシシにすら勝る快樂よ！ 既に魔法すら使えぬ模造品と、魔法の一片すら知らぬ凡夫共が如何にして妾に刃向かって魅せるか、それには純然たる興味すら抱こうというもの！

妾はこれより其方らを迎えに行き、ボー

ラー室において儀式を執り行う。

挑むも逃げるもそなたらの自由だが、そのいずれも結末は変わらぬと心得るが良い。

—— 黄金のベアトリーチェ ——

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「く、そがああああッ!!」

「戦人さん、抑えて……!!」

末尾の署名を読み上げ、その手紙の送り主が誰なのか確定した段階で俺はそれを完全

に破り捨てて踵を返していた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

“tips.5”が更新されました

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「離せ南條先生……！ 今すぐこのクソアマ
をぶっ殺してやらあ……!!!」

単純に言ってしまうえば俺は本気でキレて
いた。

譲治の兄貴、朱志香、真里亜、そして親父

と霧江さんを無惨にブチ殺したただじゃ飽き
足らず今度は紗音ちゃんと嘉音君にまで唾を
吐きかけているのだこいつは。

ああ良いぜお前がボイラー室で待ってるっ
てんなら今すぐ俺もそこに行つてぶん殴つて
やる……!!

「駄目です戦人さん、丸腰のままで行つても
殺されるだけだ……！ 相手は魔女を名乗る
人物だ、危険な武器か何かを持っているに違
いない！」

「じゃあ南條先生は紗音ちゃんがむざむざ殺

されるのをここで指を加えて待つてろつての
かよ!! 紗音ちゃんはきつと譲治の兄貴の仇
討ちに行ったんだ、源次さん達もきつと一緒
にそこに行った!! 皆が客室に來なかつたの
はそつちに向かつたからに決まつてる、今す
ぐ行かないと四人とも犯人に殺されちまう……
!!!」

喚き散らしながら必死に南條先生の制止か
ら逃れようと藻掻く。

……だというのに、その腕を振りほどけな
い……! 医者つてのは体力仕事だつて聞く

が、老境も良いところな南條先生までその実
踐者だとは想像もしていなかつた。

まるで人の生き死にが関わっているかのよ
うな……、……俺を引き留めなければ誰かが
死ぬとも言わんばかりの氣迫で俺を足止め
する。

「――落ち着きなさい……!」

「ッ……!」

そしてついに……腰に必死に抱き付いて止
めようとしていた南條先生を振り解き、走り

出そうとした所で、その一喝が俺を縫い止めた。

「いいですか戦人さん……既に八人も被害者が出ているのです。嘉音さんも含めれば九人ですぞ！ 源次さん達が既に犠牲になっているのなら十三人だ……!! あんたは十四人目の犠牲者になりに行くつもりですか!!」

……俺にそう叱責する南條先生の言葉は、確かに俺を一瞬振り返らせるだけの力があつた。

医者として今日一日の死者を全て見て来た南條先生の言葉だ。

親父と霧江さん以外の死亡確認も碌にしていないような俺とは違う、何かが込められている。

……何処かで聞いた事がある。医者は、いや医師を志す者は皆、医学部の卒業の際に、とある誓いを宣誓させられるという。

それは金銭的報酬だけを目的に医療行為を施すことの否定であつたり、患者のための医療を施すこと、患者の秘密を守る義務などに

関する宣誓だというが、最も重きを向けられるのは人命を尊重することに違いない。

きっと、南條先生は、その観点から、……既に死んでいるかもしれない四人よりも、これから命を落とすかもしれない俺を守る為にこれだけ強い言葉で俺を引き留めているに違いないのだ……。

……だが……。

「……駄目だぜ、南條先生……」

「戦人さん……!」

駄目だ。……ああ、全然駄目だ……。

やはり今の俺は冷静さとはかけ離れた状態にある。

何せ、今の俺は約束してしまっている。

嘉音君とも、紗音ちゃんとも、だ。

譲治の兄貴と朱志香を殺した犯人を見つけるって言っちゃってる。

その約束を違える訳にはいかない。

だから、俺は向こう見ずな怒りでボイラー室に向かうのではないのだ。

「俺は、殺されに行くんじゃない……俺は、

紗音ちゃん達を助けに、そして犯人をとつちめるために行くんだ！ この手で、一発ぶん殴って警察に突き出してやるために！ だから邪魔すんじゃない……！」

「戦人さん……あんたは……」

俺の言葉は、俺を制止しようとしていた南條先生にそれを思い留まらせるだけの効力を

発揮したらしい。

それを見た俺もすぐに飛び出すことはせず、何か護身のための武器を探して部屋の中をぐると見渡す。

「……止めるなよ南條先生」

……これだ。

パスタか何かを打つのに使うのだろう、厨房の棚から大振りの麵棒を発見する。それをパシリ、パシリ、と掌に叩き付けて質感を確かめる。

長さは1m弱ほど。麵棒としてイメージするものとしてはかなり大振りだが、棍棒としてはこれくらいの重さと長さがありがたい。

いとこ部屋での死体を見る限り、恐らく犯人は銃火器……ショットガンのような破壊力の高い武器を持っている可能性が高い。これでショットガンと太刀打ちする勇気は流石に無いが、隙を見つけて後ろから思いつきぶん殴れば怯ませるか、もしくは昏倒させられるくらいの威力はある筈だ。

そんな自分の隣に南條先生が歩み寄り、俺

と同じく武器になりそうなものを漁り始める。

「……いえ、止めるのは辞めます。私も一緒に行きましょう」

「……良いのか？」

「……どのみち、戦人さんと一緒に動く以外の選択肢は存在しないのです。この状況下で一人だけでここに残るのも危険だ。……ならば、少しでもお互いの身の危険を減らす方向で動くべきでしょう……」

「……へっ。頼もしいぜ……!」

俺と同じく麵棒を手にとった南條先生だ

が、自分の身のこなしのことを考えたのかそれを手放し、部屋の隅に置いてあったモップを手取る。

……獲物の長さ、すなわちリーチ。それはそのままイコール強さとなる。

戦国武将、織田信長が火縄銃を大量に仕入れて武田軍の騎馬隊を打ち破った長篠の合戦は有名だが、織田信長はそれだけではなく他家で採用されているよりも長い槍を採用し、合戦での足軽同士のぶつかり合いを制したという。

相手よりも長い武器はそれ自体が戦闘でのアドバンテージになるのだ。

……秀吉伯父さんなら、きっとここから相手よりも長い武器、という部分に引っかけた何か商売のコツなどをさぞ自慢げに話すのだろうが……その秀吉伯父さんは……今朝、殺されてしまっている。

もう、秀吉伯父さんの戦国武将にまつわるうんちくを聞く事が……できないのか……。そう考えると、無性に悲しくなってくる。

……いや、もう、絵羽伯母さんからのからかいも、夏妃伯母さんの神経質そうな表情も、蔵臼伯父さんの鼻につく言葉も……

親父も、霧江さんも、譲治の兄貴も、朱志香も、真里亞も、みんなみんな、もういないのだ……。

「……………行こう、南條先生」

俺達はそれぞれの獲物を手に……南條先生は厨房に置いてあった往診鞆も掴み取り、厨房を後にする。

床には俺がバラバラにした手紙の残骸が散っていたが、それを省みることはしなかった。

明日、警察がこの島に来たとき、俺はきっとものすごく怒られるだろう。重要な証拠品に指紋もクソも無く触った挙げ句、それを木っ端微塵にしたのだから、何の申し開きもできない筈だ。

……だが、そんなことはどうでも良かった。

どんな奴が犯人なのか、そいつがどんな顔をして皆を殺したのか。

そして、*“何を思つて”* あの手紙で譲治の

兄貴、朱志香、紗音ちゃん、嘉音君を愚弄したのか。

それをこの目で確かめて、ぶん殴つてやれたのなら。

こいつが犯人だ、と誰が見ても分かるようなマーキングを付けてやれたのなら、このすぐ後に死んでも構わないとさえ思えた。

「……………」

……ああ、それと……。

せめてもう一つ、——紗音ちゃんと、
嘉音君との約束を果たせるなら、俺は………
…。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

——コツ、コツ……。

——コツ、コツ……。

俺と南條先生は、息を潜めながら、ボー

ラー室への階段を降りてゆく。

かたや麵棒、かたやモップを携えた滑稽な
二人組。

まるでスポットライトで照らされたコント
の一場面のようだ。

これから抜き足差し足忍び足で、二人で口
に「しーっ……」などというジェスチャーを

しながら進んでいくのだ。

舞台上のセットで遮られた向こう側には、

そんな俺達を待ち受けてほくそ笑む犯人役が

……。

……はん、馬鹿馬鹿しい……。

自分の想像した風景でありながらも失笑が
漏れた。

けれど、それも仕方ないだろう。これから
殺人鬼が潜んでるかもしれない部屋にたつた
二人で突っ込んで、その不意を突こうという
のだ。

それが出来の悪いコント以外のなんだというのか。

……だが、先に進まなければこの状況は打開できない。

あの部屋に踏み入らなければ、連れ去られたと思しき紗音ちゃん達がまだ生存しているのかすら分らないのだ。

俺は息を潜めながらそっとボイラー室への最後の一段を踏み降ろす。

ボイラー室は、この屋敷の構造上では地下一階に位置する……ということになる。階段もそこまで段数は多くない。だがそれなのに、たったその二十数段の階段を降りきるのに、俺達は一切どれだけの精神力を消費したのだろうか……。

「はあ……、はあ……」

背後に南條先生の浅い呼吸を感じながら、俺はそっとボイラー室のドアノブを握る。

「……0、で一氣に行こう。……相手は銃を持ってるかもしれない、入ったらすぐさま両脇に散開だ。……良いか、南條先生……？」

「……っ、はい……！」

ゴクリ、という唾を飲み込む音。そして首を振る気配。

それを受け、俺は声ではなく、指を三本立てる。

3……。

そして薬指をそっと折り、残りカウントは

2。

……俺がわざわざこんなキザな方法を選んだのにはもちろん訳がある。

もしも扉の向こうに何者かが潜んでいて、そいつが俺達の会話を盗み聞きしていると仮定した場合……、俺がここでわざわざ突入のタイミングを口に出して南條先生と意思疎通を図るのは愚策に過ぎる。

室内に飛び込んだらすぐに散開しよう、とは口で言うのは簡単だ。だがそんなもの、銃口を向けて引き金を引く方がよっぽど早い。

それならせめてどのタイミングで俺達が突入するのかを図らせないようにしなくてはならない。

この状況で俺達が犯人に射殺され、ミイラ取りがミイラになることだけは何としても避けるべきだった。

2……。

中指をそつと折り、残りカウントは1。

……だが、俺は今から犯人と直接対面しようとしているにも関わらず……。

少しだけ、……ほんの少しだけ、疑っていることがあった。

……気配が、無い。

誰かが潜んでいるような、息を潜めて伺うような、……そんな雰囲気……このボイラー室には、存在しない……。

……本当に、犯人はこの向こうに“い”るのか……？

1……。

——バタンツツツ!!

心臓が、バクバクと、早鐘を打つ……。

その疑問の答えは、鉛玉という形で俺へと

浴びせ掛けられるかもしれない……。

だが、全ては覚悟の上だぜ……!!

僅かに震える人差し指を……、……折りた

たみ……。

「……っ!!」

扉を蹴り破らんばかりの勢いでボイラー室
へ突入する……!!

どこだッ……!!? 犯人は……!!?

ボイラー室は薄暗く、埃っぽい部屋だっ
た。

僅かな豆電球の灯りだけが天井からぶら下
がり、薄ぼんやりとした光源によって室内の

全てがぼやけて見える。

俺と南條先生は即座にドアの両脇に散開し、互いの獲物を構えながら部屋の中を見渡そうと必死になる。

……だが。

「……………」

……銃弾が……飛んでこない……？

俺はてっきり、ドアを開けた瞬間に銃弾を

浴びせ掛けられて、それが当るか外れるかの博打を制してからが大立ち回りの本番だと思っていた。

だが、ボイラー室の中に在るのは沈黙だけ。

室内の何処かに隠れて俺達の間を窺っている……？

……いや、違う、それもおかしい。

ボイラー室、とはいうものの、所詮は目で見渡せるような空間でしかない。

ゴミなんかを燃やす焼却炉や、電力供給を行う配電盤、屋敷中の洗濯物を洗うデカイ洗

濯機……後は使用人用の風呂もここにあるのだったか。

だが、それを加味しても隠れる場所など何処にもない。

唯一隠れるスペースに成り得る使用人用の浴室だって、厳密にはこのボイラー室とは別の部屋にある。

手紙で俺達をボイラー室へと誘い出し、自分はそのちに潜んだ上で壁越しに狙う……そんな思考も過ぎつつが、その思考はすぐさま放り捨てられることになる。

「つ………！ 戦人さん、ご覧なさい………！」
「ッ!!」

南條先生の声に視線を奥に向けると、……悪天候のせいで気付かなかったが、外からの光が入ってきている事によく目が留まる。

ドアだ………！ ボイラー室の奥に、ドアが有る………！

思考のギアが急上昇する。ああそうだ、それならば筋は通る。ドアは僅かに開いている、犯人がこの部屋に隠れていないなら逃げ

道はあそこしかない！

状況は明白だ、犯人はあそこから逃げたの

だ……！！

……あの先は何だったか……。六年前より

昔、俺は来ていたことがあったような……。

……待て。

今、俺は……配電盤の暗がり、何を……

「つくしょう……！ あそこから逃げやがったのか……！！」 行くな南條先生、きつとあそ

見た……？

こから逃げ、て……」

ぎぎ、ぎ……と。そんな音が、しそうな動

朧気な記憶を振り返りながら先へ進もうと

きで、俺は、”それ”を、……見やる……。

した俺の視界。

視界の隅に先程から映っていた、暗がりの

影に沈んでいた、
“胸から血を流しながら倒れている人影”
に今更のように気が付く……

!!

「——おい、なんだよそれ……」

駄目だ。気付いてしまったからには、もう駄目だ。

その人影が誰なのか、俺は理解してしまっ
た……!

「紗音ちゃん……!?!? おいつ、しつかりしろ

紗音ちゃん……!!!!」

ようやく馴染んできたのだ。

六年ぶりに再会して、昔とは雰囲気が変わったな、とは思っていたが、砂浜で皆と話している姿を見て「なんだ、あの頃のままだじゃないか」と感じ取れた。

昔よりも女性らしくなって、そんな彼女を相手にかつてのようなキザな台詞を吐くには気恥ずかしくなってしまうて、結局何も話せないまま今朝になったら譲治の兄貴が殺され

て……。

「紗音ちゃん……!!」

挙げ句の果てにはこれか。

俺は、また何の約束も果たせないで……!!

「……あ、……戦人、さん……?」

「喋るな……!! 南條先生、手当を……!!」

犯人の逃亡先などどうでも良かった。麵棒

も放り捨てて紗音ちゃんへと駆け寄る。

背中の手を回し、その上体を抱き上げたこと
とでようやく何故紗音ちゃんが倒れていたの
かを理解する。

「クソッ……!! 血が……!!」

……杭だ。紗音ちゃんの胸に、悪魔的な装
飾の施された……アイスピックのような杭が
突き刺さっているのだ……。

その下からは血がごぼり、ごぼり、と沸き
上がり、……胸元と俺の手、服を真っ赤に汚
していく。

……どこか、冷たい血だった。

まるで、体温の殆どが溢れ出してしまう程に時間が経っていて、……俺達は彼女を発見するのが遅過ぎた、全ては手遅れだ、……とでも言うかのように……。

「……これは……」

「南條先生、早く！ 止血を……！」

だというのに、南條先生はそれを見て手を止めてしまう。

今も尚血を溢れさせているというのに、何

らかの処置をしようとしてくれない。

……それは、まさか……。

「……手は、尽くしてみましよう。輸血も、今日に限っては持ち合わせがあります。……ですが、この出血量では……、……いえ、止しましょう。今は止血を試みる以外にない……！」

南條先生は腕まくりを行い、往診鞆からタオル、ゴム手袋、注射器などを取り出す。

それは南條先生なりの覚悟の現われなのだろうが……刻一刻と拡がって行く血の染みと、そのどこか鉄臭いような臭いの前では非常に心細い医療用具に過ぎなかった。

「杭は……この設備では抜くわけにはいきませんな……だが……非常時用の強心剤でどうか……」

鞆の中からアンプルを取りだし、その中身の液体を注射器に吸わせる南條先生。

俺は医療に関しては門外漢だ。だが、先程

の嘉音君の負傷と同じくらの出血がある以上、紗音ちゃんの容態に関しては一切予断を許さぬ状態であることは明白だ。

なのに、それに対応できる南條先生が、……設備が足りないと漏らす……。

「あ、ぐう……！」

「紗音ちゃん……！」

呻く紗音ちゃんの手を握り締める。

顔色は……土気色と言っても良く……嘉音

君と、同じような色だ。そして、呼吸も浅

く、弱々しい。

……目を離せば、その一瞬で息を引き取ってしまうのではないか、とすら思わせる…

…。

「ば……とら、さん……。わた、し……」

「喋らなくて良い、傷が塞がったら幾らでも話せる……!!」

「……いいえ……。私……、もう……」

「——ッ！ 馬鹿野郎、そんなこと言うんじゃないの！ まだ俺は、何の約束も果たせていないのに……!!」

じゃないと、俺は、一体何のためにこの島に帰ってきたってんだ……！

「……戦人さん……。……う、……こふつ、

……ごふつ……!!」

……ごぼつ……という、粘着質な音……。

弱々しい咳と共に、紗音ちゃんが赤い液体を吐き出す。

べちゃり、と俺の袖に降りかかったそれが、じわり、じわり……と拡がって、嫌な質

感だけが増していく。

「戦人さん、強心剤を打ちます。紗音さんの腕をこちらへ……！」

「ああ……！ 紗音ちゃん、今南條先生が出血を止めるための注射を打ってくれるからな

……！ 気をしっかり持て……！」

紗音ちゃんは右腕を壁側に、左腕を俺達の側へと投げ出して倒れていた。

俺が握り締めていた左腕を南條先生の前へと動かすと、南條先生が慣れた手つきで袖口

のボタンを外し、腕を露わにして注射を打つ。

ゆっくりと紗音ちゃんの腕へと注入されていく液体を固唾を吞んで見守るが、俺にはその液体が何の効能を持った薬なのかすら分からないのだから見ても仕方が無い。

南條先生が針を抜く。俺は促され、止血のためのガーゼで傷口を押さえながら紗音ちゃんの手を再び握る。南條先生は杭を動かさないように苦心しながらタオルで胸元を押さえ、俺の方を見た。

「……強心剤は打ちました。しかし……。……意識を失えば……。それが最後でしょう……。どうか、話をしてあげてください……。」

ぼつり、ぼつり……。と。呟くように、漏らす言葉に、俺は力無く頷く。

「……ああ……」

……それは、……実質的な通告だった。
……意識を失えば、それでももう終わりだと、言わんばかりの……。嘉音君の容態を見

て、首を振った時と同じように、……医師として、もう何も出来ることはない、という見解を示す、残念そうな顔で……。

「戦人さん……。私……」

南條先生が強心剤だというアンプルの中身を打ってくれたにも関わらず、紗音ちゃんの顔色は変わらない。

……それを見て、……。俺は、空いた手を強く、強く……。握り締める……。

掌に爪が食い込み、血が滲むほどに、強く

……。

婚約者を殺され、弟のように可愛がついた少年を失い、それさえ知らぬままに命の灯火を消されようとしている、俺の初恋の女性の無念を、僅かでも肩代わりできるように……。

この痛みを俺が感じている分だけでも良いから、彼女が安らかで居られるように……。

「戦人、さん……お願い、します……」

「……ああ……何でも言ってくれ……」

……だから、俺は……それを彼女が望むのであれば、何が何でも……いや、それこそ絶対“応えて見せなくてはならない……”。それが、六年間を無為にした、俺の責務の筈だから……。

「はん、にん……ベアト、リーチェさま……魔女は……」

「ベアトリーチェが……一九人目が居るのか

……？」

「……いいえ……。けれど……そう、です……。ベアトリーチェさまは、“い”るけれど

……“い”ない……魔女だから……ニンゲンの身体を、持たないんです……」

「“い”るけれど、“い”ない……？」

……どういう意味だ？

これが、何らかのダイイングメッセージのようなものである事は、既に察しがついていた。

紗音ちゃんを誘い出し、ここで杭を彼女に打ち込んだ奴が本当にベアトリーチェであるのなら、それは俺達の中の誰でも無い、19人目の筈だ。

しかし、本当に一九人目が存在するのであれば、その人物は一体どの時点からこの島に居たのか、という問題や、どうやって密室の状況を作り出しているのか、という問題に行き着いてしまう。

これに対して俺は使用人が共犯ならば……という仮説を一旦は立てたのだが、件の使用人は今姿を消している。

これが姿をくらまして犯行を続ける目的であれば理解はできる。犠牲者として選ばれ、姿を消したことにして裏から動く……そう考えれば、筋は通るのだ。

しかし、嘉音君は……真偽は置いておくとしても……誤射で楼座叔母さんによって殺害され、紗音ちゃんも今こうして胸に杭を突き立てられて倒れている。

それを踏まえるならば、残る使用人は三人。

源次さん、熊沢さん、郷田さん。

……やはり、共犯だから姿を消した、という安易な説はいまいち納得できない。そんな回りくどいことをする必要はない。犯人は銃火器を持っているのだから、使用人と合わせで不意を突けば、……少なくとも、客室に閉

じこもった俺達三人は数の利を使って始末できる筈だ。なのに、それは無かった。ならば……使用人は……共犯ではない……？

「ベアトリーチェさまは、魔女なんです……ニンゲンの身体を持たない、魔女……。杭を魔法で操って……これを……」

「……」

……魔法。

……確かに、テレビや漫画で見るような魔

法であれば……これまでの密室なんて簡単に

構築できるだろう。

だが、魔法なんて存在しない。

魔女なんて、“い”る訳がない。

だから、紗音ちゃんという“魔法”とは、

魔法に見えるだけの、何らかのトリック、もしくはトラップの筈だ。

「……信じられませんか……？」

「……ああ。魔女なんて、いねえ」

「……ふ、ふふっ……。戦人さんは、きつと

……そう言うと思いました……」

俺の言葉を聞き、紗音ちゃんは弱々しく微

笑む。

……手の力が、少しづつ弱まっている。

約束された最期が、近付いてくる……。

「です、から……ねえ、戦人さん……」

「ああ」

「約束……。ベアトリーチェさまの、正体……

…、讓治様、を……殺した、犯人……見つけ

……て……」

……約束。

犯人を、見つけ出して欲しい。

俺がこの島にやって来て、これまでに二度

交わされた、約束。

それを今一度、紗音ちゃんが俺へと求め

る。

……俺に。……六年にも亘って、約束を反

故にしていた俺に。

まるで……、「その罪の精算をしろ」と…

…。運命がそう告げているかのように。

「おねがい、します……しんじつ、を……」

……もしかしたら……。

それが、俺がこの島に戻ってきた理由なの

かもしれない。

事件が起こることは最初から決まっていた

……それを解き明かすために、俺は六年ぶり
におめおめと戻ってきたのかも、……しれな

い。

……そう考えて、その馬鹿馬鹿しい考えが、……ひどくしつくりと。

パズルの、根幹部分に嵌まるピースが見つかったかのように、俺の頭の中の歯車が、がっちりとはみ合い、……回り出す……。

……そうだ。きっと、それが俺の役割なのだ……。

「……ああ。約束する。『絶対』に、犯人を見つけ出すから……」

絶対。

……絶対。

それは、……何て儚い言葉なのか。

俺は、自分の宣言に、僅かに微笑む。

人は、人の社会では、必ず他者の影響を受けながら生きる。

良い影響も、悪い影響も。

必ず果たす、と誓った約束も。

必ず守る、と交わした約束も。

その全てが、他者という外的要因との関わり

りであり、同時に外的要因によつて、幾らでも破られる。

幾らでも、反故にされ得るものだ。

俺は、それを……よく、理解している…

…。

……約束を破ることが悪いことだと、親が子に教えるのは、恐らくは人の社会の中で、“それ”が。約束が、人を人という個別の生命体ではなく、人間という群体へと成立させることを、そこまでの人生経験で、……言語

化しているかどうかは兎も角……、理解しているからだ。

守られない約束も、守るつもりのない約束も、……守れなかった約束も。

それは、履行されなかったという意味では、等しく罪なのだから。

だから、親は、我が子に罪を背負わせぬように、約束の遵守を説くのだ。

大人になるということは、それまでの人生で様々な罪を背負ったということなのだから、せめて我が子には……、と。

そして俺は、幾度となく約束を破ってきた
自覚がある。

親からの言いつけ。

友人との待ち合わせ。

教師達との締め切り。

……………、かつての、約束。

そんな俺が、今、**“絶対”** という言葉を用
いたのは……。

それが、儚い幻想だと識っているにもか
わらず、それを使ったのは、きっと……。

「……………よかった……。ばとらさん、約束、す
ぐ忘れちゃいますから……」

やくそくですよ……？

うそついちゃ、嫌ですよ……？

……そう囁いて。

……柔らかに、微笑んで。

ゆつくりと、瞼を閉じた彼女の眠りが、その最期が……穏やかであって欲しいという、祈りと決意に依るものだったのだろう。

それをそつと乗せ、立ち上がる。

「……ああ、絶対だ……」

“character.7” が更新されました

手を、そつと離す。

……その手が、だらりと溢れることを許せなかつたのか。

……涙は、出ない。

俺は、彼女の腹の上に未だに暖かさの残る

「……南條先生、紗音ちゃんを頼む。犯人はも

う逃げちまつてるかもしれないが、あの扉の先に何かあるのか確かめておきたい」

……だが、その冷たさで、俺のやることは、

俺が、警察が来るまでにやるべきことは決まった。

紗音ちゃんの死を悼むこと？ 違う。

憤りを撒き散らすこと？ 勿論違う。

俺がやることはただ一つ。

“絶対”に、犯人を見つけ出し、その犯行の

全てを人間によるトリックで暴き尽くすこと。

魔女を名乗る犯人、そいつが主張する幻想。

その一片までをも否定する。

犯人が何を思つて、何のメリットが有つて

魔女を名乗るのか。

そんなことはどうでも良い。

ブツ消してやる……！

扉へと向かう歩みに力が入る。

……待てよ。そういえばあの扉……。

「……」

改めてボイラー室の奥の扉を見て、先程からの既視感に思い至る。

念のために、と麵棒を再び手に取り、そっと僅かに開いた扉に指をかける。

一つ思い出したことがあった。六年前より

も更に前、俺が十かそこらの頃だ。親族会議で

この島に集まっていたとこ達で館の中を隠れん

ぼ、或いは探検と称してうろつき回っていた

ことがあったのだ。

そしてその時、俺は恐らくあの先を見てい

る筈だ。

……あの先は恐らく……中庭、か……？

ぎい……という音と共にその隙間を抜けた向こう側には、酷く粗末な登り階段があり、人の姿はない。

「……くそっ……！」

その先は案の定、中庭に繋がっていた。

採光のために設けられたスペースなのだろう。それほど立派な作りのものではない。

四囲が壁に囲まれている関係上、暴風は入ってこず、……ただパラパラと、涙のような雨が俺へと降りかかる。

ぐるり、と四方を見渡せば、今俺が開けた扉の他にもう一つ扉がある。

……恐らく、犯人はここから逃げたのだろう。

外からは繋がっていないという構造上仕方

のない話だが、……もう一つの扉にも鍵はかかっていなかった。

つまり、犯人はボイラー室に隠れなくても、一切苦労することなく逃げることできたということなのだ……。

だからだから、俺達の先程の躊躇は、全て……

……無駄……。

「くそつ……畜生……ッ!!」

……俺は、壁を殴りつけながら、押し殺して
叫ぶ。

……怒鳴り散らしたかった。

……みともなく喚いて、情けなく泣き叫
びたかった。

紗音ちゃんを見つけた時も。

嘉音君が腕の中で力を失った時も。

親父達の死体を発見した時も。

今朝、六人が部屋の中で殺されていると発
覚した時も。

……もつと、俺は、ガキのように泣き喚きた
かった。

……けれど、俺は、それができなかった。

……誰かが死ぬ度に、頭の中にいる冷静で
冷徹な自分が、囁くのだ。

「そんなことをしている暇があれば、考えろ」
と……。

……だから、今も。

「……………」

雨に打たれながら、……俺は、考える。

……紗音ちゃんの胸に突き刺さっていた、
あの杭……。

詳しくは知らないが、悪魔的な装飾が施さ

れていたように思う。

杭。刺殺。刺す、貫く、決る、……………待て、

決る？

決る、というワードに脳内で到達した時、直
近で得た何らかの情報とそのワードが結びつ
くような感覚があつた。

「……決りて、殺せ……」

そうだ、どこかでそんなフレーズを見た筈
だ。

どこかで……。

「第五の晩に、……決りて殺せ……。……そう
か、碑文か……。！」

そうだ、碑文だ。

玄関ホールの、馬鹿でかい魔女の肖像画と
共に置かれた怪しげな碑文。

その中に、決りて殺せ、というフレーズが
あったのだ。

昨日の昼間、真里亞にそれを教えられてい
たのを思い出す。

……ああそうだ……。

やはり、最初から碑文の通りじゃねえか。

朝に発見された六人は碑文の「鍵が選びし
六人を生贄に捧げよ」だ。

親父と霧江さんは「残されし者は寄り添う
二人を引き裂け」。

そして紗音ちゃんは「第五の晩に、胸を決り
て殺せ」。

偶然の一致にしてはやけに状況に合致して

いる。

……これを素直に受け取るのであれば……
やはり、今朝からの一連の事件は……、あの碑
文に沿った、何らかの見立て殺人、ということ
なのか……？

……見立て殺人。

ミステリーなどで時折描かれる、特定の何
かに沿って事件が装飾された殺人のことだ。

江戸川乱歩などは童謡殺人、筋書き殺人、な
どと表したが、意味は同じことだ。

何らかの事柄に見立てて事件が発生するた
め、連続殺人になる傾向があるが、しかし、現
実でそんなことをやっていれば当然犯人の証
拠が発見される可能性が増える訳で、少なく
とも俺が知る限りそんな事件が発生した、と
いう報道は寡聞にして聞いたことがない。

有名な作品としてはやはりあれだろう。

ミステリーの女王として名高い女流作家に
よって一九三九年に刊行された、孤島に招か
れた十人の人物達が童謡に沿って殺されてい

く、という作品だ。

……そういえば、あの作品は登場人物達が
孤島や山荘などに閉じ込められた環境下で殺
人が発生する、という「クローズド・サークル」
と呼ばれるジャンルの要素も多分に含んでい
たな……。

朝方、俺は六人の死体が発見された後に「出
来の悪いミステリ小説みてえな状況だ」と、犯
人が島内に潜んでいる可能性を鑑みてぼやい
たが、なるほど、現状は俺が思っていた以上に

ミステリ的な状況らしい。

……D.N.オーエンの例で考えるなら……魔
女を名乗る犯人は、やはり人間なのだ。

……かつて、紗音ちゃんとミステリについ
て語り合った頃、D.N.オーエンなる人物につ
いて語り合ったことがあった。

あの物語は最終的に犯人による自白が内封
されたボトルメールによって真相が発覚して
終わるのだが、そのボトルメールが流れつか
なかったら、あの物語はどのように終わった

のだろうか、という話だ。

島内部の人間は全て殺されていた。

だから、自白がなかったのなら、それは被害者以外の人物が犯人だ、という可能性を大いに高める結果となっていただろう。

……今のこの状況は、あの物語に良く似ているように思う。

ならば、つまり……俺はここで、チェス盤をひっくり返す。

魔女の幻想を主張する何らかの人物が存在すると仮定した場合、そいつはわざわざ魔女の仕業に見せかけて犯行を起こす必要などない。

魔女が存在する、ということにしたいのであれば、最もシンプル且つ最速の一手が存在する。

……それは、俺達全員の前で姿を顕わして、そして魔法の存在を見せつけること。

なのに、それをしない。

ならば、やはり魔女はいないのだ。

全ては、魔女を名乗る人物が人間には不可

能に見せかけているだけの事件でしかなく、
そして魔女を名乗る犯人は何らかの理由で
「魔女犯行説」とでもいふべき物の信用性を
高めるために碑文に沿った事件を繰り広げて
いる、という推理が可能になる。

そして、……恐らく、これは正しい。

魔女が本当に存在する、という絶対があり
得ない反則手を犯人が繰り出してこない限り、
本当に何らかの黒魔術的な儀式の遂行である、
という可能性はそもそも存在すら許されない
のだ……。

「……第五の晩……。待てよ、紗音ちゃんが第
五、なのか……？」

しかし、そうなるとおかしいことがある。

紗音ちゃんは胸を杭で抉られて殺されてい
た。つまり「第五の晩に、胸を抉りて殺せ」な
のだ。

親父達が第二の晩に沿って殺された犠牲者
だとするのなら、第三、第四が空白になってい
る。

第三の晩は確か、「残されし者は誉れ高き我

が名を讀えよ」だった筈。

文面の内容から考えて死人が出ないのだとしても、その次の第四の晩は「頭を抉りて殺せ」だ。

「……まさか」

……そして、其処までを頭の中で組み立てて、有って当然の可能性に行き着いた。

「俺達が発見できていないだけで……どこかで既に頭に杭をブツ刺されて死んでいる犠牲

者がいるっていうのか……!?」

ふざけんじゃねえ……ふざけんじゃねえぞ

……!

人の命を一体なんだと思っていやがるんだ

……!!

「畜生、畜生が……ッ!!」

再び壁を殴りつける。

「人を殺すってのが、どういうことだか分

かつてんのかよ……!! 人は、殺したら死ぬんだぞ……ッ!? 死んだら生き返ったりなんかしねえんだ……ッ! 折った枝が生え替わるみたいにやお、またによきによきと元に戻ったりするとも思ってたのかよッ!? 畜生ッ……!!」

何度も、何度も、殴りつける。

……殺された人々の痛みを、少しでも肩代わりできるように。

……人は、死ぬ。

それは、言葉の上では、その人物という単一の生命が、いなくなったことを示す。

だが、人は、一度死ぬだけではないのだ。

確かに、人の命は一度しか失うことができない。

一から〇になってしまえば、もうそこから減ることはない。

しかし、人は……その人のことを知っている誰か、覚えている誰かが、その死を告げられる度に、……また死を迎えるのだ。

覚えていた誰か、知っている誰かの中で、

「生きている人」として記憶されていたものが、「亡くなった人」へと書き換えられて、人は死ぬ。

……だから、人は一度しか死ねないにも関わらず、何度も、何度も……死ぬことができるのだ……。

ならば、それは穏やかな死であるべきだ。

ベッドの上で、家族に囲まれて。苦痛も何もなく、何の後悔も無く死ぬ。

それでこそ、遺された者達は、その死後の安

寧を祈ることができるのだ。

そうでなければ、人は……、悲しむ、という行為によつて自分の中での摺り合わせを行わない限り……、その死後の祈りすら、捧げることができないのだ……。

「……くっそおおお……!!」

俺は、吠えた……。

風の吹き込まない中庭で、雨が涙を誤魔化してくれるように……、上を向きながら……。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「……悪い、南條先生」

頭の冷えた俺は、ボイラー室へと戻る。

……室内には、横たえられ、白いハンカチが被せられた紗音ちゃんの遺体と、……そしてその近くに出血を抑制する意味がなくなったことで引き抜かれたのだろう杭が転がっていた……。

「……いえ、私こそ何もできませんだ……」
「良いんだ……南條先生は悪くねえよ……」

……南條先生は、俯いてぼそりと呟く。
表情は読み取れないが、その声には色濃い悔恨が滲んでいた。

「……南條先生、凶器は、これか……？」
「……なんとも言えませんが……紗音さんはこれで刺された、というようなニュアンスのことを仰っておりますが……」

俺は、杭を拾い上げる。

指紋が付こうが最早どうでも良かった。

切っ先にべつとりと血の付いたそれをしげしげと眺める。

悪魔的な装飾よりも、俺は寧ろその切っ先の形状に注意を惹かれた。

「……杭、……刃は無い、か……」

間近で見て、南條先生のその言葉の意図を理解した。

紗音ちゃんの胸に刺さっていたそれをちら

りと見た時に杭と言ひ表した俺の感覚は間違っていないかったらしいが、実物は想像よりも太いのだ。

もっと、アイスピック的な細さならば服を貫通して突き刺せるかもしれないが、こんな物を一息で人体に突き刺せる奴がいるとしたら、それはとんでもない怪力を持つ怪人物だろう。

……血の色は、少しずつ変色しはじめていた。

赤黒く染まりつつあるそれを見ていると気

分が悪くなるような感覚がして、それをそつと置き直す。

か、俺達はなんの手掛かりも得られていない……。

「……行こう、南條先生。下手すると他にも犠牲者がいるかもしれねえ」

「……確かに、結局源次さん達は見つかりませんでしたしな……」

「ああ……。それに、棲座叔母さんと蔵臼伯父さんと合流しておきたいんだ。今回は犯人と出くわさなかったが、やっぱり銃を持った大人と一緒に居るのが一番安全だろうぜ」

そうだ。このボイラー室にいるのは、紗音ちゃんだけなのだ。

源次さんも、熊沢さんも、郷田さんも、どこ

に行ったのか……。或いは、連れて行かれたの

……もつとも、その銃を持っていた筈の親父達は、俺が部屋を出た直後に殺害されているのだが……。

銃を持っていたても、閉じこもっていたても、魔

女の魔の手は届く……そう言いたいのか、犯人は？

紗音ちゃんにちらり、と視線を向ける。

薄暗く、近い距離でなければ互いの顔すら良く見えないような、こんな劣悪な環境に彼女を放置するのは好ましくない、好ましくないが……。

「……………ごめんな……」

俺と、南條先生の二人だけで、紗音ちゃんを

運ぶのは……あまりにも危険に過ぎる。

今は、仕方ない……。

……後ほど、より多くの人数でやって来て……もっと過ごしやすい場所に、……ベッドの上などに、移動させてやりたい……。

そんな迷いを、……過去の未練ごと振り切って、俺達はボイラー室を出る。

じめじめとしていた不快な空気は消え、明るい照明の下に出たことで、どっと疲れが襲ってくるような感覚があった。

俺は少しだけ気を緩め、ほう……と息を吐く。
そしてそのまま何の気なしに窓を見て、碌でもないことに気が付く。

……否、この赤さは……まるで、俺が自ら犠牲者達に手を下したかのようだ……。

……親父、霧江さん、嘉音くん、紗音ちゃん

の四人分の血が全身にこびりついているのだ。

白い服を着て六軒島にやって来てしまったことも相まって、非常に目立つ。

そこまできを考えて、飛躍した思考が変な場

古びて黒ずんだ血痕、まだ新しく紅色を残す血痕。

所へと行き着く。

深夜にこんな格好の奴に出くわしたら、恐らく俺も悲鳴を上げてしまうだろう……。

……俺の役割が、事件を解決することだというのなら……。

俺がいなければ……それは誰へと託されたのだろうか……。

もし、もしもだが……この役割が、この六年の精算であるのなら……。

……俺が、この島に来なければ……事件は、起きなかった……？

「つは……」

馬鹿馬鹿しい。

なんでそうなる。

俺が六年ぶりに返ってくるのが、どうして事件に繋がるというのか……。

考え込むこともなく、その馬鹿な可能性を胸中ですぐに否定する。

やはり、疲れているのだろう。

肩が重い。目も少しだけだがしばしばとする。

……ああだめだ……自覚したら急にだるくなってきた……。少し、休みたい……。

生存者で集まったら……少しだけで良いから、仮眠を取りたい……。

「……戦人さん……一つよろしいですか？」

「ん……いいぜ……何すか、南條先生……？」

髪を拭いて、できれば着替えもしたい……。

いやだめだ……いとこ部屋には六人の死体があるのだから……あの部屋には戻れない……。

……。

「……老いぼれの戯言として聞き流して欲しいのです……」

「……もしか、戦人さんは……」

……その後につけられた言葉を聞いて、そんな俺のぼんやりとした感覚は一瞬で霧散する。

——紗音さんのことを……。

……背筋に、氷柱をねじ込まれたような錯覚を抱く。

「……へっ、何の話だよ南條先せ……」

「……」

……」

咄嗟に誤魔化そうとするものの、……静かに、こちらを見つめる瞳は、悲しげで、寂しげな、痛ましさに満ちていて……。

……どこかで、見たことがある目だった。

……ああ、そうだ……お袋の……主治医が、俺を見ていた時の視線が、きつと近い……。

遺された者を、痛ましげに見る、それだ……。

「……………昔の話だぜ。六年前の、昔の話さ

……俺は、その瞳に……何を思ったのか俺自身も知らないまま、誰にも告白のできなかった、僅かな未練を、初めて人に漏らす……。

今の紗音ちゃんは、譲治の兄貴と良い雰囲気だと六年ぶりに島に帰ってくる決まった際に朱志香から聞いていた。

だから、俺は覚悟はしていた。

約束を果たすにしても、それは過去の清算であって、ここから先に進むことはないのだ

ろう、と……。

た……。

……だが、その機会は、……失われたのだ……
…。

……今は、楼座叔母さん達と合流しなくてはならない……。

「……昔の話だぜ。……だから、今は……犯人
を見つけることで、報いてみせるさ……」

……雨は、止まない。

「……そう、ですな……」

涙のように窓ガラスを伝っては、新たな雫
を振り落とす。

俺の決意に対し、やんわりと同意して、……
それっきり、南條先生は口を開かなかった。

……嵐によって外界から隔絶された六軒島。
その中に降りしきる、雫達。

そして俺も、口を開きたい気分では、なかつ

……それは、まるで……六軒島という箱庭

の上で、誰かが泣いているかのようで……。ならば、その涙を流している人物は、……一体誰なのか……。

愛する者を失った誰か。

愛し合う機会を失った誰か。

……恋を、愛へと育むことすらできなかった、誰か。

答えは、出ない……。

いや、俺は……出したくないのかも、しれない。

俺の、俺自身の想いを、自覚したくないのかも、……しれない……。

……雨が、降りしきる中……俺達は、無言のままに、客間への帰路を進むのだった……。

Forgery No.XXXX-

Imitation of the golden witch

く黄金の魔女の模造品く（上） 完

（下）へと続く。